

有効である。しかし無断で、他の地域の病院にかかると、すべて実費を支払わなくてはならないらしい。

岐阜市市橋新生町十五の一在住

四十年のごぶさた

内田ラク

(旧姓 板橋)

大正十二年から昭和五年まで、お世話様になりました板橋でございます。呼十九才の娘で教壇に立たせていただいたのでございますが、心臓の程がうかがわれます。第一回に担当させられました六十余名の二年生は、菊谷博君、尾山春雄君、丹羽春よさんたちだったと覚えております。その子供さんがご成人されて六十才近いと申されますから、何才か年上である私がバアサンになるとは決して不思議ではございません。

子を持って知る親の恩とか申しますが、私は子を育てて知る「教師の責任」を強く感じました。師範学校で教

わった通り先生としての任務遂行に八年間毎日懸命の努力を捧げたつもりでございましたが、受け持った皆様のご立派にご成功あそばしていただけるとは思いますが、責任の重大さを感じています。大阪で家庭人となつてから、何だか足が重くなり、筆不精となり、お仏飯までご馳走になつた下切の下宿、宝林寺様(住職石屋良仙尼)にもとうとう四十幾年の音信不通となつてしまいました。このたび岐阜市加納の在所へ来なければならぬ用事ができ突然やってきました。汽車の中で結構お年をめした尼僧様と隣席し、頭の中を離れない石屋先生にお目にかかりたい気持ち、わくわく湧いてくるではありませんか。ご無沙汰の一切を捨てて、下切へ御伺いすることに決心しました。

八十才の老尼様とは思えないご元気なお姿

「先生ごめんさい」

と泣いてだきつきました。二人は抱きあつて無言の瞬間「四十年のごぶさた」を一夕にして語り尽くせるものはありません。翌日は知人の幾人かを呼んでいただき、泣いたり、笑ったり、全く童心にかえりとも申ししまし

ようか。大阪弁がどこかえふつとんで昔の前宮弁がすらすら出るようになりました。話題は次から次へと切れ目がありません。

それにしても学校でお世話になりました先生がた、永田新兵衛校長先生、横山鳳潤校長先生、報徳会の丹羽久克、遠藤亮一の両先生、スポーツの好きな小野木紋一先生の方々が故人であることは驚く外ございません。それに加えて教え児の何十名が戦死されたと聞いて感無量のものがございます。只管ご冥福をお祈り申しあげるものでございます。将校さんの加藤嘉雄先生が少年団、青年団、在郷軍人会、青年訓練所等に昼夜の別なく活躍になつた話題が出たとき、頗るご元気で、今小学校の百年史編纂に努力されていると、ではお声なりともと電話を入れましたら、声だけでは満足できぬからとすぐ自転車で飛んでいらつしました。第二夜も七名の集いで、夜の更けるのも忘れ昔話がはずみました。扇風機は全力で廻転してくれますが、暑い暑い口から離れませんでした。

二三日滞在させていただいて、辱知の皆様にご挨拶申

しあげたいと思いましたが、すでに前渡にお立ち寄りすることが予定外でございましたので、三日目の朝早々においとまごいをし、前渡へ来る足が軽くなった道が開けたので、度々お邪魔することを約束いたしました。

大阪に居ると申しましたが、実は山梨県に移住しました。それは土地の産業に大きく関係があるからでございます。「山梨バインド線製作所」の看板を掲げています。バインド線とは

針金にプラスチックを巻いた線です。果樹・蔬菜誘引用にしばる針金ですから、太さも各種、色も様々、長さも作業に適するようになっていきます。葡萄の産地山梨県を相手に進出してまいりました。葡萄蔓の結びつけや誘引に至極簡単に便利に然もきれいに、一ひねりで止められます。二ひねりすれば尚丈夫に、強力止めなら両端を開いておくなど、何時でも、何処でも、誰にでも、疲れを知らず、楽々と、誘引自在で、再使用も可能、一番安くて、然も早く、一度使ったら絶対よろこばれる「バインド線」の製作工場でございます。特製ポリバンド・ポリ袋その他資材一式もございます。商売気を出して恐

前でございますが、お申付けくださいますならば、すぐサンプルをお届けいたします。農家の方々一度ご試用してみてください。

小学校百年史の内容を加藤先生から詳細承りまして、共に歩んだ処女会のことや、報徳会のことなど思い浮べてすぐにもほしいと思いましたが現在第一印刷の校正中であるとのこと。又無理して私に一頁をくださるということでしたので、一夜漬けの素稿を差しあげたわけでございます。

紙面をおかりして「四十年のごぶさた」をおわび申しあげます。

(山梨県山梨市下神内川二〇八)



若かりし十代の思い出

遠藤貞子

(旧姓 丹羽)

開校百年祭というおめでたいお便りをいただきまして

ありがとうございました。

こちらに嫁いでから、今年の十二月二十七日で満五十年という長い歳月を、那加の石山の裏ですごしました。主人がいたら金婚式という所ですのに残念であります。

この長い年月、私の頭から常に忘れられないのは前渡お不動様の鐘の音、あの堤防の下にあった母校の庭の藤棚、松の木、大きな杉、直七さんのお店の近所の様子、学校の諸先生、同級の皆さんの面影等いつも思い浮べて、なつかしく思っています。私は娘時代に前渡の高崎医師の令夫人敏子様色々なことを教えていただいたことです。ほんとうに教養のある立派な方でした。特に料理をよく習いました。いっお伺いしても朗らかに笑って、御主人の気の短かいお話をはなしてはこれで胸がすっとしたといっは笑って居られました。私を自分の娘のように可愛がって下さいました。私はよい先生にめぐり会って幸福だと思つて過しました。お別れしてくる時ご自分の経験から人生には必ず苦境に立つことが度々あるの、その時はよくよしないで静かに目をつぶって、今神様が自分の力をためていらつしやるのだと思つて、よ

く考えて何事にも堪え忍んで下さいと教えて下さいました。その通り主人は昭和二十年二月に岐阜市役所から帰る途中梅林の駅で急死。昭和三十四年には嫁が四才と一才の男の子を残して病死しました。次々と苦しいことに出会いました私には、よい教訓でありました。奥様は何でもよく出来る方でしたが、その中でもお手製のお茶の味は格別でありました。今でももう一度およばれたい位よい香りでした。そして毎年お正月がくると思っています。先生の家の裏座敷の新築記念のかるた会、すばらしかったです。永井すま様、愛子様、石屋先生、私、お医者様、奥様と夜おそくまで面白くやりました。あまり帰りがおそいと心配して永井正夫様、直衛様、私の父みんなマントを着て提灯を持って迎へにきました。むかえに来た父達も一緒になって歌留多会に参加し夜おそく親子連で帰つたことがあります。その人はみんな故人で、私と石屋先生だけ元気で居ります。

次に思い出深いことは、ほんの短い期間でしたが先生として勤めさせていただいた時のお話。永井牛太郎校長先生が転任された後、永田新兵衛先生が校長になられま



山頂から現小学校を脚下に前渡西町一帯

した。その時どうしても校長先生といえなくて永田先生という、丹羽久克先生がそれ罰金十銭といわれましたがどうしてもいえずに困りました。ほんとうに優しく親切でよい先生でありました。村上元之丞先生、丹羽久克先生、二宮友藏先生は小学生から大変お世話になりました。遠藤亮一先生とは四月から十二月まで一緒にいました。その頃お豆腐が一丁二銭五厘でお醤油付で三銭でした。いつも遠藤先生が直七さんの裏坂（ひよどりこえ）からお弁当のおかずを買ってきて下さいました。冬になると先生七人と役場の佐々木さんと八人分のお味噌汁をつくりました。毎日豆腐二本あげ二枚むしいわし少々と野菜を入れて作るだけでしたが、暖かく永田校長先生は特に舌鼓を打っておあがりになりました。その頃はお豆腐やあげが最高のご馳走でありました。その次に下切出身の仙石寿克先生、この先生は授業がすんでから岐阜まで自転車で築前琵琶を習いにいってみえました。今から考えると大変だったと思います。一曲上ると先生方にきかして頂きました。それがたのしみで今でも忘れません。美声で扇の曲が耳に残って居ります。早く他界せら

れて残念であります。私も琵琶が好きで四十九歳の時、四十九才の岐阜の田中旭照先生に一ケ年習いました。先生は今も元気でみえます。それ以来二十年空白にした琵琶又思い出してこの頃直しました。七十近くなって再入門するかも分りません。外に後藤政一先生、飯沼峰先生、加藤うら先生も一緒に居りましたがもう故人であります。長縄正雄先生はお別れしてから一度もお目にかかりませんが、途中で分れてきた組の生徒さん永井弘道さん、長縄一郎さん、日比野栄一さん、小沢均一さん、永井志ゆんさん、やゑさん、田中すみゑさん、皆さんお元気でしようか。体操の時間に前の河原の松林へ松露取り、お不動様へいってきのご取り、裏の野原でのわらび取り、たのしい思い出一杯ありますが、皆様の御健康をおいのりして筆をとめます。

りました。田中桂先生、足立長閑様だと思いますが、妹生前の御厚情をこの紙上をかりて厚く御礼申し上げます。市内那加山後町在住

今年は私に取って忘れることの出来ない年であります。すぐ近くにいた妹久子が四月十八日に病気で他界いたしました。いつも同窓会があると楽しんで出かけ帰ってき

ては土産話をしてくれましたが、もうそれもきけなくなりました。私は、他の学校に勤務したことがないので、他との比較は出来ませんが、学校はそれ／＼その地域の特性によって育って行くもので、前宮には前宮特有の気概がありました。

想 い 出

遠藤 卓朗

私が、前宮小学校、並びに青年学校に、勤務を拝命したのは大正十四年四月で、願出に依り退職したのが昭和十九年十二月でしたので、二十年間奉職したことになります。

前宮の印象、小学校、青年学校の思い出としては、数限りなく……という程次々と浮んできますが、特に今も忘れ得ぬ記憶の一端を挙げてみましょう。

一、最初赴任した時、先生は僅か八人でしたが、退職する時は、児童数に大差はないが、段々男女別学級が多くなり十六人でした。

進取の意気が村当局始め各階層に燃えていて、国や県の指導方針に副って、あらゆる運動、活動を他に先んじて参加協力、而も全村一致して推進して行くという、積極的な気風がありました。又質実剛健を尚ぶ精神も徹底していて、体育活動にも深い理解を得たことが、私共の活動に、如何に励ましになり、効果的であったことか。全面的な後援、激励こそ私共の教育活動の根源であったことを今更深く痛感いたします。

一、大杉の下、あの小さな学校、村役場と共用校舎の教室を合せて八教室、裁縫室兼各種団体会議室兼直室、職員室、計十室で、どれも老朽校舎というより危険校舎（当時の学校はどこも同じ程度の校舎だった）、一周百五十米にも及ばない狭い運動場で、野球に、陸上競技に、目覚しい成果を挙げていました。

隣りの草井小学校で行われる野球大会、陸上競技大会には、名古屋、岐阜、一宮等からも、それ／＼強豪優秀なチーム、選手が参加しましたが、我が前宮も毎回出場し、遜色のない活躍をしていました。

この頃は、富国強兵が国是で、国民精神作興に関する詔書、又特に教職員には、健全なる国民精神の養成に、その成果を期待する旨の令旨も相次いで下され、我々職員会議では必ず令旨を奉読してから開会するという時代で、当時の教育が現今の自由教育とは全く異なった硬教育であったこともこの時代の特色でありました。

一、現在地の新校舎（といっても現在の岐阜高校の廃校舎）へ移ってからは、他校に先がけて、校内放送、又映写機も買入れて映画による情操教育も取入れられました。今も校庭に、学校の位置を示す、石柱の標識（東経、北緯、標高）がある筈ですが、その測定にあたり、標高の基準は、矢熊山頂の三角点で、当時の高等二年の諸君と、何回も山へ登り、山を降って測定しました。而も使った測量機は、当時役場にあった、水準器もな

い平板測量機でしたが、得た数値には、今も自信を持っていきます。私だけが知る私の在職記念物です。

一、当時、在郷軍人会は上等兵会で、補充兵以外は、総て上等兵以上だったので、創設された青年訓練所でも、「先輩に負けるな」と訓練に励み、第一回卒業年が三人も伍長に特進して錦を飾り、除隊する程でしたので、益々意気揚り、訓練にも熱がこもっていました。

戦線が拡大され、時局が緊迫するに従い、「戦力増強」の一策として、青年学校にも「戦技訓練」が奨励されましたが、稲葉郡で参加したのは、我が前宮だけでした。

而も、その成績たるや抜群で、各務原球場で催された、県下中等学校、青年学校の合同強化訓練にも、選ばれて参加し、その後の競技大会で、手榴弾投擲班は、中等学校をも押えて第一位の殊勲を挙げ、他の土囊運搬、障害競技もそれ／＼優秀だったので、県下一の優秀校に授与される「修文錬武」と岐阜県知事揮毫の錬成旗も獲得しました。

静岡県草薙球場で行われた東海大会、更に甲子園南

運動場で催された、西日本戦技訓練大会（時局重大の折だけに、大集団の全国大会は行われず東西二ヶ所で行われた）には、岐阜県代表として、恵那郡の坂下、武並と共に、練成旗を押立て駒を進めました。

射撃、銃剣道、相撲等の競技も亦大活躍、稲葉郡の大会にも、岐阜県大会にも、常時出場し、模範校として常に注目の的となり、誇りを保っていました。

射撃は、名古屋で行われた東海大会、更に選ばれて東京での全国大会にも出場する等実に華々しい活躍をしていました。

青年学校の卒業先輩が、現役中に銃剣道で聯隊第一位、旅団第一位、師団第一位等々の輝かしい榮譽を聞く度に、在校生が「先輩に負けるな」と奮起精勵し、前宮の名を弥が上にも高揚したものでした。

稲葉郡二十数ヶ町村中、人口、児童数からみて最小の部に入る前宮が、どうして斯くも、輝かしい成果を挙げることが出来たのでしょうか。

これは偏へに伝統の力であり、更に不屈の精神で、昼間は家業に励み、夜間練習に次ぐ練習で築き上げた

成果であり、家業を顧みず選手を参加せしめられた父兄、先輩指導者の適切な指導、又全村挙げての熱烈な激励、後援の賜物でありました。

今、稲羽東小学校創立百年記念誌発刊の快挙を聞き、誠に欣快に堪えません。

勝景不動山、清冽木曾の流を偲び、親愛の情溢れた父兄、童顔、快少年少女一人一人の容姿が臉に浮び、回旧の歎びに浸っていますが、戦場に散華した諸君が浮ぶ時は、共に苦しみ、又歎びを共にしただけに、訓練に精勵し、軍隊成績も抜群であっただけに、さぞや勇猛、壮絶であったことであろうと思はれ、戦力の増強、高揚推進の一翼を担った一員として、胸をしめつけられ、感無量、唯々瞑福を祈るのみです。

「前宮」の名の消えたことは、返す／＼も残念なことです。前宮に生れ、前宮で育てば、たとえ星うつり時代は変わっても、前宮の特有精神は失われるものではありません。

先輩の残した、輝かしい歴史を、更に各方面に向上発展させ、前宮の名が、稲羽東の名が弥が上にも高揚され

ることを熱望します。

小学校以外の事にも触れましたが、これらも総て、学校教育の背景であつて、これらの事象によつて当時の児童が、如何に感銘を受け、誇りを持ち、発奮したことでしょう。

「少年よ、大志をいだけ」の名言があります。

青少年のえがく夢は、その後の継続、努力によつては、必ず実現します。

稲羽東小学校が、栄光に満ちた、伝統に輝く前宮の温床として、栄えある創立百年記念を機に、思いを新にし、益々堅実に、一層の成果を挙げられんことを希求してこの稿を閉じます。

夢と夢　ともにみがいて　夢みのる

市内蘇原大島町在住

あの頃の思い出

遠藤 亮一

○古稀ものり越えて

学校を出たばかりのヒヨコが、この稲羽東小学校に赴任したのは、大正十年四月二日だった。もうあれから五十二年の歳月が夢のように流れてしまった。

この頃青年補習学校で週に一・二回夜学を担当した。後年市立那加第三小学校長を最後に勇退されて、今は悠々自適中の田中桂さんは、その生徒の一人だったと記憶する。「人生は古来七十年は稀れなり、故に古稀という」と、得意になつて教えながらも、凡そ古稀なんて自分にとっては、想像もつかぬ遙かな遠い存在だった。ここで八か年間二厄介になり長良小学校に転任したのは、昭和四年四月で前宮の学校長は横山鳳潤先生であつた。それからあちこち教育現場で三十八年間、郷土那加町の教育長を退任してからも既に十二か年経つた。今で

は古稀ものり越えて七十二歳の老人の仲間になった。

○新任当時のあれこれ

自分は坊主頭に海軍帽を載せ、紺サージの結襟服で自転車通勤だった。今の人には海軍帽そのものが分り兼ねるだろうか。夏ともなればカンカン帽といったところ、教師のヒヨコでチョンガー族には、まあこれ位がこの時代の相場だったように思う。背広を新調したのは二・三年経つた後のことだ。そのネクタイを結ぶのに一苦労したことを覚えている。自分ながらいじらしくなつかしい。

初めて仕えた校長さんは、蘇原町坂井の永田新兵衛先生、次席さん(教頭)は、前渡東町の村上元之丞先生、お仲間には丹羽久克先生、飯沼峰先生で、この四先生とも故人であられるのは、おなつかしくも寂しい。現存の方は石屋良仙先生と、丹羽(遠藤)貞子先生のお二人に自分を入れて三名である。このお二人には時々お目にかかれて喜ばしい。石屋先生は八拾歳の御長寿で慶祝に堪えない。

当時の学校名は、前宮^{尋常}小学校とて、尋常科六、高等科複式一の計七学級だった。職員数は前記の七名だが

ら、永田校長先生は確か尋常科二年生を担当してみえた。村役場の方は、乗馬村長で県下にとどろいた村上文雄さん、助役は田中常吉さん、収入係は佐々木秀一さん、書記は田中太蔵さんの四名だった。以上新任当時の最も印象深い方々の中で、物故された諸先生、役場職員各位の御冥福を心からお祈り申し上げる。

ここで特記したいのは、この頃の教職員の給料は市町村の支払だったことである。何れ全国的に小学校長各位は、どんなに御苦労されたことだろうかとお察しするに余りある。現時点と思ひ合せて今昔の感に堪えない。私は初任給五十円で就任した。その年の暮れに三円昇級して貰えて、五十三円の月給取りになれたのは少々嬉しかった。というのは新卒のヒヨコには今と比べて生活は大変に楽だったように思う。それは低物価に加えて生活様式も甚だ低かったからだ。尤も自分は自宅通勤で諸費一切皆無で、所得税などあろう筈もなく、只月々県納金とて九十銭と、職員親睦会費に、職員旅行の積立金位が少々差し引かれる程度だった。一円五十銭出せば普通の宴会が出来た。二円出せば豪華版の宴会だったとは嘘

のようである。

少し後の話だが大正十四年五月、上海、蘇州、南京地方と十二日間支那大陸の視察旅行をした、公式旅費、小遣錢に土産物料を入れて、全部で百参拾円でありた。故永田校長先生のお骨折りで、自分勝手な旅行に休暇と、思いもかけぬ村費で三十円の旅費を支給下さったとは、今でも感謝に堪えない。若き日の思い出の一つである。

○在職八年間のあれこれ

この間に大変にお世話になった多くの方々は何故かされている。只々御冥福をお祈り申し上げ次第である。

同窓会長加藤嘉雄兄は、本校で共に同僚としてお世話になった。同氏に特に印象深く残っているのは、前宮青年団長として活躍され、稲葉郡ピカ一の青年団に育成されたことである。これには故丹羽久克先生、故小野木紋一兄、故田中利三郎さん、古川守一兄等各位の並々ならぬ御努力振りは今も目前にあり／＼と浮んでくる。

故小野木紋一兄とは再三の御縁があった。先づ長森南小学校で、高等科三年を共に学んだのは最初の出会であった。次は加藤嘉雄兄と時を同じくして、本校で共に同

に、現市会議員の永井主計さんがあった。今もその個性を伸されて活躍中のことは同慶に堪えない。

温厚篤実で実行型の丹羽一郎さん、今でいう前向き積極的で明朗型の田中松太郎さん、このお二人は昔そのままに御健在のことは喜ばしい。永井良一先生は当時県外の御生活だったが、昭和三十一年に稲羽町の教育委員に就任されて、同じ郡内教育委員連合会のお仲間として、四か年間共に研鑽下さったことは記憶に新しい。

在東京の岩井 肇さんは立志伝中の方だ。前宮在任中には四・五回お目にかかった位だが、大阪毎日新聞の編輯顧問をしていられた時大阪本社でお目にかかった。毎年賀状を拝受しているから現在大学教授で新聞講座を担当されていることも、東京都下調布市深大寺町にお住いのことも承知している。よくぞ大成された感謝の外ない。

○共に学んだ人々

この学校で八か年在職中に共に学んだ人々は、補充授業で学んだ人を入れると千名以上にもなるだろうか。中には若くしてこの世を去った方々も数多くある。先づ以て物故された人々の御霊安かれとその御冥福をお祈

僚としてお世話になった。最後は後年同兄が前宮村長として活躍された時、自分は稲葉郡小、中学校長会長として、五年間側面から教育向上に同氏から御支援を得たことは今も忘れられない。当時の助役は五島伊久雄氏の筈だ。今は各務原市収入役の重責にある。教え子の一人として自重精進を祈る。

前宮在職中で特に忘れられないお一人は武山秀雄老師である。この頃京都の花田伸之助先生提唱による報徳会の普及も稲葉郡内ピカ一だった。各部落の報徳会に学校側は、永田校長先生、丹羽久克先生に自分と三名が交替で出席した。役場は主として田中常吉村長さんがつとめられた。武山老師（当時は若様）は各部落とも皆出席のおつとめだった。或る日私は武山さんによくも続くものだ、感心と、申し上げたら「遠藤君これも一つの布教だからなあ」と、今もお元気でその布教に熱情を捧げつつあられるのは、偶然ではなく敬服の外ない。御長寿をお祈りする。

古川守一兄は青年団長として、その円転滑脱の運営振りには目覚ましいものがあった。当時の青年団の論客の一人り申し上げる。

或る日補充授業で二年の組にいった時だった。恰度その日は紀元節の前日だったので、試みに明日は何の日かと発問した。実に元氣よくハイと挙手したのは下切の岩田サカエさんだ。指名したら「明日うちの煤掃きです」との回答で笑いもならず紀元節を説明した。旧正月を迎える当時の風景を物語る一コマでもある。

中村艶子さんはよくお目にかかる。昔のままの個性で明るくなつかしい。何事も理性的に判断する松波 裕氏今もその通りである。文字通りの温厚誠実型の丹羽美良氏、鷹揚型の田中寿夫氏、今時めく笠松小学校長の永井弘道氏には、たった一人の準備教育で大雪の思い出がある。というのは二月二十八日で日曜日だった。朝から小雪だったのが午后大雪になり、晩方は到底自転車など思いもよらず、六軒の電車と停留所に来たが不通で中仙道を徒歩で帰宅した。それでも終日共に勉強してよかった。故丹羽久克先生と、前宮小学校の少年野球はトップ記事の一つだろう。田舎の小さな学校と、岐阜市京町高等小学校と堂々互角に対戦したことである。投手丹羽民栄

氏、捕手故丹羽信吉氏の名コンビ、その他故坪内護氏も浮んでくる。これを書いたら際限がないので止める。

最後になって洵に申訳ないが、新卒のヒヨコが生れて始めて学級担任したのは、松波民市氏が級長で、田中志げのさんが副級長だった高等科複式であった。

深い教育識見とか、教育実践の体験とかさらさらあるのでなく、只言えることは、骨身を惜しまず、向う見ずに働いたことは満足している。この学級で初めて担任し、その上これ亦初めて卒業生を送ったことで、高等科二年の人々は特に印象深い。故長繩元英氏、松波券一氏、丹羽定男氏、堀吉一氏、田中光枝さん等の物故者、現存の人々は田中一良氏が松波民市氏と協力して、ここ二十数年来、毎年のように同級会を開かれる。その都度お招きを受けて自分は出席する。これには高小の別なく集られたので、直接担任しなかった、足立輝夫さん、足立寿夫さん、五島高雄さん（那加土山）等沢山の人にお心易くお願いしているのは喜ばしい。遠く南米のブラジルに在住の三輪光子さんが、万博見物のついでに帰省されたので、不動山で歓迎の同級会を催されたのは昨日のよう

だ。この年次の組は小学校一年から女の人が大変に多いことである。仙石久さん、仙石みすゑさん、白木ときえさん等多くの方が元気で喜ばしい。お名前を忘却した方は沢山ある。平にお許しありがたい。特にお願いする。
市内那加昭南町在住

開校満百年を祝して

加藤 龍勝

テクシー時代

私は昭和二十二年四月から同三十二年三月まで満十年お世話になりました。今から十五年——二十五年も前のことですから、はつきり思い出せないことも沢山あります。

何しろ昭和二十二年と云えば終戦後二年目で何んでもない不景気の時代ですから、六三制が発足しても教科書らしい教科書もなく、紙や鉛筆も思うように手には

ありませんでした。今の有り余る時代からは想像も出来ないほど欠乏していたし、マッカーサーの指令も厳しく、六三教育も全く暗中模索の有様でした。

私は不惑を越したばかりで働き盛りでしたから、テクシーで一時間許りのところから毎日通勤しましたが、別につかれることもなくひたすら教育方針の確立のため努力を傾注いたしました。保育園、小学校、中学校が同じ校地内で教室を分けあって仲よく日々を送ることが出来ました。その後何年かたった時、村長さんの好意で自転車の配給券を融通して下さったので始めて文明の利器を利用して通勤することが出来るようになりました。

有難かった茶の垣根

戦後のないないづくしの中に昼食事のお茶を数えなければなりません。何百人もの一年間のお茶は買えば馬鹿にならぬ額に上ります。他校では買えば高いし予算はなしで白湯を飲んでいと聞きましたが、前宮では手製のお茶で一年中たっぶりあり、随分羨しがられたものです。というのは校地の南、西、北の三方がお茶の垣根になっており、小学校はお茶つみ、中学校は蒸しと切つて干

す。というのが年中行事の一つになっており、お茶だけは充分飲ませて貰えたわけで、これも頭のいい先人のおかげだとしみじみ感謝していた次第です。

五目飯の味

当時堤防の南側に学校の水田があり、小中学校とも田植から収穫まで総動員で実習しました。供出のやかましかった時代ですが特別免除して貰えたので、とれたお米で五目飯をたいてみんなで舌鼓を打つ、という。これも忘れられない年中行事の楽しい一コマでした。

校歌が出来る

前にも申した通り六三制は発足しても、混沌としてよりどころがないところから、前宮にふさわしい理想をもちこんだ校歌を制定したいと考えました。

幸い詩文に長じておられ当時の村長小野木紋一先生が歌詞を作って下され、師範の音楽担任の先生が作曲を快諾して下さったので、それからは毎朝校歌を合唱してから勉強に取りかかることになりました。

修学旅行の思い出

この話をするときつと思ひ当る人があるでしょう。だ

んだん世の中が落付いて来て修学旅行が出来るようになり、楽しんで京都、奈良へと出かけた時のことです。

いつでもあることですが京都の宿につくと、京都へ嫁入りしている姉だという若い女の人が尋ねてきて、妹（六年生の女子）を貸してほしい。折角京都へ来たのだから家へ連れていきたいとのこと。「よろしい。八時までに連れて来て下さい。」と云うと喜んで二人で宿を出て行った。

さて、いつの間にか時間が過ぎて八時になった。もうそろそろ連れてくる時刻だがと思つて待っていても、八時半、九時、十時になつても一向姿を現わさない。

誘拐事件というものがなかつた当時のことだから、不用意にも姉さんという人の住所も（勿論電話も）聞いていなかった。探しようもない。明朝は七時半に宿を出て奈良に向うことになつていた。みんなね静まつたが私はちつともねられない。……

ふと、八時といつたのは明朝の八時と受け取つたに違いない。よし。朝八時まで待ってみよう。……

朝七時半、予定通り引率の先生と共に外の者は全員出

ました。

こういうことは学校や子供がいくら頑張つても駄目です。親銀行の農協の力添えと、親さん方の勤勉着実な気が実を結んだものと考えます。

PTAのおかけ

今日ではPTAの寄付集めは問題になり勝ちですが、当時としては村の財政は豊かではなく、学校予算には手の廻りかねる点が多々あつた訳です。そこでPTAとしては、ただ義務教育だからあれもやつくれ、これもやるべきだと当局に要求するだけでなしに、これは自分達でやるから、これだけは当局で負担してほしい。という工合で寄付が自発的に集まる訳です。

他校に先きがけて全教室にストーブを入れて貰つたり、廻り尖塔、ブランコ、鉄棒などの遊具、PTAのおかげで補つていただいた施設は数限りありません。

これがみな止むに止まれぬ子供愛から出たことで、今日他所でみるように問題になつたことは耳にしませんでした。

教え子の成人ぶり

発した。私は一人宿に残つて八時になるのを待った。宿の門前に立ち首を長くしてあちこち見廻していると、向うから二人連れの姉妹がこちらへいそいで来るではないか。やれやれと胸なでよろし早速二人で奈良に向つた。

八十周年を祝う

昭和二十八年は開校満八十年目です。

人間で云えばここらあたりでドック入りしておかぬと百才までは生きられぬと思つたので、当時の村長さんや助役さん、PTAの方々に相談すると、それはよい事だといふので、特別予算を組んで貰つて記念行事を行い、学校の沿革もあれこれと調べて貧弱ながら八十年誌を作りました。

今回の百年史編纂のような大がかりな企画は、さぞお骨の折れることと敬意を表する次第です。

子供銀行の表彰

この頃各地で子供銀行、子供郵便局が始まりました。本校でも早速農協を親銀行として子供銀行を始めました。ところが予想外に成績が上がり、表彰に表彰が重なり遂に県下のトップを切つて大蔵大臣の表彰を受けるに至り

そうです。当時小学校に学んでいた人は、今はもう三十幾才、青年学級にいた人は四十幾才、立派なお父さん、お母さんになって、かわいいお子さんが二人、三人とある年頃です。町を歩いていると思ひもかけぬ時に声をかけて通る人があります。相すまぬことですが、さて、今のは誰であつたのかな？

たまにタクシーに乗ると「先生は今何処にみえる？」と聞かれる。

個々の成人ぶりについては皆様の方がくわしいでしょう。

社会人として立派に活動されている噂を耳にするのは何より嬉しいものです。

どうか皆さん、同窓生の誇りを以て益々御発展下さるようお祈り申上ります。

教育者のしあわせ

私は今年古稀を迎えました。今は「悠々翰墨業余生」の境地です。

ところで私は前宮でお世話になる前、二十年間台湾で教員生活、勿論終戦は台湾で迎えました。さあ大変！

ある者は官舎を逐われて宿に困り、ある者は生命の危険
さえ感ずる有様……。有難いことには私には教え子が
ありました。

心配した教え子達は、「先生心配はいりませんよ。万
一危険なことがあったらこれを！」と違って差出された
のが進駐軍幹部の名刺！「引揚げまでは学校の住宅に
おって下さい」。統制下でありながら、「お米も式儀分縁
の下へ入れてくれた」。

というようなわけで、到れり尽せりの心遣い。

この時私は初めて、人情に国境はない。よくぞ教育者
になったものだと、しみじみ幸福感を味わったことでし
た。

市内那加補町在住

思い出のままに

川島綾子

すっかり御無沙汰致しました。昔なつかしい方からの

突然のお便り嬉しく拝見致しました。この度前宮小学校
百年史を編纂される由、御苦労様に存じますと共に心か
らその完成をお祈りして居ります。

今は稲羽東小学校としてコンクリート建ての立派な校
舎で設備も充実され、子供さん達がすく／＼と幸せに育
つていられる様子ですが、私共の胸には前宮小学校とし
てお不動山の西麓堤防の下にあった、平和そのものの小
よそな建物が目に浮びます。建物は少々古るかったよう
ですが人情が細やかと申しますか、あの大きな体軀の丹
羽先生、将校感じの加藤先生、小さいがこまねずみのよ
うな石屋先生が、ごとのく三本足の如くがっちり組ま
れ、地域の人のせいもあってか、よく郷土の人とびつた
りつけ込んだ教育の雰囲気をもつて迎えていらっしゃった
ように感じていました。私共はそうした先生方を中心に、
何時も和やかな雰囲気の中で御指導をいただいています
た。職員の間、これは子供の教育の上に最も大切なこと
であると思えます。そういう意味からほんとうに忘れら
れない平和な日々を送らせていただきました。子供さん
ます。

とりとめもなく、やがて四十年になん／＼とする昔を
思い起し書きつらねてみました。今の人がきいたら、ナ
ンセンスだと思ってしまうでしょう。然しそのナンセンスが
何故になつかしいのでしょうか。昔の人間だからでしょ
うか。

市内那加前野町在住

達も極めて素直で、いつもあの堤防の下で西に東にわか
れていく友達を立ち止って相対し、ていねいにさような
らさようならと大きな声で挨拶して別れていく姿を美く
しい一幅の絵を眺めているような気持で窓越しに眺めて
いた事を想いおこします。又夜の七夕まつりの学芸会、
お正月の同窓会、処女会活動等々、どれもなつかしく、
どの一つをとりに上げて、地域と先生が一つにとけ合っ
たつながりの上になつた教育が行われていたということ
をつく／＼感じます。

又私共は三柿野から今の自衛隊の基地を横断して前宮
へ通勤しました。飛行訓練が行われていると交通が遮断
されるのです。所が遮断されても「先生は子供が待つて
いるから」というので、必ず何処からともなくさあつと
車がやって来て「先生どうぞ乗って下さい」というので
す。おかげで私共ありとあらゆる車にのせていただいで
通らせていただきました。これも忘れ得ぬことです。

交通戦争、公害、その他、いろ／＼な今の世相と想い
合せて、ほんとうにぬくもりのある人間らしいほの／＼
としたものが想い出され、あの時代がなつかしく思われ

祝開校百年

国定浜を

思えば昭和二十五年に御校の七十七周年記念式典が盛
大に挙行され、十ヶ年以上勤続者の一人として私も仲間
入り出来、光栄の感激に浴したのは、つい此の間の様な
気がいたします。今度は又開校百年史編纂が計画され、
私風情にまで御案内を受け光栄に存じます。

昭和四十八年二月十五日!!その記念式典の行なわれま

す日まで、なんとか達者で居たいものと祈りつつ、なつかしい前宮の皆様にお会い出来る機会が恵ぐまれますその日が、一日／＼と近づいてくるのを楽しんで、生き抜く私でございます。

前宮は第二の故郷であると信じ、なつかしの思い出を山程持っている私です。

此の式の年には、私も七十才になります。

岐女師を卒業して五十年。同期卒業生の約半数はすでに此の世の人ではありません。

御校に奉職十一年間校長先生はじめ諸先生の御同情と父兄の皆様のご後援によって、やっと務めをなし終えただけの、お恥しい存在でございます。産れ故郷の羽島市では九ヶ年、御校に奉職。合せて二十年になります。

自分の事ばかり申して失礼とは思いますが、永年お世話になり乍ら御無沙汰している皆様に、近況お知らせするのも礼儀かと、駄文お許し下さいませ。

私の教員生活二十年、色々な学校を経験しましたが、前宮村程校下の皆様と親密にできたところを知りません。警防団、婦人会、男女青年団、青年学校、等々の皆様は

他の町村には見られない前宮式教育の中に十一年間生き抜いて体験させて戴いたものは、よし私の体は亡びても私の娘たちの血の中に流れ継いで永久に亡びないものがあると信じています。

人間も六十の坂を越えると一年毎に弱るものがございます。余り丈夫でなかった私は老人白内障で左眼が見にくくなったので手術を受けました。翌々年子宮ガンで又手術を受けました。五月から八月までも東海中央病院に入院していました。其の間前宮の方々が伝え聞いて大せいお見舞いに来て下さいました。

私は涙をこぼして喜びました。こんなにまで皆さんが慰め励まして下さるんだもの、死んでなるものか、きつと全快出来るかと信じていた加減か助かったので感謝しています。

何んと申しましたも年です。眼も不自由、足腰も痛むし、体はたいげ故、外出はあきらめています。前宮の中央にさん然と輝く鉄筋コンクリート建の御立派な校舎で挙行されます他に類の無い開校百年の式典の様子を夢

凡て学校を中心として活動され、愛校愛村の精神で前宮魂を常に発揮され、私の胸を強く打たれた数々の記憶がございます。

此の学校に終生奉職出来たらと思っておりましたのに、主人は蘇原小学校に在職中三十九才で病死致しました。父も息子の後を追うように翌年二月に中気で他界されました。

残された気丈な母の助けを得て遺された五人の娘を育てねばならぬので、惜しくも御校を最後に退職いたしました。

終戦後の食糧難を乗切る為と、先祖の田地を守るために七反程の百姓になりました。

供出割当に苦勞しました。

主人が亡くなった時加納女学校の一年生だった長女も私共の教職を継いで主人と共に市内の小学校に務めております。今年二十年以上勤続の表彰を二人共受けました。こうした教員一家になったのは、御地に永年お世話になっていた時、私の心の奥深くに刻印されたものがこうさせたのだと信じています。

見つつ、御校の隆昌を祈ってやみません。

市内鶴沼町羽場在住

あ あ 百年

坂井 馨

一、そのむかし

岐阜県稲葉郡前宮尋常高等小学校へ赴任したのは、私が師範学校卒業後間もない昭和七年四月であった。矢熊山の西のふもとにあり、東校舎は前宮村役場と同居していた木造で古ぼけた学校であった。

校下は山東が農村地帯、山西が主として機業地帯で、南は県境の木曾川に接し、北は広い飛行場に区切られた東西に細長い村で、隣村との交流も割合少ないおちついて静かな環境であった。交流は機業関係もあって、隣村よりもむしろ川向うの愛知県の方が多かったと思う。大きな堤防、その下には松林がひろがり、きれいな砂地で

秋にはシヨウロが出ていた。村岸との交通は草井の渡船で、人も自転車も牛も渡し、渡船場にはやきだんこや水をうる出店の旗もたつていて、時代劇映画に出てくる渡船場シーンにそっくりで、ここで度々映画のロケーションも行われたが、今はそのおもかげもない。

この草井の渡は遠く鎌倉室町時代からひらけ、当時可児町土田から羽島市市之枝に至る間「九瀬の渡」と称して、九ヶ所の浅瀬がありそれ以外の場所では水勢が強くと舟も馬も渡ることが出来なかつたといわれ、特にこの摩免戸（マメド）の渡は、その上流の鶴沼（ウヌマ）の渡伊木が瀬（イキガセ）と共に、東国西国の戦略上の要地として、つわものどもの攻防のあとをのこしている。木曾川付近の戦で有名なのは承久の変で、東国で鎌倉幕府を開いた源氏が北条氏と争いを起した。機をねらつて武家政治の打倒をはかつた後鳥羽上皇がおこした討幕軍は、先に美濃入りして一万七千余の軍兵で木曾川右岸の瀬に防備をかためた。鎌倉方は直ちに二十万に近い大軍を催して急ぎ西下し、木曾川左岸に沿つて九瀬の渡に布陣した。その時両軍の主力はこの摩免戸の瀬におかれ、承久

にしてくれる校下で、私はその頃は年も若く未熟者であつたことを、しみじみ思ひかえしている。

二、このごろ

移転したもとの前宮小学校と、前宮中学校舎を合併した不揃いで老朽した校舎は、昭和四十五・六年に近代的で優美堅牢な鉄筋三階建に全面改築され、学校環境も整備されつつあり、尚講堂の改築も計画されており、ひろびろした運動場も整地され、すばらしく立派な学校になりつつある。

この様な折、昭和四十二年四月学校長としてなつかしい稲羽東小学校へ再び赴任し、私の生涯の聖職であつた四十年間の教育職を定年退職した学校として、一段と感慨深く生涯忘れ得ぬ前宮の地である。

いい学校であつた。いい職員であつた。PTAなどのよい援助があつた。校下のふんいきもとてもよかつた。学校長としてほんとうに気持よくつとめられた。

この間、学校教育の面では市内各校の状況と比較して、学習成績の面でも、体位向上の面でも、常に優位にあり、進歩前進しつゝあつたことを確信している。

三年六月（今から約七百年前）の戦いで、衆寡敵せず京都方は鎌倉軍に破れて退却する中で、ふみ止まつて奮戦した中に鏡右エ門尉久綱があり（鏡は各務のことで各務氏の出といわれている。この戦いには美濃の人が多く西軍に加わつていた）戦いやぶれた無名戦士の墓が、今もおとのう人、弔う人もなし、ひっそりと矢熊山の西山腹に苔むす小さな墓石をならべている。

このお不動山は当時の戦略上の要地であつたことは、わずかにこれらの墓石にとどめておられるだけであるが、この山は平地に小高くもり上つた山上に、明治二十三年千葉成田不動尊の分身をまつつて仏眼院を建立してから、隣村や川向うから参拝者が多く、又春のさくら夏の涼風秋のもみぢをたすね、行楽遠足などで訪れる人は、今も絶えない前渡の象徴的存在であらう。

こういう前宮村は、伝統的に社会奉仕的な団体活動、例へば青年団、処女会、婦人会、在郷軍人会、消防団など、非常に熱心で優秀であつた。これは愛郷心の表れで、公共奉仕の心のあつた村の姿であり、この気風が愛校心につながり学校教育にもよく協力し、又学校職員を大切に

三、これから

学校環境の整備は着々進行し、教材教具も次々と充実されつつある。しかし教育の実績は建物や道具だけで伸展するものではない。

入れものより中身。といわれる通り、ここに学ぶ者の実質成長である。教える人、援助する人々、校下の方々みんなの力で、混乱し汚濁している世情にまどわされおし流されない、確固たる信念と定着した基礎知識を身につけた子らの育成に、一そう努力しなければならぬことを思う。

国の教育制度上でも大きな問題となつてはいるが、試験テスト——点数・成績——合格・進学というルートがしかれている為、小学校からこういう面が多くとりあげられ、そのため人間としてもっと大切なものが、軽視され或はおきざりにされている点を、残念に思う。高校での勉学が不十分で、入学試験に不合格となれば大学進学が出来ない、だから何をおいてもとにかく合格することが第一である、それにはがかり勉をしなければならぬという現実、否定出来ないし、その気持もよくわかるけれど

も、少くとも小学校においては人間一生の基礎教育の根本として、もっと魂の教育、人間性の教育、精神力の教育と、すべての人間活動の根源となる健康教育、即ち体位の向上強健な身体の養成とその鍛錬を重視すべきである。歩く走るとぶ投げる泳ぐ、暑さにまけない、寒さにたえる苦難ものりこえるという精神力、そして働く、努力する、頑張る、勤める、奉仕するという、心身の練成こそ優先されるべきものと思う。

時あたかも昭和四十八年が不惕小学校として明治六年二月十五日に創立された、この小学校の百年目の記念すべき機となっているので、今後学校父兄校下民一致協力して、一そうこの学校の伝統と郷土の美風を発展するよう、精進されんことを念願するものである。

市内那加桐野町在住



!!人間的ふれあい!!

清水 敏 男

昭和三十八年四月から、四十一年三月まで、三ヶ年間、稲羽東小学校に在職した。その間の勤務ぶりは、あまり上等とはいえなかったが私としては、地域の人々との心の交流ができ大いに教育を語り、人生を語り、人間的ふれあいの中で、愉快に仕事ができ、人間としての成長ができたことを感謝している。

それも当時、同僚として毎日顔をつきあわせていた先生方、それにもまして、御父兄の方々の暖かい人間味があつたればこそ今更ながらありがたく思っている。

そもそも、父兄の方々との出合いは、三十八年四月PTA総会の新任者の挨拶からはじまる。

同じ年にかわつてこられた、清水彰校長の挨拶

「私は、元は遠藤といひまして、途中から養子をして清水となりました。……………」

というような話をされたと記憶する。そのあと、前に進み出たのが私。その時まで、何を言えよいか、オドオドしていたが、学校長があんなことを言ったんだから、まねをしておけば無難だろうと、

「私は生まれた時から清水です。那加門前町に住んでいました……………」

とやらかしたとたん、今まで何を言うのかなあと、真顔でこちらを凝視しておられた親さんが一度にとつと爆笑された。そうしたら一べんに胸のつかえがおりて、気楽になり、エンジンがスムーズにかかりだし、あとは、リラックスして話してきた。

もう一つの記憶は、家庭訪問のことである。はたやさんが多いことは知っていたが、ガチャンガチャン、機械音のするところで、話をするのには、慣れていない私は閉口したものである。はじめのうちは、

親「うちの子は、どうじゃなも」
私「はあ、たいへんよいお天気で」

親「うちでは、ちょっとも勉強をしよらんか」
私「この辺も、ダンプがよく通り、危いですね」

親「……………」
私「……………」
こんな調子で、話も何もあつたものではなかった。でも、そのうちに慣れて、ガチャンガチャンに負けないような大きな口をあけて、腹の底からどなるように話しあつたのだ。

この二つのことから、ことばというものは、只意志の交換だけでなく、人間的ふれあいを充分含んでいることを意味する。

前者の場合、「生まれた時から清水です」という何げなく言ったことばの中に、お互いの心の開放がみられたし、後者の場合、お上品ぶつては話せない。体ごとぶつけ合うような心のふれあいがあつたのではないかと思う。現在（昭和四十六年度）岐阜市の養護学校で、言語障害児の指導面を担当しているが、ことばのもつ機能的な役割りと共に、人間的ふれあいのもつ重要さが痛感させられる。

稲羽東小に在職中のある年に、ある事情から、三学期の一月より六年生を担当することになった。

三ヶ月で卒業するこの子たち、その後にはひかえている親さんたち、期間は短いし、どのように接していったらよいものか、考え悩んだ。一月の父兄懇談会で、学級の親さんに向かって、担任する旨を話し、

「教育で大切なことは、人を信頼することです。私が如何にうまく教室で指導しても親さんが、家で先生のことを批判したり、けなしたりし、それを子どもが聞いていたら、『僕らの先生は、なんやそんな人か』と、一べんに信頼度が下がり、それが学習に対する意欲にもつながら、十のものでも六、七ぐらいしかおぼえないのてないかと思えます。私も人間、いたるところはいっぱいありますが、先生の悪口は、子どもの寝静まったあとで御夫婦でゆつくりと……」

とそんなようなことを言ったら、卒業式が済んでから、西町の八百屋さんの田中新吾さんに、

「先生のあの時いわれたことばに、わしゃ感心した、その時から、先生を好きになった。」

といわれた。その時のそのひとことの励ましが今だに私の教員生活の糧になっている。

昭和二年十月、二日間にわたって岐阜県中等学校秋季大演習が各務原で行われた時、私は副官として各校との連絡に当たった時、前宮小学校にも立寄った記憶がかすかにあるのみで、全く未知の村である。ただ前渡のお不動様は人の話に聞いていた。

四月一日私は自転車飛ばして一路赴任の途について。初めての道は遠いものと相場はきまっていたものの随分遠かった。

南は千古の清流をたたえ若鮎おどる木曾の川、東は信仰で名高いお不動山、自然の環境に恵まれた学校である。当時の先生は平光弥重郎校長先生、丹羽久克先生、加藤嘉雄先生、遠藤卓郎先生、坂井馨先生、伊藤康治先生、石屋良仙先生、国定浜を先生、奥村照子先生、水野寿光先生で、私は五年男子組を担当することになった。非常にまとまった真面目な生徒ばかりで私の教えをよく守って勉強してくれた。姓名は忘れたが顔を見れば思い出すであろう。唯一人今でも覚えているのは丹羽軍平という優等生がいた。この子は色の白い円満な相をした子で、面白いことがあって他の子が大口あいて笑う時でも、本

大人も、子どももお互いに相手のよいところを見つけて、励まし合っていたものだと思う。

最後に、稲羽東校下には、学生時代の先輩後輩の方が多くおられ、大変お世話になったことを感謝します。

市内那加門前町三丁目在住

思 い 出

元前宮尋常小学校訓導 鈴木丈太郎

一、前宮よいとこ

昭和九年三月三十一日付で私は前宮尋常小学校訓導に補せられ、前任地鴉小学校より転任することになった。当時鴉村の在郷軍人分会長であった旧井中尉が、前宮小学校には加藤中尉という典型的な軍人肌の先生がいることと、統制のとれた優秀な青年団があることを聞かされた。どの先生でも転任に際して新任地について不安と感じるのは同感である。

で口をかくして笑う位いつつしみ深かい、おさまった子であった。体操の時間にはよくお不動山へ早登り競走をしたものだ。丘の様な低い山であるが走って登ってみるとなかなか峻険であり、当時チョンガーで元氣盛んな、しかも山の好きな私でさえも息が切れそうで、いつも生徒に負けていた。頂上に立って四方の景色を眺めるときは雄大な清々しい気持、やはり前宮はいい所だなあと感無量にしたるのであった。

夏七夕祭りが運動場で行われた。初めての事で私はビックリした。七夕をつけた大きい竹が何本も立てられ大きい西瓜が沢山お供としてかざられ、大勢の人が校庭に集まって大変にぎやかであった。祭が終わって後片付のあと西瓜を食べたときのうまさは今も忘れることの出来ない味覚である。

二、室戸台風

昭和九年九月中旬に有名な室戸台風があった。当時私は那加駅前下宿していた。殆ど高農の学生ばかりであった。

その日は朝から雲行きが悪く南東の風が強く吹いて

いたがあんな恐ろしい大風になるとは夢にも思っていない。当時は今の様に台風情報は全く入らなかった。学校へ出勤の準備をしていると伊藤先生が立寄ってくれたので二人そろって自転車で帽子をかぶり傘をさして出かけた。町を出はずれて一聯隊にさしかかった頃風雨は強くなり一聯隊の南側にかかった頃は愈々風雨は激げしくなり、あつという間に帽子も傘も飛ばされてしまった。それどころか体も自転車も風で飛行場へ飛ばされそうである。全身ずぶぬれ二人は励まし合い乍ら一寸きざみに進んだ。何度か土手にたたきつけられる様な暴風雨と戦い何時間を要したか、二人は無事で漸く学校へたどり着くことが出来た。勿論生徒は一人も登校していない。裏の二階建の旧校舎は風のためゆらゆら動いて今にも倒れそうである。校舎の前に大きい木があつてそれが大きくゆれている。加藤先生がずぶぬれになって勇敢にも木に登つて、枝を切り落とされた。やはり軍人精神というか、数年を出でずして出征され輝かしい戦功をたてられたのも蓋し宜なるかなである。

台風一過、あの物凄かつた風雨もすっかりおさまりが咲き笑い乍ら学校へ着いた。

教室へ入って今日の代参の意義を話し、更に面白かつただけではすまされぬ神官の一举一動、物に動じぬ神官の神に仕える誠意など生きた教育をしたこともあつた。

四、思い出はつきぬ

寒くなって私は下宿を引き払って学校で常宿直をすることになった。宿直室とて別になく役場の二階で一応裁縫室となつていた。そこで夜一人眠るのであるが鼠が多く時々枕もとに來たり又ふとんの上を走つたりした。最初はこのわかつたが住めば都で高級ホテルよりはるかに住心地がよかつた。

食事は高等科の女の子が飯をたいてくれた。おかずは何んとかいう魚屋さんが時々来てくれたので、大きい鍋に魚ばかり煮て毎日三度これを食べ他のものは全く食べなかつた。

こうした食生活が徐々に私の健康をむしばんでいたのだろう。後日上羽栗小学校へ転校した頃栄養失調・身体衰弱症で一ヶ月位欠勤したことがあつた。食生活とは美食することではなく、種々の物を数多く食べることである。

青空さへ見え出した。荒らされた校舎校庭の復旧作業に全職員が働らく姿があちこちに見えた。

三、笑えないこと

今とちがつてその頃は神社神道が重きをなして、各神社で催される神事には学校代表として一クラスが代参することになつていた。

十一月の新嘗祭の神事であつたと思うが私達五年男子、女子が下切のお宮に代参した。

厳肅に神事が進められ最高調に達した時、神官が神前で深く頭をたれ、おもむろに頭を上げられた時、どうしたことが冠がすべり落ちて、テカテカの禿頭が上つて來た。全員が緊張と緊張の連続であつただけに、この思いがけぬ珍事に重苦しい緊張感が一度にはぐれクスクス一同の口から笑い声がもれた。

しかし偉なるかな、かの神官は再び頭をたれ冠をつけおもむろに復元の姿を現わされた。その間少しの乱れもなく落着き払って復元動作をされたことについて私はさすがだなあと深く感じ入つた。やがて神事も終了し私達は帰路についたが、子供達は先き程の出来事に話の花

以来今日まで私は食膳に一皿でも多く異なつたものをのせる様に心掛けている。

以上お話しした様に思い出多い学校であつたが、県の特別の思召して私は一年在職しただけで自宅より最も近い上羽栗小学校へ転任することになった。先生にとつて転任はいやなものである。心安くなつた先生、生徒、村の方々と別れて去つてゆくのは本当に心淋びしいものである。しかしいかにもとを引かれ乍らも県の命令は至上のものである。私は去つた。断腸の思いで、

今私は還暦を過ぎ既に老境に入っている。しかし今尚若者をしのぐ元気で日々晴耕雨読の生活を送っている。子供は二男一女それぞれ片付いている。前宮を去つて三十七年、我が岐南町は昔の面影もなく変り尚日々建設が進められているが、前宮もすっかり変つたことと思う。こうしてベンを走らせているとありし日の先生方や教へ子の姿が浮んでくる。いつの日か懐かしい昔話に花を咲かせる夢を抱き乍ら筆を止める。

羽島郡岐南町下印食二一四八の二在住 完

稲羽東小五年間

杉山 郁男

前宮小学校と言う名称が最終の年になった昭和三十七年四月、私は今もなつかしい稲羽東小学校に転任を命ぜられました。

この校下の方々の住民感情が、なんと学校を大事にしてくださいと直感的にうけとりました。遠隔地から奉職してきた新任教師の住宅の世話まで、親切にしてくださいと校下民の温情に打たれ、ここなら落ちついて教育のしごとに打ち込めるぞと思いました。婦人会や農協の総会にまでお招きにあずかり益々その感を深めたものです。老人クラブや母の会、(保育所)前宮同窓会、遺族会など、いろいろな校下団体の方々が学校によりつかれ、学校と校下が一体となつてうるわしい心の結びつきにより、諸生活が進められるよい校下でした。

◎豪華なプール

私が着任した四月は、PTAが中心となってプール建設の募金活動が進められている真最中でした。足立一男会長を中心に時間や距離を物ともせず、東奔西走の活躍をされ、みごと五百余万円の寄附金が集められ、近校に類のない豪華なプールを完成することができました。竣工七月二十六日、これまで私どもも一緒にしごとをさせて頂き、竣工が迫まるにつれて、寄附者芳名録、経理のしめくり、式の諸準備や打合せなどしごとに追われ深夜に及ぶことも度々でした。

竣工式には、かつてのオリンピック平泳ぎ優勝者前畑(兵藤)秀子さんを迎え、模範遊泳などして頂き、盛大にしかも感激のうちに終了した情景を、今でも忘れることはできません。

子どもたちの喜びは格別でした。低高別にしきられたプールには、他校には見られない大きさと、ぜいたくなまでに整った諸施設で子どもたちの意欲をかりたて、一夏のうちに泳力水準は、郡内(当時稲葉郡)抜群の記録を出すまでに向上しました。

◎同窓会のテント

学校教育をもち上げてくださる団体で忘れてならないのは、同窓会(会長加藤嘉雄氏)の事業であります。最初は、映画会などの催しをして資金を作り、学校施設の充実にあてるやり方でしたが、業者への支払いと税金の額が意外に大きく、労多く効果の上らない結果となり映画はとりやめになりました。会員一人三十円一戸会員四人以上百円の寄附金を集めることになり、年々テントを購入し、私がこの学校を去るとき(昭和四十一年度)には十六張りのテントが学校備品としてとどまりました。

秋の運動会は、児童父兄全体の観覧席も運動場一ぱいに張りめぐらされ、それは盛観でした。

テントのことで思いだすのは、運動会の前晩に暴風雨がきて準備万端ととのつた運動会も、一夜にしてテントは総だおれとなりました。ところが学校周辺の方々が自立的に集まってきて、とりかたづけしてくださいと、感激したことがあります。

◎お不動山

毎年、元旦には新年祝賀式をおこない、子どもたちをかえしたあと、地元の人々といい酒をくみかわし、

ちよつとした上気嫌でお不動山へお参りするならわしになっていました。実にうるわしい雰囲気です。そして一個十円のリボンで結んだ鈴をお守り札のかわりに求めて帰ったものです。これが五個たまったわけです。今でも自動車の中につけています。私の前宮生活五年間を物語る記念品の代表として大切にしています。参道で行きかう地元の方々と、「おめでとございます」をひっきりなしにかわしながら登り下りしたものです。

◎草井の渡し

昭和四十年ごろ愛岐大橋の工事がはじまり、何年続いたことか往時を偲ぶ岐阜と名古屋の交通要路であった渡船もこの年限りで姿を消すことになりました。ちよつと四年生の社会科の勉強に「昔の旅」という單元があり、担任の小島由市、山本郁子両先生の組の子どもたちが校外学習のため、渡船場へ行くというので私も同行して、最後の渡し船にのせてもらいました。

何百年続いたことだろうか。この渡船も時代の波に押されて消滅するのです。心なしか船頭さんの顔にも一抹の哀愁にも似たものが感じられました。私自身も幼いこ

ろ、父から時折聞かされた。

「前渡から、草井の渡しをわたってなあ、薪を担って若いころ（父の青年時代、明治十六年生まれ）なあ、草井の方へ売りに歩いてなあー」

こんなことばを思いだし、言い知れぬ歴史の郷愁にうたれながら、無邪気にはしゃぐ子どもたちとはちがった心境で乗っていました。

市内蘇原六軒町在住

昭和十四・五年の思い出

竹中光男

今年、明治五年学制が施行されてから、百年目に当り、これと時を同じくして、稲羽東小学校も百年目を迎え、ここに小学校百年史が編纂されることになりましたことは、誠に有意義で、欣喜に堪えません。

私がお世話になりましたのは、昭和十四年から昭和十

六年春までの、満二カ年間でありました。短期間でしたが、北海道から出向して来た私にとっては、特に思い出の深い学校生活でした。

当時の職員は、校長先生が厚見下川手の杉山真一先生、教頭先生が前渡の丹羽久克先生で、蘇原の遠藤先生、加納の関谷先生、那加の熊沢先生、新加納の今尾先生、栗山先生、長繩先生、小籠村の山田先生、女子では鶴沼の国定先生、加納天神の坂井先生方でした。

丹羽先生は心の優しい上に、親切で熱心な先生でした。国史年表は先生の創造された独得のもので、私もそれを夏休み中に、写さして頂きました。

校舎は平屋建で新しく、青色のペンキも美しかったと思います。

教育目標は「質実剛健」で、職員は「和」をモットーとして、「よく学び、よく遊べ」の通り、今日の整理や明日の教材研究や、準備・計画等が終ると、運動場に出て、キャッチボールや野球を関谷先生を助けてしました。野球の練習が終ると、若い先生方でよくテニスをしました。時々校長先生も師範時代の野球部のユニホームを着

て、仲間になって下さいました。テニスをしていると、お不動山さんの和尚さんが山頂から、「今、行くから」と大声で叫んで、よく一諸にやりました。

学校行事の重なるものを挙げてみますと、第一が、冬季の全校マラソン大会。低・中・高学年で距離に差はありましたが、木曾川堤防を下って、木曾川鉄橋近くのお寺の辺で折返して走ったのですが、事故者は一人も出ませんでした。

第二が、一月一日元旦の朝、村東の村社に暗い中から希望者が集り、真紅に燃える焚火を囲んで、手を暖め背を暖めながら待つうち、大体揃った所で、「さあ、出掛けようか」と丹羽先生の合図で火をよく消してから、二礼二拍子一礼で参拝し、武運長久を祈願して「祝詞」をとなえました。高等科の生徒は、よく覚えていて一心に祈願している神々しい尊い姿には、ジーンと感ずるものがありました。よい習慣だと思いました。各社を参拝して、最後に一番西の小高い所にある若宮村社に参拝し終った頃、東の空が茜色に輝き初日の出が拝め、清浄な希望に満ちた新年を心から迎えることが出来た、晴ればれ

した気分がするのです。ここで解散し、家に帰りお雑煮をいただくから、学校で式。

第三は修学旅行。私の受持った高一が高二になった時、担任の丹羽先生と共に私も附添いとなり、行った時のごとです。見学箇所は榎原神宮と奈良の一泊旅行でしたが、本当に楽しい思い出の修学旅行でした。

第四は、冬季木曾川の河原一帯で、在郷軍人の田中さんを始め数人の役員の方々の御指導で、松林の中から堤まで一列横隊に展開して、「ホーホーホ」と掛け声をかけながら、一面に張られた網の方に兎を追い込むのですが、数回やって十数匹を捕獲することが出来ました。毛皮は勿論軍用に供されました。

第五は、学芸会の時の事。「女子は機屋さんの多い関係もあって、ややもすると衣裳の競争になり易いので、舞踊といっても、学生服で出来るものがないか知らん」と丹羽先生が言われたので、「体育ダンスならどうでしょう」と私。その結果、高学年の女子に「カールスタートの舞踏会」と「軍艦金剛」を学生服で出演させ、大喝采を得たことがありました。

第六は、紀元二六〇〇年の祝賀式です。

式後、低中高学年毎に、「紀元二六〇〇年」の歌を歌いながら旗行列をしました。午後からは、青年団村人も共にお輿を練り歩き、最後に学校の運動場で、装飾物を取り、二台の輿が組み合わされての喧嘩輿。「ワッショイ、〜」の掛け声と共に、誠に勇壮な一大絵巻が展開されたのでした。

私は、しばらくの間お不動さんの下田中屋さんの二階に下宿し、与平さん御夫妻には大変お世話になった者です。後に前任校長の平光先生が鏡島に移転されましたので、その後をご無理願ってお借りし、東隣りの小沢宝一さん御夫妻、西隣りの籠屋さんご夫婦始め、村の皆さんに大変親切にして頂きました。

何分にも三十二・三年前の事ですから、覚えている生徒の氏名も怪しいものですが、当時の懐しい童顔を思い浮かべながら挙げてみますと、高二では田中美代子さん、高一では田中文男君、足立匡君、小沢光夫君、佐々木美穂子さん、永井マチさん、田中久子さん、丹羽みとさん、小四は男子組で、田中幹夫君、丹羽久孝君、丹羽静且君

などです。高一の時、浪花節が好きで好きでたまらない

という生徒が居て、昼食後毎日のように、教車を演台替りにして扇子・湯呑みを用意して、お茶を飲む所から始めて一席語らせて、皆で批評し合ったりしたのですが、確かに村上姓だっと思うのですが名前が浮びません。他の方々お許し下さい。

思いついたままに挙げてみますと、六軒駅には本当に人家が六軒しかなく、三柿野駅は工場への通勤客が多く、ラッシュ時には大混雑でしたが、民家や商家もありませんでした。二十軒駅へ出る飛行場を横断する道を、地下道にすることになったのもこの頃でした。前宮郵便局も出来開局祝をした記憶があります。三柿野附近には三菱川崎等の航空機工場がどん／＼出来、各務ヶ原には航空支隊の幼年工の宿舍が建ち並び、空には一・二聯隊機だけだけでなく少年航空兵の練習機も多く飛ぶようになりました。

思いは仲々尽きませんが、最後に、
開校以来の物故職員並びに同窓会員の霊を追悼し、ご冥福をお祈りいたしますと共に、稲羽東小学校が過去の歴

史に鑑み、ますます隆昌発展されることを祈念して終りといたします。

揖斐郡本郷村草深在住

北原白秋の「木曾川」から

水繩 半助

前宮の地の歴史は木曾川の流れと共にあったものと思われる。悠久の流れも時代の変遷に伴い、いくらかの変貌はまぬがれ得ないであろう。

昭和の初め頃、大山から笠松へ木曾川を下った北原白秋の紀行文があるので一部分を紹介する。

……………略……………

舟はいま夕暮富士を右手に、その三角洲の緩い湾曲線に沿って、左寄りの分流を走りつつ滑りつつある。

坂下という、ごろた石の土手の斜面に舟夫はちよいと舟を留める。十二三ばかりの女の子が前かがみに何か録

の細かな葉をすすいでいる。芹かと訊いてみるとかすかに顔を赤らめながら、人蔘の葉だという。その傍で半襦袢の毛脛の男たちが、養蚕用の円座をさつ／＼と水に浸して勢いよく洗い立てる。空の高瀬舟が二三艘。

舟はまた岸を離れる。振り返ると、おお何と典雅な白帝城であろう。翁許たる、いつも眼に親しんで来たあの例の丘陵の上の何と閑雅な藁、白い楼閣。ここ下手から観るこの眺めこそは絶勝であろう。私はつくづく下つて来てよかつたと思つた。

「坊や、ほら、お城が見えるよ。」

「ほんとだ、お城だ。」

だが、その白帝城ともちきにお別れである。

分流は時に細い早瀬となり、蘆荻に添い、また長い長い木津の堤の竝木について走る。堤には風になびく枝垂柳も見える。純朴な古風な純日本の駅亭もある。そうして昔作りの農家。

私たちはまた振り返る。「さようならお城、はるかのはるか白帝城。」

……………略……………

と、岸には黒人種風景の、裸の童子と童女がいる。松と草藪と水辺の地面と外光と、庭目も光っている。そして薄あかい合歓の木の花、花、花。そこが北島、対う遙かが草井の渡し。

前渡不動の幽雅な小丘を右に見て、また耳に聴く左は稜の音のしづかな絵繙織る松倉の里である、と、本流の水はまた一つの三角洲を今度は左に押しつめて、広く広く斜めに、河幅を右へ右へと展いてゆく。おお、また渺々として模欄たる下流。

笠田の渡しというところを過ぎる。右の斜面の鼠色じみた帆の幌の小舎の内では、禪ひとつの船大工が船の内側を河心へ向けて、ととんとん、ととんとんと釘を打ち打ちしている。ほればれとしたものだ。遊ぶようなその鉄槌の手。

北方村本郷というところで、私たちは三艘の水車船を見た。また下流で同じような船を見た。船には家があり横の両側には二台づつの軽い小板の水車が廻っていた。内部には杵の音がし、瀬の替るにつれて、昨日は下、明日は上へのぼるのである。簡素ないい情趣である。

で宿直させられてまず驚き入った次第、何年も何年も手入の全く行届かない為か、茶色なのか青色なのか判然できない古色蒼然たる掛け蒲団に、洗濯したばかりのシーツがかけてあった。その白さが強烈に突きいつていった。当時の前宮村は貧しかった、然しそこに生活を営み続ける村人達のつりあいは清潔であった。

酒をくみかう機会は少かったが、開かれると極めて盛會であった。村をあげての教職員の歓送迎会などは、他のどの町村にも見られなかった風景であった。それは真に粗酒粗肴の極みではあったが、そこにつどい集る村人達の談論風発は何物にも勝る得難い酒肴であった。

生米、アルコールの苦手である私には、長時間の宴は全く苦痛ではあったが、何か人生の生甲斐を感じる場面にしはしば遭遇したものだ。

宴の最後に、当時の丹羽称太郎村長が、ご飯に酒をかけてお茶漬だと言って、さらさらとやりだしたのはたまげいった次第、それでいて、しゃんとして長平の自宅まで堂々と歩いて帰って行く後姿を見て、人さまさまの暮し振りを勉強させてもらったものだ。当時の前宮の人

「これは、童話になるな」と、私は眺め眺めすれちがつてゆく。

東海道は長い長い木曾川の鉄橋が近づいて来た。

「あ、あの右袂が笠松の四季の里です。左が雀のお宿。」

以下略

この文豪のお目にとまった「前渡不動の幽雅な小丘」こそなつかしの前渡、稲羽東小学校と校名が変わったことはおしいと思えますが行政上やむを得なかったのです。学校の思い出と共に桜とつつじの不動山、秋の紅葉黄葉で全山を錦織りなす山、そしてあの堅巖（たていわ）その西麓の小学校こそ山ともろともに伸び栄えそして永久に不動であることを念願するものであります。

市内那加桜町在住

前宮随想（自昭和四年至昭和九年）

平井新兵衛

（旧姓 川本）

役場の二階の会議室の片隅で、堅い堅い重い重い蒲団

々の生活は真に素朴ではあったが、何か一本強い心棒があった。

村の旧家に婚礼や葬儀があると、我々はよく招待されたものだ。婚礼の招待には馴れていた私も、葬式の招待とは前宮で初めて経験させられた。当時はお斎と称する物がだされるのが習わしであり、たとえ満腹の時でも、それを食べて帰るのがエチケットとされていた。

前渡の某家の葬儀の時、お茶だと称して酒がだされたのにはびっくりした。当家人々々が、なげき悲しんでいるのに、心なき参列者の酒好き連中が、がやがやわいわいやっている姿は真に異様な風景であった。その内に酔いしべれた村内有力者の一人が演説をし始めたのには、流石の寛容な近隣の御手つだいの人々も眉をしかめていた。その内にずしんという大きな音がしたと思つと、其の人は縁側から土間にころげおちてしまった。相悪に土間には水溜りが所々にあり、盛装の彼氏の羽織袴は泥だらけの始末、近所の人に助けおこされた彼氏の開口一番は、

「オッカア、許してくれ

オッカア、かん弁してくれや」

しかも泣き声であった。

前宮の女性は働き者であり、しっかり者であった。人前では従順ではあったが家庭内では経済の中心であった。ウーマンリブは既に四十年の昔、前宮の女性の間に芽生えつつあった。

村をあげての行事は何時も学校の運動場が使われた。入営入隊する若人達は、各字の神社から字人に送られて隊伍を組んで校底に集ってくる習わしであった。村長を始め分会長、校長が次々に激励の辞を述べ給うた。高学年の児童達は何時も学校を代表して参列させられた。大人の言葉の意味が解る児童は静に聞き入ってはいたが、大部分の悪童共には退屈至極の連続であるから、わいわいこそそそやりだすので、それを静にさせる為に随分苦心したものだ。その内、村長さんの調辞が何時も同じだったので、暗記力の強い子は全部暗記してしまつた。

某月某日、昼食時間、何時もこの時間は騒々しいのだが、当日は余り静かだったので、こっそり職員室から見に行つた、一人の秀才児が、とぅ〜と村長さんの激励

で多額で、これが村外に流出して村経済上極めて不利であるとの一点張りであり、真に論旨明調であった。

我々が修学旅行の有益さを如何に力説しても、仲々に理解してもらえず、丁重にお引取りを頼つたものだった。某年伊勢修学旅行の帰途、名古屋駅で関西線を降り東海道線に乗車、暫くしてKS君がおらないと同級生が叫ぶ。車中を何回か往復してみたが矢張り見付からない。並びの子に聞くと名古屋で降りたのは間違いないのが解つた。早速單身名古屋駅にとつて帰つたら、駅長室でニコニコ笑つて御座つた。人の心配も解らずに。駅長さん曰く、「他の小学校の団体の中にまちつていたので早速駅長室に大事に保管しておきましたよ。御引取下さい」と笑顔で丁重でした。想えば良き時代であり人の情厚き時代でもあった。

春の学芸会、秋の運動会は村中をあげての一大デモストレーションであった。はげしい労働に明け暮れた当時の人々にとって、これは何物にも勝る心の慰安であったようである。四月受持学年が決定すると、音楽や児童劇の得意の先生は早々と計画をたて、配役、意匠、道具の

の辞をやつていた、いや見事なものであった。一言一句少しも違わず、アクセントもそっくりで面白かつたので「もう一度やつてみよ」と言つたら、同級生の悪童共が手をたたいて喜んだ。

前宮の子供達は真に素直だった。

秋になると与平さんの山に松茸がでた。何時も与平さんの店で煙草や弁当を買つていた職員の数名がこっそりと招待された。放課後二、三本の松茸を手に入れて喜んだものだった。

HY校長はそれを見て見ぬ振りをしていたが、YK校長には勤務時間中に、そんな所へ行くとは何事かと叱かれた。人夫々の性格があり、若い人をコーチするには緩急自在の方法があるものと勉強した。人生経験豊かな丹羽教頭の下に團結してよく働いたものだ。年令の違いはあったが、前宮の教育の為に時に口論し、時に叱咤しあつたのも、今では楽しい思い出の一頁である。

修学旅行のシーズンになると必ず北島の古老が米校されて、修学旅行反対論を一席拝聴させられたものである。古老氏の論理は修学旅行に要する費用は村内総計、極め

準備にとりかかつたものだ。音楽や劇に不得意の私は、巧道より拙速を尊ぶと変な理屈をつけて、前の松林で松露とりや下手な野球に熱中した。放課後教室の窓をしめきつて、劇の練習に熱心な他のクラスの様子にやきもきした。私のクラスの子達が「先生、はよ練習せな あかんぞ」と何回も何回もせきたてたものだ。

全村の人が一度に見物できる講堂とか体育館とかは全然なかつたので、教室の境戸を取外し、全校の腰掛を運び、教壇で舞台を造り苦心をした。それでも全村の人々が収容できぬので、今日は低学年全部、明日は高学年、明后日は前渡の人、次の日は長平、北島の人と、何日も何日も公演したものだ。今時、こんなことをしていたら教育委員会や教育ママから大目玉を頂戴するであろうに当時は村中の人々が喜んでくれたものだ。想えば天下泰平の時代であった。学芸会が終ると運動会の準備にとりかかるのが習わしであった。今年こそは新機軸をだそうと、参考書を調べたり、他校を参観したりして、何とか運動会に新風を送ろうと努力をしたものの、備品の関係や運動場の広さ、児童数の関係で、旧態依然たる運動会

になつてしまふのがおちであつた。それでも子供達の喜びの歓声は終日不動山に反響し、重箱をさげた親達の楽しいげな談笑は、脳裏に深く印象づけられた。あれを想いこれを憶ふにつれ、私にとつて、懐しい五年間の前宮の生活であつた。

関市會知向山中部女子短期大学在任

思い出あれこれ

平光花子

冬とは思えない程の暖かい日差しを背にうけて、私は今遠い昔を思い出しながら静かにペンを走らせております。

美濃の山奥から、広々とした濃尾平野の中央に小じんまりと建っている前宮小学校に転任してきたのは、昭和五年の春でした。当時私は十九才、二年間の教員生活を経てきたとはいえ、まだかけだしの若い女教師でした。

校長先生は横山鳳潤という方で、お寺の住職らしい温厚な先生でした。教頭の丹羽先生は髭が濃く黒ぶちの眼鏡をかけた体格のいい先生で、何となく威厳があり近寄り難い先生でした。でも話してみると想像とは全く違い、やさしくてユーモアがあり、細かいところまでよく指導してくださいました。このほかに男の先生が五、六人、女の先生が石屋先生とほかにもう一人、それに私をませて三人でした。

総員十余人の構成で、職員室はいつも家庭的な雰囲気にも包まれていました。あれからもう四十年、当時の先生方も今はどうしていらつしやることでしょう。筆不精でお便りもせず申し訳なく思つております。あの頃お世話をした幼ない児童たちも、今はきっと町の中堅となつて活躍しておられることでしょう。また女の方はどこかいいママさんに、いや、若しかしたら初孫の一人位はあるかもしれませぬ。

前宮小学校在職はわずか二ケ年、それにもうずいぶん前のことで記憶も定かではありませんが、私にとつて忘れ得ぬ思い出の二つ三つを記してみます。

私の家から学校へは八キロ余りで、通勤は不便な方でした。航空支廠前(今の三柿野)で電車を降り、歩いて南へ三十分、今なら車を使うでしょう。途中飛行場をてくてくと横断します。飛行機が滑走し始めると、係の人が南側まで車に乗せて横断してくれました。ちょっといい気持ちで、こんなことも通勤の一つの楽しみでした。

飛行機で忘れられないのは、私が最初に授業をした時のことです。爆音がやかましく、思わず「ちよつとまつて、聞こえないから」と子供たちとの対談を中止したことがありました。山の中の静かなところから出てきた私にはわずかの音も苦になったのです。子供たちはきょとんとしていたようでした。気がついた私は何だか顔のほてるのを感じたのでした。

楽しい思い出の一つに体育の時間があります。それはお不動様へ登ることです。南を見ると、木曾川が白く光つて一すじの帯のようにゆつたりと流れています。じつと見ていると、つらい事もいやな事も忘れて何となく心がすがすがしくなるのです。

もう一つ私の頭にはつきりと残っているのは七夕祭で

す。行事の一ヶ月も前から先生も児童もはりきつて劇やおどりの練習をしました。当日になると運動場に舞台をつくり、思い思いの願いごとを書いた短冊をささ竹につるして、えっさえっさと舞台のまわりに立てかけるのでした。夜になると星空の下、川風にかすかにゆれる岐阜提灯、色とりどりの美しい色紙たんざくの中で楽しくおどったり歌ったりしました。ほんとうになつかしい思い出です。

学校も、きけば立派に新築され、近く創立百年の記念祭が行われるとか、まことにおめでとうございます。どうかますますご発展のほどお祈りいたします。私ももう去年還暦、今後は楽しい思い出を大切に、健康で幸せな日々をおくりたいと念じております。

岐阜市長森新田町在住

前宮の思い出

牧田芳太郎

わが国前古未曾有の重大変動期に在職した二十数年前

を追想し、感慨無量の思い出の一端を申し述べます。

一、前宮の特徴

人情が豊かであり、相互扶助、共存共栄、郷土愛の精神に富んでおり、報徳会、敬老会等の良風は、前宮を代表するものであります。

健康を増進するという面に特に積極的でありまして、団結心の強固なることは他に稀でありました。又、教育熱は極めて旺盛であり、物心両面にその熱意の程が伺われ、教育者であった私共は実に楽しく、日々愉快に教育に専念することができました。

大東亜戦争中は、村当局をはじめ警防団及各種団体は、統制ある組織のもとに、挙村一致、村民の安全福祉のために活躍され、被害を最少限に止められました。そして、二十年八月十五日の終戦を迎え、人心の動揺激しく不安と恐怖に襲われ、憂慮しているとき、極めて冷静に、確固たる信念をもって、郷土の再建に、平和な村づくりに貢献されましたことは、感嘆の外ありませんでした。

一、学校教育

童には余りにも可憐ではありましたが、どのような苦境に立つても、これに堪え得る魂の教育につとめました。

時は切迫し、やむなく運動場を畑とし、甘藷床（普通苗床、電気苗床）の造成、油菜特設苗圃造成、甘藷馬鈴薯南瓜等の栽培、木曾川原の開墾、木曾川からの用水路造成、通路の修理、落穂の拾集、桑皮コーゾの供出、手薄な家庭の援助、勤労作業に協力し、専念しなければならなくなつたのであります。

昭和十九年には余儀なく、校舎の一部を兵舎に貸与し、不便を克服しつつ教育に支障のないよう留意いたしました。

防空帽をかぶり、防空袋を肩にかけて登下校する児童の姿には、あわれさとのもじさが漂っていました。

余念なく学習している最中に鳴る警報のサイレンに恐れとおのきのために動揺する児童を敏捷に避難させたり、家庭へ送り届けたことは幾度であつたかわかりません。

イ、小学校教育

私は、昭和十八年四月一日から昭和二十二年三月三十一日まで在職四ヶ年でありました。

私の着任当初の教育方針は、教育勅語のご聖旨を奉戴し、教育に関する諸法規を遵守し、左の諸点に留意し、児童を教養ある善良有為な国民に養成することにありました。

- 1、魂の教育
- 2、自主学習
- 3、創造性啓培
- 4、郷土に立脚
- 5、勤労愛好
- 6、道徳尊重
- 7、個性尊重

第一年目は、この方針に基づき挙校一致、真剣に取り組み、成果をあげることに全力を傾注いたしました。

第二年以降もこの方針を基礎に一大決意でのぞみましたが、戦争はいよいよ熾烈を来たし、国をあげての食糧不足と諸物資の欠乏に加え、配給や供出の制度も一層強化され、日常生活は極めて困難を感じるようになりました。

「勝つまでは欲しがりません。」を合ことばに幼ない児

厳しい燈火管制下に起居する児童をしのんでひたすら安全を祈つたものであります。

又、応召者の武運長久祈願や諸慰問あるいは留守宅訪問等は随時いたしました。なかでも無言の凱旋者をお迎へいたしました時は、胸迫り、断腸の思いでただ哀悼合掌するのみでありました。

昭和二十年六月九日昼食直後、艦載機の襲撃により教室へ一発、運動場へ数発の直射を受けた時は、生きた心地はなかつたのですが、児童は帰宅後であり、職員のみであつたことは本当に有難く神仏の御かげと感謝いたしました。

学校として襲撃を受けたことは、前後を通じこの一回のみであつたことは実に不幸中の幸でありました。

学用品は極めて少なかつたため節約に節約をさせました。鉛筆も短くなれば竹筒にさして最後まで使わせ、書方用紙は、古新聞紙やほご紙古雑誌を使用させました。又、古教科書使用は大半でありましたがこれらは一例にすぎません。他はおして知るべしであります。

弁当は焼芋、甘藷、馬鈴薯、麦飯でしたが当時の児童は決して不足は言いません。感謝の合掌でありました。おやつ菓子などは全くありません。今から思えば夢のようなものでありました。

当時の子ども達の生活を思ふと、可愛想で涙がこぼれて来ます。

年中行事としての学芸会、校内運動会等ささやかではあったが父兄を慰安し、父兄懇談会、家庭慰問には児童の健全育成について語り合いました。

小学校時代最も楽しかった思い出の修学旅行、春秋二回の遠足、秋の運動会等も時局柄制限され、戦前戦後の皆さんの想像にも及ばぬさびしいものでありました。

然し前述のような極めて悪状態の生活ではありましたが、よくこれを克服した精神力の偉大さは只々感嘆するの外ありませんでした。

昭和二十年八月十五日終戦。

この非常最悪事態の到来を誰が子期していたことでありましょう。あまりのことになだ、茫然とするのみで

ありました。

愈々占領政策下となるや、憲法は平和憲法に改正され、諸制度も教育諸法規も改正され、児童憲章も制定されて百八十度の歴史的な転換に遭遇しました。

私共は育英の尊厳と児童愛を自覚し、次々に出された諸指示に従い、最も慎重な態度でこれに対処したのです。

読書をしたり、あらゆる研究をしたり、諸講習会に出席したりしてありとあらゆる方法により、民主主義の新教育方針に添うよう全力を尽しました。

その頃児童は児童なりに、学級自治会や校外子供会等と、自主的な態度で新しい方向へ進んだようでありました。

幸いに、このような悪条件下にも、向学心に燃えた児童は真剣に学習し、成績優秀で各種中学校に進学しました。又家事に従事するもの、他に就職するものも、心身共に頗る円満で、各自の個性に応じそれぞれ専心努力したのであります。

今日前宮の内外各職域に於て、中堅となって活躍し

つつあることを聞き頼母しいことあります。

特筆すべきことは、私共が戦事中、生命をかけ慎重に奉護してまいりました御真影を、終戦と共に国家神道を廃する趣旨に則り、御真影奉拝式を行い、式後果正庁に奉還し奉ったことあります。

明治天皇 昭和二十一年二月九日奉還

照憲皇太后 同

大正天皇 同

皇太后陛下 同

天皇陛下 昭和二十年十二月三十一日奉還

皇后陛下 同

ロ、青年学校教育

私は、昭和十八年四月一日から昭和二十年三月三十一日まで二年間校長として在職。

昭和二十年四月一日から昭和二十二年三月三十一日まで二年間稲葉郡中部青年学校教諭兼任

昭和二十年四月一日稲葉郡中部青年学校創立（前宮更木那加三ヶ町村合同）

新任校長に前宮国民学校教頭丹羽久克先生ご就任。

村民一同祝福しました。

さて前宮青年学校の生徒と言へば、極めて真面目でありました。表裏なく、元気活発、従順で素朴、常に進歩向上しようとする美点をもっておられました。

出席率はよく、学業教練は優秀であり、わけて銃剣術教練は県下でも屈指でありました。そのかけには教練指導員諸氏の涙ぐましく努力と情熱があり、常々感謝を捧げておりました。連合演習、強行軍、雪中行軍銃剣術大会、小学校との合同運動会其他諸行事の思い出はつきません。

中部青年学級となり、非常に不便であった中を三ヶ町村巡回教育に尽瘁され、其の成果を挙げられました丹羽校長及び諸職員のご労苦は、並大抵なものでなかったことを只々感謝するのみでありました。

一、男子青年団

家業に従事する者も、軍需工場に勤務するものも、等しく青年学校に入学し修養に励まれ、余力を防空作業に勤勞奉仕にと捧げられました。

諸美点は青年学校の部で述べた通りであります。

長平区の青年丹羽某君が肥料の乏しき時、研究に研究を重ねて自給肥料により甘藷反当千貫増収の実績をあげ農民を啓発されましたことは、偉大な功績といふべきであり、賞讃の外ありませんでした。

又前渡の青年団の方が共同水田と共同研究畑を木曾川原の一部に設置、食糧の補充に努められましたことも忘れられぬことであります。

一、婦人会、女子青年団

留守を担当し、後顧の憂をなくせんものと、弱い女性がモンベ姿に決意も愈々固く、雄々しく立つてあらゆる苦難を克服し、家計に、子女の教養に、勤労奉仕に、救急療法に担架訓練にと専念されました。また或時は権威ある講師を招き時宜に適した修養をされました。ドイツ人、サノエンネ先生を招き研修をされたのもその一例です。

馬鈴薯、甘藷の加工、廃物利用、生活改善の諸研究発表会を盛大に開催され、県内婦人会員をアツとさせられましたことは、強く印象づけられています。

運営資金の獲得には、なかなか骨が折れましたこと

を捧げます。同時に前宮の永遠に幸あれと折って筆を擱きます。

昭和四十七年二月五日立春の日

(七十八才)

市内那加前野町在住

前宮中学校の思い出

松尾 松司

前宮中学校第二代校長田中桂先生の後をついで、私は昭和二十六年四月より三十五年三月まで稲羽中学校を通じて、九年間勤務させていただきました。

先づ第一に、校地内に祖国日本のために、尊い身命をささげて下さった英霊をお祀りしてある立派な忠魂碑が、いつも児童生徒をお護り下さっているのは、何よりもありがたく、教育のためにより環境であると思えました。

校舎は当時として珍らしいというよりも貴重な檜材が、柱や床板等にたくさん使用してあって(戦争中の爆撃の

を案じておりました。かかる中に、常に、慰問袋慰問文を発送され、出征兵士を慰め激励されましたことや映画により村民の慰安にもつくされました等、情操面におけるご努力にはただ頭がさがりました。

尚信仰心の深かったことも、児童等とともに神社、仏閣、墓地の清掃にと努められましたことによってもわかります。

一、結び

今日、前宮御不動様の山上から四方を展望いたしますと、眼下にひろがる前宮は、都市計画法により着々整備されつつあり、近代化された建築物が林立しております。思い出の学校も新築され威容を呈し、木曾川の清流には愛岐大橋が架せられ、愛知県との交流もはげしく、産業文化経済とめざましい躍進をなし、隔世の感がするのであります。このすばらしい発展も、伝統ある人間愛、郷土愛に生きる前宮の皆様のご結晶の賜物と敬意を表します。

最後に私の在職当時生死を共にして御協力下さいました前宮村民の皆様、学校の諸先生、児童諸君に感謝

ため、都市は廃墟となり、住宅建築のため木材其他の建設資材は極度に払底していた。)堅牢でスマートな当時では、郡内は勿論、県下でも稀なすばらしいものであった。その上校舎の前には、実に見事な枝ぶりの、松の木などの植込みもあって、当時の村当局や住民の方々が衣食住の窮乏の折にもかかわらず、次代を担う青少年の教育に、実にありがたい情熱を注いで下さった事がうかがわれて、当校に奉職した事の幸福をしみじみと感じました。

その後も村民の方々の熱意が、理想的な特別教室を建設して下さいされ、又見事な学校庭園が寄附と勤労奉仕によって完成したわけでありませう。

庭園ができた直後、生徒の誰かが書いた感想文の中に、「或大人の人が「学校に庭なんか必要ない。せいたくだ、こんなものをつくるより理科か何かの道具でも買った方がよい。」といっているのをきいた。僕は勉強のよくできるのも大切なことだが、PTAの方々が、心をこめてこしらえて下さった、この立派な庭園を毎日眺めて心の美しい、やさしい人間になることの方がもっと大切だ。」と

いうのがあった。そのことを今でも時折思い出し、現在の世相を眺めて今更の如くその感を深くしている次第です。

其の他放送設備の完成、当時では珍らしいオランダ製のテープレコーダーの寄附等々。

学校としては、校下のこの熱意に応えるべく、先生も生徒も実に一生けんめいやりました。それは平素の学習に全力をつくすのは勿論ですが、郡内や県下とこの学校でもやっていない。全校生が日記をつけることを実行しました。それは三か年の中学校生活を、一冊の累年日記にかいて毎週一回先生にみてもらいました。

今から考えれば生徒たちも、先生も実に根気よく棒を折らずやって下さったものです。先生たちは、昼食時は勿論、他の休憩時でも好きなタバコもゆっくり吸わないで、いつも日記をよんで赤ペンで感想をかいて下さる姿が、今でも眼前に髣髴とします。

其の他青少年赤十字（JRC）の活動、アメリカンスクールとの交歓等思ひ出はなかなかつきません。生徒たちは卒業後もよく学校を訪れてくれました。特

おんぼろ校舎の想出

松 永 房 江

(旧姓 平光)

私がお勤めしたのは昭和十年、十一年の二ケ年間でしかたけど、担任の五年の女子組の教室へ案内されて驚きました。学校続きの村役場の今にもこわれそうな、階段のぼろとそこが教室で、昼なお暗く、後や横には役場の書類がわんさつつまれていて、簡単に云えば物置小屋でした。おまけにぶた張りの床で少しおどれば下の教室や、役場に迄ひびいて、授業や仕事に支障を来すと云うことで、いやが応でもオシトヤカをモットーに一年やりましたが、発育盛りの女の子等には可哀そうだなというつも思っていました。でもみんないい子ばかりでよくなついでくれて、やり甲斐のあった一年でした。此の教室と共に想い出すのは体育デーの十一年十一月十一日です。此の日は時折水雨のばらつく寒い日で、熊沢先生が此の寒さと、十一の数が三つも続くのは、忘れる事が出来ない

に高等学校を卒業した折。

「先生、お蔭様で、高等学校を卒業することができました。ほんとうにありがとうございます。」と手にしたばかりの卒業証書をもってあいさつに來てくれた時はほんとうに涙の出る程うれしかった。

青年学級も他の町村では息もたえだえであったが、当校では授業は勿論、授業がすんでから人生問題などの話し合いに時間のたつのも忘れ、十二時、一時となり、宿直の先生に御迷惑をおかけした事も度々ありました。

前宮校下、稲羽東小学校下の皆さん、他では見られない、数々のうるわしい伝統を小学校創立百年を機に、更に充実発展させて、より立派なものとして後世に伝えてほしいと切望する次第であります。



日です。と云っておられました。が、未だに前宮と云えば此の日を想い出します。でもその頃の校長横山先生は今亡き人の数に入られたそう、感慨無量と云う所です。私は縁あって可児郡の一寒村の寺にとつき、四子に恵まれ只今は孫のもりであけています。同窓会の皆様や、先生方が、可児郡へお出でになつたらぜひよっていただいで、昔話に花を咲かせたり、現在の小学校のあれこれ承りたいと思つて居ります。皆様のお立寄りをお待ちして居ります。

(可児郡可児町柿下潮音寺)

稲羽東小学校の思い出

森 壽 子

昭和三十六年四月一日お不動山のふもと当時の前宮小学校に、転動した。広い運動場に木造校舎が四棟ならんでいた。東二棟は前宮中学校の払い下げ校舎ということ

だ。校長室の廊下で山田教頭先生にあった。この人が校長先生かと思つて挨拶したら違つていて坪内校長先生が室の中におられた。(現在坪内校長先生は故人になつてしまわれた。まことに残念至極で哀せつゝの情忍びがたい。)四月六日担任発表二年生と決まつた。五十五人の級で教室いっぱい並んだ顔顔………
この子たちと二年間その後も続いて五年間、楽しい苦しい生活は過ぎた。

川原でキャンプ

運動会になると名物のテントが立ち並ぶ。(20こくらい)このテントを借りて川原で六年生のキャンプ。飯ごうのたき方が悪くておこげを作つたりカレーライスのおいしい味、なすの即席漬、石河原のおさしきで舌つづみをうった。又水をもらいにアサノセメント工場まで出かけたたりいろいろあつた。夜は蚊の猛襲にあつておちおちねられない。翌日はねほけまなこをこすり、午後は各家庭でグーグー睡眠——となる。

塩谷ヒヨコへ写生会

五年全員で塩谷ヒヨコのにわとりを描きに行った。広

稲羽東小学校創立百年祭に寄す

安田 猛

今でこそ稲羽東小学校などと、しゃれた呼名をしているが、我々の当時は歴とした前宮小学校であつた。

只さえ物覚えの悪いこの男に、半世紀も前のことを、さあ思い出せといわれても、そう易々と出るものでない。随つてうだりのまわつた脳味噌を、あえたりこねたりした揚句、やっと當時を思い出したのが、この解説入り職員録である。失礼乍ら文中の敬称は省略させて頂く。

昭和三年九月一日、兵役を終つてこの学校へ赴任した。驚いたことには、どれもこれも囚人のような先生ばかりである。身には一定のよくれた団服をまとい、頭は皆丸坊主である。彼等はこれで以て、思想堅固な証左とも思つていたらしい。斯く申す手前もやはり、兵隊帰りの丸坊主ではあつた。

第一横山鳳潤校長は、きざみ煙草を煙管につめ、ゴロ

い敷地で子どもたちは思い思ひにかきはじめる。おんどりを金あみごしにかく子、三羽のかきなつたにわとりをかく子、とさかの赤をあざやかなタッチでえがく子、それぞれである。そんな中を見て歩くのが楽しかった。中にはたまごを産むところを見たとき大はしゃぎする子もいた。お昼には塩谷ヒヨコさんからゆてたまご一個ずつのサービスがあり子どもたちも思わぬおくりものに、ほくほくだった。続いて給食のパンがとどくと木曾川の堤防で思い思ひのところ陣取り子どもたちは青空給食がはじまる。とてもおいしいのできれいに平らげてしまふ。そして今日の収かくはにわとりの絵(すばらしい?)午

后三時ごろになると帰校する。この子たちは今でも覚えていてくれるんじゃないかな。
今現在高校二年の子たちだ。だからこそわたし稲羽東小を去る時思い出の木曾川の辺で送別会を開いてくれた。あの時は感激だった。実にうれしかった。

その心が——。今もわたしの脳裡に浮かぶ。

市内神置町在住

ゴロツと音をたてて吸いまくり、教育価値のないことを、何の彼のもつたいづけて、もたつきもたつきよろよろと、職員会議を司会した。次席の遠藤亮一は、小男のためか気ぜわしく、モシヤクシヤモシヤクシヤと幾つもの仕事をいつけた。三席の丹羽久克は、鐘旭のような濃い顔面で、報徳会の有難さを、どここの区別なく説く。上三人が斯うだから、ままとまりのない学校と、誰の目にもよく分る。

少し年令を繰り下げて、遠藤卓朗と加藤嘉雄がいた。我々三人殆んど同年輩であつたと思つている。遠藤は蘇原の村長の息子とかで、人となりも柔和であり、自分のような野蠻人とは、凡そ肌が違つていた。然し不調和の調和というべきか、ピッタリした所が多かつた。二人で宝塚へ観劇に行った帰り、北野の天神様へ詣ろうと、殊勝な話がまとまつた。

何か縁日であつたと見え、善男善女が群をなし、有難さうに神前にいた。折りも折り社殿では、ビヒュリコンドン、ビヒュリコンドンと巫女が二人、舞を奉納していた。それを見て彼曰く、「ほんにこりやようおどる

じゃないか。「ほんとになーん。相植を打つ。善男善女の顔は一斉に我々に注がれた。我々は早々その場を逃げ出した。

加藤の方は前宮村の村長の娘婿というから、村の中でも多少羽振りが利いていた。何彼につけてコツコツと、計画書を作るのが、生れつきこの男の特徴である。百年祭などという、骨の折れる仕事まで、企画したのがこの男であろう。いい年をして未だに癖がとれないのだ。

支那事変に出征し、負傷して帰って来た。後日自分が他校に居たら、大尉になって講演に来た。それ以後会っていないけど、終戦間近になった頃、衛門少佐になっただろう。持つて生れた性分で、市会議員でもやるとよい。或はもうやっているかも知らんて。

これ等二人をさておいて、暴れん坊の本尊は、申す迄なく自分であった。

その外にもう一人五島峻良がいた。坊主のくせに生臭く、つまらんことに理屈をつけて、ああのこうのそこねまわし、まるで善智識のような顔をして、すましているのがこの男の癖である。十年位前に一度会ったなら、「校

下でバレーチームを育て、何処やらの大会で優勝したと聞いていたから、話半分聞いても、バレーに骨折った事は事実であろう。年老いた今では、万福寺の塔堂に迎えられるとも思っているだろう。

翌年川本新兵衛が来た。こいつは生粋の岐阜ッ児で、余り大男でないためか、血のめぐりがよく、伝えた中で的人物である。任地が岐阜に移ってから、巧く世渡りしたであろう。その頃の口の悪さは、斯くいう自分と東西東西であった。この男は教員でいて、教員臭くない所が、大いに買われたのであろう。

更におくれて永田兵一が来た。文字通りの新米先生であつたが、胆っ玉の据つたやつで、煙台独立守備隊へ志願し、先の戦争では大いに活躍したに相違なく、大隊長位になつたと思うが、おそらく戦死したのであろう。

更に翌年校長が代り、横山鳳潤は更木の方へ、左遷のような栄転をした。加藤静雄が角刈頭を振り立て、田舎回りの創始役者のような顔をして赴任した。この一年で自分も転任したから、もう何も分らない。

この学校はいう迄なく、僻地寒村の学校である。倒れ

かかった校舎の二階に、腐つたような半鐘が屈托そうに下がっていた。来た早々から鐘打ちを、無理むたいにいいつけられた。然し、ついぞ正時に鐘の鳴つたことはなく。大体このずさんな男に、正確を期すべき点鐘番を、いいつけた方が間違いで、校務分掌のつたなさを、今に至って指摘したい。

板戸一枚へだてただけで、職員室と役場があつた。村長は丹羽弥太郎という人で、先にふれた加藤嘉雄の岳父である。温厚実直な人で口の悪い自分にも、何の彼のといいようがない。只覚えていることは、入営兵を送る時両手を体の前に組み、型にはまった調子でもつて、数多ある壮丁の中から抜擢せられ、名譽ある軍隊に……と送別の辞を述べた。

今でも忘れられないことは、夜学を終つて帰るとき、ほうじろ坂の暗闇に、ゾーンッと鬼気がおそい来て、身の毛のよだつたことである。

追記 (同封書翰による)

編集室

岐阜市に在住して十数年になります。市の西部が北の方に発展する所謂川北の喉元になり、一日毎にどんどん家がふえています。島小学校校下で四千数百世帯の連合広報会長として、何にも彼にも差し出し口を叩いています。

そのためか何か知らんが、去年も一昨年も十月の第一日曜に展開される岐阜信長祭に騎馬武者として参加することができました。四十五年は二十五騎中の一人。鶴沼の城主大沢次郎左エ門和泉守に扮し、四十六年は二十騎中の一人で加賀百万石前田利家に扮しました。集まった馬の中で一番大きい馬(何寸と言うのかは知りません)富士号といって、元プロレスラー力道山の持ち馬、現在は岐阜市畜産センターの所属になっています。騎馬の面々は、市長、市会議長、県会議長の三名と、連合広報会長二名、他は商工会議所の代議員です。

加納清水町の武道館に集合し、神田町通りを馬上豊かに颯爽と行列し、馬上から読者の幾人かお目にかかったことと存じます。

岐阜市島栄町通2在住

百年記念史に寄せて

山 幡 悟

私はまだ二十四才紅顔の青年でした。お不動さん西側真下の校舎で、当時四年生のクラス、現在稲羽中学校の教頭をしてられる、丹羽久義先生などを受持ったのが私でした。憲雄君、行雄君、義男君、千代子さんなどと次々と、いま私の脳裡に浮んで来ます。それらの人々はいまよき父となり母となり、社会の中堅として活躍していただけることでしょう。

それからもう四十年。その間、昭和十四年には東京に出て同和教育推進のため全国指導に当り、又戦力増強のためと称して政府が動員した女子勤労報国隊員の補導もやりました。

昭和二十年三月再び郷土に帰り、県の社会教育主事として、アメリカ軍政下におけるPTA、婦人会、青年団等民主団体の再建に西濃地方事務所（現在の西南濃県事務所）

私が、かように変転きわまりない数奇な四十年間を経た今日、痛感致しますことは、事に処して、いかなるときも打算を離れて全力を集中して当るべし。人の知識は余り頼りにならない。常に人間以上の何物かの偉大なるもの、力によって、ささえられているものだ。いかなる地位にあつても、名利にとらわれてはならない。人の価値は天が公平に判断するものだ。ということですが。

誠実と、勇気と、努力が私たちには絶対必要な条件であることを、教えられました。稲羽東小学校の益々発展されることを、心からお祈りします。

昭和四十七年二月二十日記

養老郡養老町石畑在住

務所）教育課で働き、続いて小学校長に転じ、最後に県立盲学校で十四年間盲教育にたずさわり停年退職をしました。

現在は、昨年の統一選挙で、養老町議会議員となり、地域社会の開発のため、残る人生の全力を傾けております。

実に有為転変限りない人生行路を辿って参りました。しかし学校教育生活の中で、前宮での二年間は特に私の思い出多いところの一つであります。

ほおじろ坂を徒歩で越えての通勤、一学期の終り頃満天の星空の夜行われた七夕祭、伊木山を通り犬山の遠足、さらに深い印象として残っているのは前宮青年団が、郡の陸上競技大会で意外にも優勝をし、その晩直ちに当時の丹羽村長の発起で、約八十名の大祝賀会を開かれたことです。

いまは道路が整備され、木曾川に夢の大橋が架橋され、渡船の姿は消え、大工場の白い棟が立ち並び、近代的な喫茶店の姿も見え、様相は一変しました。前宮村は各務原市となり、校名は稲羽東と改名され今昔の感を深くし

想 い 出

横 山 か よ 子

(旧姓 柴田)

あの登校の日
あの日は寒い朝だった
運動場は銀世界
白髪の父に連れられて
おじおじ入った職員室
羽織袴の晴れ姿
先生の一年生
恩師や知らぬ先生に
お願いしますと一年生

御指示をうけてかえるとき
臆病だったあの頃は
金次郎の立像が

しっかりやれといっていた

思い出

目玉かがやく一年生

すっかりあがったわたしの耳に

うれしくひびいた

「先生！先生！」

かげろうもゆる春の日に

子らのかわいい手をとって

原っぱいっぱいひびけよと

無心にうたったふるさとのうた

風にはためく万国旗

職員競技のバトンは軽く

「がんばれんせい！！」子らの声

童心そのもの運動会

二十余年の思い出は

なつかしいことばかり

心の中を駆けめぐる

回りつづける走馬灯

退職の日

おもえば短い五年間

戦死なされたあの先生

おやめになったあの先生

春よと桜がふくらんだ

あの友この友学び舎の

広き庭に立ったとき

壁のかけから廊下から

別れた人の声がする

休みのすんだ二学期の

九月も初旬の木曜日

村長さん先頭に

去る人来た人一堂に

みんなで別離の宴を張る

なつかしの歌にかくし芸

時の立つのも忘れたり

空の星まで泣いていた

父と前宮

横山 瞭 達

私の父は蘇原宮代町のお寺の二男坊として生を享け、法衣に縁を切ったわけではありませんが、教育者として一生を終りました。

大正十二年四月、蘇原小学校から前宮小学校に転任し翌年四月校長を拝命し八か年お世話になっていきます。私

の物心のついた頃から、学校の話がでると、すぐ前宮時代のことから始まります。老後退職後も、一番先に出る話題はきまって前宮時代です。どんなになつかしく思っていたことでしょうか。

前宮の人々程慈愛のこもる学校後援の旺盛な村は前後五回転任した他の町村には比較にならぬ。オレが可愛がってもらったのか？又は特に応援してもらえたのかは知らんが、ほんとうに肌ざわりのよい、つきあいやすい人ばかりだった。予算の関係で村では買ってもらえぬ特別の備品が、同窓会に頼むと寄贈してもらえる。労力を要する作業は青年団や処女会がやってくれる。村内各種団体の団結と奉仕的精神には驚くべきものがあった。古い写真帖を見てはその時の説明をしてくれましたが、あまり耳に残っていません。

私は幼年の頃父母につれられて来て、小学校五年生まで二厄介になりました母校です。父が校長だったというわけではありませんが、生れつきのヤンチャ坊でほんとうに横着をして皆々様にご迷惑をおかけしました。穴があつたらはいりたいとは私のことです。

父は根気よく日記を書いていました。年次順に本箱に並べてあったのが、転任の時や戦争の時やらにゴテゴテしましたので全部は見付かりません。前宮時代のを五六冊めくって見ましたので、二つ三つを拾い出してご照会したいと思います。

報徳会

長平報徳会・一番地報徳会・六番地報徳会等へ出席、補習学校のため丹羽先生と交代とか遠藤先生と交代とか書いてあります。協議事項も色々あります。月に十二、三回廻ったようです。交情の場として、社会教育の場として各部落月一回ずつあったようです。すると先生は月の半分誰かが出席したようです。指導か娯楽相手であったかも知れませんが、冬の寒夜に出かけるのは大変だったと思います。それに毎週四日の補習学校（夜学）があったようです。二回と三回の週が記されていますが、昔の先生は昼夜兼行のようです。

青年訓練所

毎週日曜の午前中軍事訓練をやったようです。加藤少尉の活躍が各所に見られます。田中利エ三郎氏が同年で

来十六日大饗第一日ノ儀行ハセラルルニ付

當日正午 岐阜中学校 ニ於テ

饗儀ヲ賜リ候條此段申入候也

昭和三年十一月一日

宮内大臣 一木喜徳郎

前宮尋常
高等 小学校長横山鳳潤殿

父の最大の光栄だったのでしよう。

朝顔と菊

補給部の雇員に只野さんとかいう方があって、長年の辻附近に住んでいられたそうです。夏は朝顔の鉢植大輪咲を競い、夏休みの毎朝持ち寄っては品評会を開いて研究会、秋は大輪菊の陳列会、小菊は懸崖作りなどかいて、花造りを楽しんでました。ボール投げをしていて、菊の先端にあるたった一つの蕾を折らかし、ひどくおめだまをくわったことを覚えています。校庭の隅々や校舎の軒に花壇を作らせられたこともあります。

引越し

あり、「教官殿」の尊号があるだけに熱心だと記されてあります。郡連合演習があって三里村のお宮で露営したようです。三里村といえば加納の西ですから十五六キロあるのに例の木銃をかついで歩いたもんでしよう。青年訓練は徴兵検査までやったようです。

御大典奉祝

昭和十年十一月十六日、岐阜中学校に於ける地方賜饗に参列の光栄に浴す。という記事を見てアルバム中の写真を思い出し写真を提供して聞いていたことを述べましょう。写真に四人写っています。村長丹羽弥太郎氏（前列左）、助役田中太蔵氏（前列右）、歩兵少尉加藤嘉雄氏（軍服）、小学校長横山鳳潤の四人で夫々の身分だそうです。

村長 全国全員。

助役 金鶏勲章授受者の中から抽選んで稲葉郡五人に

当せんされたから、助役の職ではない。

加藤 少尉で正八位、高等官だから。

横山 判任官三等の学校長だから。

重要書類の中に次の案内状らしいものがあります。

更木小学校へ転任の時でした。午前中青年訓練をやった人達が十幾台のリヤカーを持って来て、引越し荷物を運んでくださいました。私は自転車に乗せてもらう、母と妹はリヤカーで運んでもらう。十幾台のリヤカーの列です。立派なお嫁入りでも、こんな行列は見られぬでしょう。「去るものは追わず」というのに、八年間お世話になりっぱなしで、官命により転任となると、こういうご援助です。運搬をお願いしたわけぢやありません。生徒の皆さんが自発的にやってくくださったのです。前宮の人々の人情味の暖かさ。恐らく他所では類例のないことだと、この話が出ると父は涙を浮かべて喜んでいました。

記念品

前宮を去る時、村からと各種団体からと立派な記念品を頂戴して来ました。大きな宣徳火鉢今尚大切に使用させてもらっています。毎日鉄瓶に湯をたぎらせ薄茶をいただいております。事ある時に出す会席膳もその時の記念品です。その都度前宮という何物かが脳裏に浮び、深

第五編
卒業生の声

く感謝の念を新たにしております。

昭和三十三年四月、六十六才の齢を一期に夜半の嵐に桜とともに散り失せました。告別式には前宮同窓会の大勢の方々が参列して下さって別れを惜しんでいただいたことを思い浮べて、亡父は一体前宮にどんな功績を遺したんだらう？ で筆をとめさせてもらいます。

(市内三井町在住)



南方松原が住宅地に愛岐大橋がかかり江南市が発展する



→ 大正十三年七月
四年女子部陸上部選手
加藤嘉雄先生提供



← 大正十四年十月運動会
小山彦憲氏提供



第五編

卒業生の声



→ 大正十二年
少年野球のはじまり
他校試合に優勝
(石屋良仙先生提供)



← 大正十三年
スポーツ陸上部服装改正
(石屋良仙先生提供)



→ 昭和三年学芸会
(石屋良仙先生提供)

大正十二年
御大禮文芸入選
賞状
右木園報御大禮記念號
文藝募集に入選ス仍テ
硯箱一個ヲ贈呈シ茲ニ
之ヲ賞ス
昭和三年十一月
御大禮文芸入選
賞状
右木園報御大禮記念號
文藝募集に入選ス仍テ
硯箱一個ヲ贈呈シ茲ニ
之ヲ賞ス

↑ 本人提供 (本文参照)

→ 昭和三年十一月
御大禮文芸入選 (賞状と和歌)
(荻谷さわゑさん提供)



昭和三年十一月
御大禮文芸入選
賞状
右木園報御大禮記念號
文藝募集に入選ス仍テ
硯箱一個ヲ贈呈シ茲ニ
之ヲ賞ス

→ 永井勇郎君の出師遺書

→ 永井武男氏提供
(本文参照)



← 昭和三年 学芸会



→ 昭和三年 処女会の活動



← 昭和三年 処女会の活動
(石屋良仙先生提供)



← 大正八年(卒業後十年)
恩師永井牛太郎先生を名古屋に
訪れる同級生の一部
(武山秀雄氏提供)



→ 昭和十三年四月
常貞寺で物故同級生の追弔
法要に集まった同級生
(松波久夫氏提供)



← 昭和二十三年
不動山での同級会
(磯野さかゑさん提供)



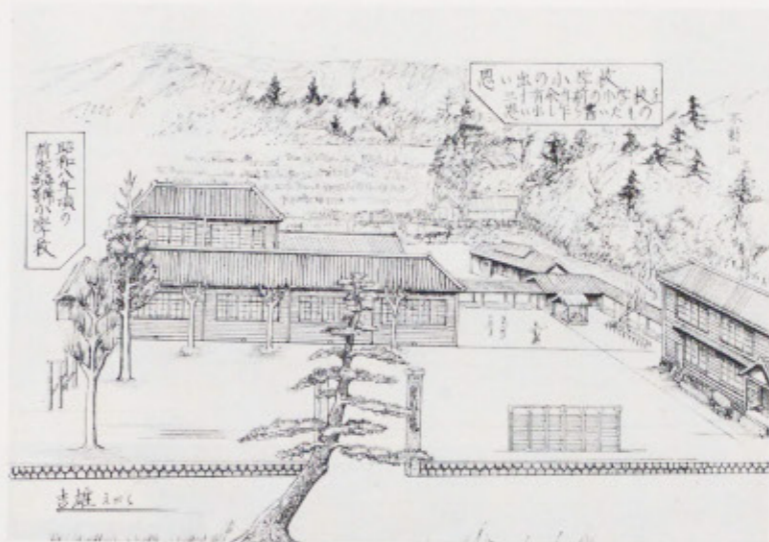
← 大正十二年
前渡西区少年団ラッパ手訓練

(加藤嘉雄氏提供)

大正十二年八月
飛行第一大隊の草刈奉仕
前渡西区少年団



昭和四十六年八月十八日
↓ 県下少年野球に優勝
稲羽東小スポーツ少年団
(長瀬海信氏提供)



→ 思い出の小学校 記憶画

(永井吉雄氏提供)



← ゼロ戦闘機
(永井吉雄氏提供)



→ 卒業後四十年の同級会
(丹羽虎吉氏提供)

昭和38年3月
滋賀県下の悠紀齊田見学
多賀神社参拝 (丹羽久義氏提供)



大正13年8月
養老観瀑
(加藤嘉雄氏提供)



昭和11年3月
郡青年幹部研修会
(尾関正夫氏提供)



昭和12年6月
陸上競技強化チーム
(尾関正夫氏提供)



昭和二十六年
青少年赤十字トレーニング
(南原紀子さん提供)





昭和18年9月
長平青年団主催の敬老会

(牧田芳太郎氏提供)



昭和18年7月
春里修練農場の実習

(磯野さかゑさん提供)



女子青年団の担架訓練

(磯野さかゑさん提供)



ふるさと清韻

青本文恵

ふる里は遠きにありて思うものそして悲しくうたうもの、よしやうらぶれて異土の乞食となるとも帰るところにあるまじや(後略)

室生屋星はふる里金沢をこのように詩っている。文化の覺音の中にも、我がふる里、前宮は何かを語りかけてくれる。

そして思い出の泉である。思い出のひとつひとつを辿ってみよう。新校舎の建つ頃のことである。木曾川を前にして砂や栗石は無尽蔵である。毎日蟻のように袋を肩に黙々と砂や栗石を運んだ苦しさは忘れられない。やがて新校舎が半分出来て上級生が先に移り、下級生が残った。二しよに居る時は余りいたずらもしたかった男の子達に時々意地悪をされて泣いたこともあった。その頃の担任の先生に奥村先生と云う和服も洋服も最高に美しい先生で

あったが、今一枚の写真もないのが残念である。犬の好きな先生は時々犬御同伴で出勤だった。あの頃のガードマンであったと思う。新しい校舎に移った頃、今尾先生のこともなつかしい。体操の時間が雨の時何よりも嬉しかった。

唐獅子城、怪傑黒頭中等の長編ものを徳川夢声の調子で読んでもらった。昨年まではよく車中や岐阜駅などでお目にかかった。面影は昔のままでお元気そうであったが最近しばらくお目にかかっていない。

夏の夜の七夕まつりが盛大であった。地区毎に飾る七夕を一番美しく立派なものに飾ろうと懸命であった。その費用をつくるために朝早くから松林に落葉を掻きに行った。交り気のない美しい松ごを少しでも高く買ってもらうためには、ひととほりの苦勞ではない。いくばくかのお金を得て七夕を買い一人一人に分けて書いて来る。当日は、それぞれの神社で、切りこ、いろ紙、短冊、笹の枝が重たくなるほど飾りつける。夕方校庭に立てる。

夜は村じゅうが集まり、その下できれぎれの映画を首の痛いのを我慢して、あおぎ見るのである。映画が終る

と待望の七夕の奪い合いである。丹精の七夕を少しでも後に残るように、それぞれの通学団が必死に守るのであるが根の無い竹は一瞬にして倒れ、あとかたもなくもぎ取られてしまう。そんな騒ぎをよそに中央の星は美しく輝やいていた。

やがて冬になると、男の子だけのまつりごとがやって来る。

「山の神」さまである。二、三日兄弟達が家に帰って来なかった記憶がある。寝具、食糧を持参で、山の神の宿にゆく、地区の男の子を集めて山のご祭りをする。

山の神さまという人は

一で俵をふんまえて

二でにっこり笑って

三で盃をいだいて

四つ世の中いのように

五ついつもの若えびす

六つ昔の高砂や

七つ何ことないように

八つ屋敷を広げて

り、ふたり減りしている内に誰れも居なくなる。あとは親方達の天下である。残ったお米は宿の人に内緒に安く売る。お金に変えて、まわけをする。二十年も昔のこととなれば、親方が五人居れば、一人当り百円か二百円位だった。と云うことである。これも古く明治の昔からの伝統で、子供たちにはたまらない魅力であつたらしい。エピソードの内に始まって終るこのまつりのひとつの事件をしるすことにしよう。

弟達の頃の出来事である。山の神が飛行場基地内であつたため戦事中は村なかに移転してあつた。平和になつて、元の所へ移すことになつたが本来男の子供達だけのまつりのため大人はノータッチである。

山の神の本体は重さ八十kg位の石であるがお載いもしないで車に積んで、ワッシュヨイ、ワッシュヨイ走り出した。向うからお百姓さんが肥桶を担ってやって来た。スピードの出た車は止らない。勢きつて、正面衝突。目も当てられないことになつてしまった。短気と一徹が一度に爆発した百姓さん、毀れてもいなかった桶をもう一度地面にぶつつけた。お載いもしないでやるから、こう云う

九つ小屋をぶつ立てて

十をとんととおさまつた

と唄いながら家々を廻り、お米、野菜、お金を貰いあつめる。たくさん貰へた家ではこの唄がひとときは大声となる。それで楽しい会食をするのであるが「楽あれば苦あり」あとには大変な事が待っている。昼なお闇い山の大きな松の根元におはします山の神さまに深夜、お供へ物を持ってゆくのである。一団となつてゆくのであるが、時には狐の鳴き声も聞えるのである。お供へをしてその前で、めいめい持って来た薬を焚き、山のごさまという人は、一で俵をふんまえて……と大声で唄う火が消えて辺りはもとの闇にもどる。急に恐しくなり一目散に村に戻るのである。

まつりも終りの交となると、親方は、下級生達にノート、鉛筆などをあたえて解散となる。跡始末と云うことで親方の五、六人は残るのであるが……。お米もお金もまだ残っているらしい。そうやすやすとは帰れないのが下級生達、外でこそそそ恐ろしい。十二月といへば、昔は今より寒気も厳しい。身も心も冷えきつて、一人減

事になるんじゃ。桶は底がぬけてばらばらになつてしまつた。大声で叱られても、手がつけれない。お百姓さんはその憤りを学校に訴えた。とにかく謝らなければ治らない。こんな時の親方は少々のリベートル位、どうなつても良いと思つたに違いない。お前が先にはいれ、いやお前が先だと戸口で押し問答をする。それじゃ一、二の三で一しよに入ろうと云う事になつて、どやどやと入つた。べこべこ種栗頭を下げてやつと治つた。それにしても一人の怪我もなかつたことはまつたく神を恐れない子供達に山の神さまも大目にみてくれたことと思ふ。その時その時の子供達に思い出のページをあたへてくれる山の神さまは、平和の神である。

発祥はと云く明治以前からと云う。このまつりごとが今でも行なわれていると云う事は本當にうれしいことである。毎年十二月になると、常貞寺で報恩講のお経の稽古が始まる。凍りつくような月を視るとき、折々思い出が甦る。からころ、からころ下駄を鳴らしたが毎晩休まずに寺

にゆく、それは、お経より、二院住さまのお話がたのしみであつたからである。あの頃のごえんさまは、良寛さまのように思えた。話がとても上手で子供の心を全身でとらえる話しぶりであつたが毎年同じ話しが繰り返えされる。

「花子と太郎」はよく聞いた。大きな鬼の手から花子と太郎が逃げ出した。それを捕えようとする鬼は、大きく息を吸うのである。花子と太郎は、その吸引力で又、捕えられてしまう。

その時のごえんさまの身ぶり手ぶり大きな目と尖らせた口は、今も忘れない。

法然上人と親鸞聖人弁念の紙芝居も心の底に残っている。遊び半分に習つたお経ではあつたが、今頃尚、間違ふこともなく、お勤めさせていただけるのは、ひとへに聖人のみおしへの光であると思う。

耳を澄ませば木曾の川鳴り、野に行けば光る風、木綿の肌ざわりと、にはひは、母の味である。ふる里こそ、云うなれば、俳句浄土である。

星を視しあとの耳澄む露曼陀羅

文恵

竹落葉風がころをひらくかに
雨は夜につづきて代田ひかりだす
むかし太郎の青き鬼灯よく鳴りし
ちちははの前をあかるき盆の風
落葉日々ふるさとびとの名を忘る

秋の雷母が米倉あける音

少女期は夕日と風の刈萱に

手を打てば胸より鶴翔つことも

かたき掌の母と秋日の山へゆく

木枯の神棲む山に日がこぼれ

とほい鐘寒暮の山が咳くやうに

冬ひばり陽は空港の果つところ

山帰来とはきいくさの火のいろに

今もある被爆破片の冬菜畑

ふるさとを青菜に雪の降るはやさ

冬將軍黒人去りし荒野基地

川鳴りのふれては夜の冬障子
誕生は青菜に雪の降る日かな
夜の風ちちははとほくなる想い
鐘叩く神々村にかへるころ
鶴鳴も藪をとほればおぼろにて

小学校時代の思い出

昭和二十一年 足立 徹

私が小学校へ入学した年は丁度大東亜戦争が勃発した年で小学校も国民学校と改められ、その最初の一年生として入学しました。戦争も段々はけしくなり、今思い出に残っている事といえば、三年、四年の頃は、空襲に対する避難訓練が毎日行なわれ、勉強の時間は、一日に二時間くらいしかなかった様に思います。五、六年生以上の生徒は、スコップをかついで川原を開墾して、さつまいもや小麦を作るのが学校生活の主な仕事の様に覚えて

います。今の小学校の生徒には話しても実感はわきませんが、当時の小学校の生徒は、現在の教育とは全く違った教育を受けていたような気がします。それでも戦時下の中では止むをえないと、今は思っています。それから終戦というかつてない大きな、事態などにもあつて、全く激動の小学校時代ともいえます。それでも楽しかった思い出もあります。飛行場が近いので、時々飛行機を見にいったら、若い飛行士達の話聞いて、自分も大きくなつたらこんな飛行機で大空を飛んで見たいなと思つたりしました。いろいろな思い出がこの間の様に思われませんが、自分の娘がもう小学校三年生になり、時代の流れの早い事を痛感します。今は立派な校舎もいろいろな人達のお骨折りで建ち、良い環境で勉強出来る今の小学生は幸福です。それも平和な時代だから出来た事です。いつまでも勉強に専念出来る、平和時代が続く事を念じつつ。



小生の裏山学舎

昭和二十二年卒業生 足立 八十八

木曾の清流に育ち、矢熊の峰を仰ぎ、前宮国民学校に入学した。時は昭和十七年四月八日快晴。しかし、この世に産声を発する瞬間神のいたずらか、私に勉学の二字を与えなかったようだ。かくて数日して裏山の神明神社が小生の学舎となり、絵画に専念した。太陽が頭の真上に来る頃、友の帰宅を見届け、我が家に帰る。学校も家庭も誰一人として知る由もなく幻の通学をして十数日。しかし、それ以後、図画、工作は抜群の出来だと賞められ小生の行動も暗黙に、帳消にされたようだ。これが現代だったらどうだろう。如何に天下泰平ムードの世であったか、三十年過ぎた今でも当時を想い出させて呉れる懐かしい裏山の姿。しかし、小生の頭の中は空白のまま二年三年へと進む。担任の先生が気に入らぬ、幸いに通勤が遅くて遅刻が多く、欠勤もよくあったようだ。この

ような日、又図画、工作、習字等の時間のある日は喜び勇んで教室に入り、一日が誠に快樂で過ぎた。朝先生の顔を見ると「今日も来やがったな、休みやいいに」と、子供心につぶやき、気持が沈んでしまった事を記憶している。担任の先生は変れど、こうした同じような日々が三年生も残り少なくなつて行く時であった。

戦争の激化で机に向う時間も日増しに少なくなつて行く、小生の幼きな心も何か動揺しはじめ、室外での作業が奨励されてゆくのも妙に感じられた。日本の歴史が大きく転換する日が、刻々と近寄っている事が私の童心に多少の悟りがあった。生活に関するすべての節約、一番困った食糧の不足、これらが日増しにひどくなつてゆく。広い運動場も、芋の畑と化し、避難する防空壕も並び、勉強だ、運動だと言う時代は、遠く去ってしまった。毎日々々室外での作業そして避難訓練等の連続である。日本人だ、大和魂だ、と教えられ大人の悲痛な叫びを耳にしながら、子供は子供なりに汗水流し、一億人民の合言葉を胸に秘めて……………。

そして日本人誰一人として口にしなかった「敗戦」と

言う言葉には表現出来ない悲惨な結果。卒業するまで(それ以後もだが)の日々の学業生活の状態は……………。(遠い南の島グアム島に、横井庄一さんの、艱難辛苦の末来二十八年間の長い生活の第一日が始まろうとは、一体誰が想像したであろうか)。

暗い〳〵日々が幾日過ぎただろうか。この幾星霜間の出来事が走馬灯の如く小生の脳裏に想い出される。しかしとても言葉には表現出来ない。一つ〳〵を想い出しペンを走らすのは、あまりにも悲情であり苛酷だったので、ペンに空白を与えたい。

戦争、敗戦、生活戦争この時代に巻き込まれた小生等は本当に学問に縁の薄い教育であり、現代の小生とは、とても、比較にならない暗い〳〵世であった。

小生が国民学校へ通った六ヶ年間、現代の六ヶ年間と同じ年月だが、あまりにも大きな違いのある六ヶ年間であった。しかし戦争の意味は違えども、教育戦争の渦中に巻き込まれている現代社会、いつの世でも暗い世相なのだろうか。これが明るいだろうか。

思 い 出

明治四十四年尋常科卒 天野と志を
大正二年高等科卒

私が明治末期に御世話になった小学校は、お不動山のふもとにあり、校庭には一かかえもある杉の木があったのですが、何時の頃だったか校舎が移転したときに、切られてしまったと記憶しております。又、校舎の裏には大きな「くど」があり、小使さんが何時も茶釜に、一ぱいお湯をわかしていました。遠足は何時も大山で、いつけ草履をつけ、伊木の渡し舟で木曾川をわたり大山城までいきました。

矢張り遠足で名古屋の万松寺へ行った時は、足の弱い私と他に男の子一人が歩けなくなり、人力車を頼んでもらって帰校した事もありましたが、みんな六十年の昔になります。みるかぎり不動の山の春日かけ。

創立百周年記念によせて

井川 美栄子 (旧姓国井)
森 美清子 (旧姓国井)

創立百周年おめでとうございます。私達は約四十年前に、高等科一年生を僅か一年間だけですがお世話になりました。

今はもう校舎も新しくなり、昔の面影はないかも知れませんが、私達の頭の中には勉強した教室や、休み時間にお手玉、竹がえし、おはじき、ドッチボール、等した校舎の片すみ、運動場などが、まざまざと浮びます。

また先生方の顔、叱られて悲しかったこと、ほめられてうれしかったこと、そしてお友達一人一人の顔や服装、気性等まだこの間のことのように想い出されます。

でも、もう今はみんな、いいおじいちゃん、おばあちゃん、の苦ですが浮んでくるのは、先生方の若くてハンサムな顔、お友達のおさげ髪や、くりくり坊主の可愛い顔、

わんぱくな顔ばかりです。

一番印象にあるのは、高等科で職員室の当番があり、先生方へのお茶だし、謄写版すり、その他いろいろなお手伝をしたことです。

楽しくもありましたが、緊張のため苦痛であったことも記憶にのこっています。

百年という伝統ある前宮小学校で学んで立派な社会人となっている多くの人々と共に今後ともい子達の勉学の場として又人づくりの庭として、またなつかしい故郷として益々発展されますよう蔭ながら祈らせて頂きます。

以上

宝林寺にお世話になっていた少女

美栄子 東京都港区南麻布二一五―二

井川 譲に嫁しています。

美清子 岐阜市岩崎六一

森 八郎に嫁しています。

小学校のころ

昭和十三年卒業 磯野 さかゑ

(旧姓 永井)

昭和七年四月尋常科入学 男子三十三名

女子三十二名

昔では二組には少し足りない故男女一しよで五年まで一組だったから教室は何時も一ぱいでみんなが机の横の釘で羽織を引掛けてよく破った。ハナ、ハト、ミノ、カサの国語とは普通に言わずに読方の本といった教科書と石板に石筆で書いたのが私達が最後であった。

先生は一年 石屋先生

二年 大堀先生

三年 奥村先生

四年 熊沢先生

五年

六年男子 関谷先生

女子 遠藤先生

高一 岩佐先生

高二 丹羽先生

遠足の思い出

お崎山や伊木山と

幼い時は近かった。

芋が瀬の山に登ったとき

コロコロコロと夏みかん

今も臉に残っている。

転らかした友の顔・姿。

権現山より下りし折

飲んだ清水はうまかった

あの泉今は公害でよくれたか。

五年生の岐阜博覧会

北街道を歩いて行った

いつも野一色のお宮の前を通る時

思い出さずにおられない。

日本ラインは六年生

帰って皆で俳句詠む。

どこまでも続くラインの美しさ。

先生自転車引っぱって

清水の流れる岩坂を

額に汗して登られた

非常用にとありがたい

着いた所は関だった。

尾張富士へ行つたとき

兵隊さんをしのびつつ

水筒のお茶帰るまで

できる限りの辛抱で

飲むぢやないぞと教えられ

のこして帰つたこともある。

今渡のダムを見学し

古井の駅で夕焼だった

汽車で各務原駅に降り

月の明でとほとほと

家路についたこともある。

思い出つきぬ小学校の

楽しい愉快な遠足よ。

青年学校及び青年団活動と私

昭和十五年の春女子青年学校が開校される。初期生として入学小学校より引続いて毎日通学が許された。

先生は、杉山校長、丹羽先生

遠藤先生、関谷先生

担任として本科一、二年安藤先生

三年より、二ノ宮先生

活け花に両内野の小沢宝一先生

教室は昔の移転された二階の裁縫室があてられた。小学校の裁縫時間には一しよになった。教科書は一年しか教わらず二年以後は裁縫が主になった。国語の本に井戸端の桜あふなし酒のよい」という句や、木曾、長良、揖斐三太川の大事事の平田靱員の苦心された物語りが書かれ丹羽先生に随分熱心にお話しを聞いた。

生け花は毎週水曜日、お茶は土曜日のもちらも午後だった。お茶、生け花は女子青年学校生徒だけでなく女子青年団の方達も大勢出席された。小学校の展覧会の日には青年団として生徒も手芸、裁縫、習字、ペン字と色々出品した。教室に生け花の会も開き、お茶会も催された。

遠足にも必ず高等科の組に参加した。

毎日の運動になるからと小学校の一時限毎の鐘をつかされた。こうして、本科三年は卒業させて頂く事が出来た。戦争が大きくなり次々と挺身隊に参加させられ、折角開校せられた女子青年学校も出席者は少なくなる一方であった。

女子青年団も中々行事が多かった。入営出征軍人の見送り、展覧会のバザーのみたらしだんご、郡の陸上競技参加、郡総会、郡幹部講習会、小学校と共に運動会、出征家族慰安会、留守宅慰問、各務原及び陸軍病院慰問、まだ／＼数えればいくらも出て来る。

郡陸上競技大会は戦時中の為か短棒投げ重量運搬、女子青年体操と三種目出来なければならぬ事があり、岩井幸子さん、丹羽若さん小島ますみさん三名の方が出場て優勝した事があった。その折岩井幸子さんは男子の戦技訓練と共に明治神宮まで県選手として送り出した。

防空訓練も度々受けた。青年団活動が優れて居た為か他町村が昔の会服であったが早くから、女子国民服に変わって居た。

十八年の十一月に男女にて査問を受けなければならぬ為に女子青年は六月より六十八聯隊の衛生兵が来られて救急法と担架操法を習った。その頃の青年団の団結はすごく出席人員も七十名を超える程なり。

慰問袋も年二回は作った、費用は毎月廃品回収でつくった。女子青年団の無かった部落は隣部落より出かけた。百姓の私達は芋きりをたくさん作って持ちよったり配給のサラシで、マスクや越中も作って入れた。

慰問文はカードを作って皆で順番に廻して書いた。他町村の出征軍人の方より「青年団」に私達は故郷の女子青年団より慰問文は来た事がないとても羨らやましい一度私達にも頂けないかと言って来ると丹羽先生が青年学校生徒によく書かせられた。

彼岸花の球根を堀り洗って切り乾して供出した。何か火薬に使うのだと聞いて居た。

今から考えるとよくもまあ、あんな時間が有つたものだと驚く程である。青年学校へ行って居たから尚更お国の為青年団の為に毎日のように尽くしたものだ。一番悲しかったのは遺骨迎いと村葬のお手伝をする日

であった。

私事にはなりますが、十八年の七月九日岐阜県春里集合にて、岐阜県満洲報国農場勤労奉仕隊応援隊が発発する事になり、兵車係りをして居られた。倉知さんに進められ母が涙乍らに嫌うのを、此れも御国の為だと兄に許され参加する。

村長さんを初め校長先生諸先生、女子青年団の方に大きな裁縫室に入りきれぬ程の方に送別会を催して頂き、万歳々々の声に送られて出発した。稲葉郡では方県より一名参加せられていた。総員四十三名、三ヶ月間にて帰国は十月二十二日であった。十九年の春三月、岐阜公会堂にて青少年団総会の折体験発表をさせられる。北満に居る時は年令も一番下であったし淋しさで月の夜随分泣いたが今から思えばとても行けない地へ行つて来れたと参加出来た事に感謝して居る。

何れにせよ私達の青年団時代は戦争々々にて遊びどころか赤い着物も着た事もなく父母の古着を頂いてモンペ姿で増産に勤勞奉仕にの毎日であった。

青年学校は少しであったが青年団は住む鶴沼の方々も

申されるが前宮は他町村より一步も二歩も進んで屠たと(ほんとかしらん)

此れも諸先生方の御指導と皆さんの団結とあります。

終戦と同時に各種団体は解散した。青年団はすぐ新しく発足しそれより男女合同にて行動する折が多くなった。年令も行って居たから新しい青年団活動は短かであった。でも嫁ぐ前にも幹部の方達にお別れの会まで開いて頂き長い間の青年団に仲間入りしたお蔭と今も感謝の気持ちで思い出します。

水 仙 (活け花の師を偲びて)

野良の帰りに道端で

ふと見付けた水仙の花

何時の日にか塵芥と共に

捨てられたのかあの球根

ひとり今日まで活きぬいて

色も香も姿も優しく咲いたのよ

思い出すのは青年学校時代

堤防下から移されし

一番古い二階の学び舎



毎週水曜の午后だった

活け花よりも

ドッチボールがよい私達と

お花とお茶のみ来る姉さん方と

共に教わりしあの日をば

師はいつも

「水仙の花は素直な葉を選び

やさしさを出して活けなさい」

教えてくださった

酷寒にも耐えて明るく

素直に咲きし水仙の花

女の常にこうあるべしと

学び舎出てから三十星想

教わりし師は

もうあの世の人となられしか

先生に香華の気持ちにて

昔を偲び花器出して

活けてみました水仙の花

切角咲いた水仙の花

切つてはすまんと思うけど

球根だけは残るから

来年も咲いてくれよと折りつつ

そつと手折りて床飾り。

思い出の記

大正十四年三月高等科卒業 伊原 信夫

(旧姓 永井)

粗末な校舎さしむ廊下、校庭から仰いだ不動山。仰げば尊し我が師の恩。この歌を最後に希望と不安を胸に校門を後にしてより、早や四十七年が過ぎ去ってしまいました。この間私にとっても数々の印象深い出来事が多々ありました。が楽しく学の庭にいそしんだ小学校時代の思い出は、一生の中でも一番純心なものであったと、今でも私の心に深く残っております。春の遠足。秋の遠足。秋の校内運動会。其の他色々な行事等が走馬燈のように鮮に思い出され、苦笑したり又なごませてくれます。

謹厳な永田校長先生。背の高かった村上先生。もつとも厳格であった丹羽久克先生。師範を出て新任地とて張り切っておられた遠藤亮一先生。軍国時代華やかなりし頃とて軍事教練には格別目の色をかえられた加藤嘉雄先生。最終学年の担任でもあって温厚な横山校長先生。又先輩後輩或はあの友この友と思ひ出はつきません。戦争、そして長い年月で今は校舎も移転し名前までかわり、村も市の一部となり、我々ふるさとを後にしている者には、よき時代のおもかげが段々消えてゆく姿に、激動する時代の変遷のきびしさを改めて思い知らされ、実に感慨無量であります。ただ変らないものはなつかしい昔の思い出のみではないでしょうか。還暦もすぎた私達、考えて見れば小学校時代の諸先生より老いている現在なれどもそうは思われません。若き日の先生並に先輩級友諸兄のおもかげを今一度胸に描がき、すでになくなられた方々の御冥福を祈り、今なお健在の皆さんの多幸であらん事をねがって、思い出の記とします。

昭和四十六年十二月

村を出てから 五十五年の追憶

日本大学教授 岩井 肇

一、独学、苦学の巻

私が前宮小学校の三年生に転入学したのは明治四十三年四月であった。それまでの一、二年生は中屋村の敬格小学校へ通った。それは姉(きし)が中屋の高等科へ通学していたので、一緒に通うためであった。この年から前宮小学校に高等科が新設されたので、姉は中屋から前宮へ転校し、私も一緒に転校した。その時姉の同級生たは山脇からは佐々木秀一さんもきたが、クラスに女子は姉一人で、高等科の第一回卒業生となった。その姉は大正九年二十四才で亡くなった。

私共のクラスの担任は、若くて元気のよい丹羽久克先生で、六年生まで四年間にわたり担任が続いた。同級生には加藤嘉雄、富樫源十郎、丹羽義光、長縄正雄、奥村

金作、五島正、仙石貞雄、松波藤吉、山本透一、永井肇、大橋忠一、大橋益三、永井盛三郎、永井茂、永井則義、日比野朝衛の諸君や、山脇からは佐々木賢一、佐々木正夫君等が同級生として毎日一緒に通学した。その間、ときどき授業をうけたのは村上元之丞、二宮友藏、五島理一の諸先生で、高等科の二年間は永田新兵衛先生、校長は永井牛太郎先生であった。

卒業の時、永田先生から、将来の志望についての作文を書けといわれた。私はそのころ感ずるところがあつて、宗教家になり精神運動がしたいと書いた。そんなことから卒業と同時に大正五年の春、村を離れてお寺での生活に入るようになった。家庭が貧しかったので、中等学校へ通うことができなかった。

お寺ではお経を習い、勤行をしながら独学を志し、通信講義録で勉強した。ひまがあれば文章を書くことに興味をもち、雑誌に投書を始めた。新国民、文章クラブ、教育新聞などへ、作文や歌や俳句を寄稿した。これがときどき誌上に掲載されることが楽しみで、講義録の勉強の余暇をみては投稿に力を入れた。そのうち沢山の誌友

ができて、同人雑誌を作つて回覧するという有様であつた。このように文章道に精進するに至つたのは、耳の不自由な逆境の新聞記者といわれた、岐阜の小木曾旭晃氏からの影響によるところが、極めて大きいといえる。

そのころ第一次世界大戦による社会の変化や進歩は激しいものがあつた。この刺激により本格的に勉学の必要を感じたので、東京へ出て苦学することを決意して、これを実行した。上京の際、すでに退職されて岐阜で塾を開かれていた永井牛太郎元校長先生を訪ね、決意を語り、上京の挨拶をした。ところが永井先生は、それに反対で、もう今から勉強を始めることはおそい、今のままの仕事が続け、学問は子供にやらせ、君の意思を継がせた方がよい。今から上京しても、勉強を続けることは困難で、電車の車掌か、運転手になる位だから、上京に賛成することはできない。と強く反対された。しかし、この言葉が却つて私の上京の決意を一層固めると共に、勉学意思を強めたのである。

東京では幸い、投書時代を知つた雑誌社の社長の厚意により、そこで働くことになり、働きながら勉強する便

宜を得ることとなった。正則英語学校、研数学館、大成中等等へ通つて一応の課程を経ることができた。それから大学へ入つて専門の勉強をすることとなり、何れを選ぶかを考えた末、通学の便、学科に対する興味、大学の性格や伝統、授業料の多寡などを検討した結果、日本大学高等師範部へ入学した。ここで倫理・法律・経済と幅のある学問、研究に進むことにした。このころ前渡桃春院にいた小学校で一級上の光田式堂君（順次郎）が「金の星」という雑誌社で働いているのを知り、ときどき会談したことがあった。

大学に入つてからは、学科の勉強の傍ら、科外のクラブ活動として、大学新聞会や、雄弁会に入つて、何か自分の特技をもちたいと修練を重ねた。幸い雄弁会の委員に選ばれて、各大学の雄弁大会に派遣されて、雄弁術を練ることができた。そのころの一番の思い出は、大学における模擬国会の開催で、学生よつて政党を組織し、国会を開いて、国家的諸問題をかかげて、討論を続けるという、政治的実践訓練をしたことである。私は大正十三年の擬国会では内閣官房長官、大正十四年には外務大

臣を担当した。そして内閣運営の任務に当たったり、外交方針の演説をしたりした。

また大正十四年の秋、名古屋市会議事堂で愛知医科大学主催の合同学生雄弁大会に派遣された際、演壇で、臨監の警部により、過激な言論をしたとて、弁論中止をうけたので、これに抗議したところ、直ちに警官により検束されて、一夜を新栄警察署に留置されたことがあった。しかし、その晩聴衆であった日大卒業生の斡旋で、何事もなく翌朝早く釈放されて帰京した。そのことが当時、新愛知、名古屋新聞に報道されたため、郷里の人々にも私の言論活動が知られ、殊に丹羽先生からは、そのことについて注意をうけ、自重を勧告されたことは今でも忘れることができない。

またその年の夏休みには、雄弁会の委員一同で岡山、広島、鳥根、鳥取の中国地方に出かけ、巡回講演会を開いたことがあった。そのとき岡山県和気高等女学校で講演したが、その際地元の一中学生がこの講演をきいて、発奮して日本大学へ入学し、卒業後歯科医を大阪で開業し、いま大きな医院を開いている谷口雅彦という博士が

いるが、十数年前、大阪で卒業生の会があった時、谷口さんは、自分が日大へ入学して今日の成果が上つたのは、中学時代に日大生との和気における講演のたまものであると、語つたものである。これも学生時代の雄弁活動の思い出の一面である。

さらに同じ年の夏休中に、岐阜伊奈波の松竹座で、帰省学生雄弁大会が開かれ、関東、関西の大学にいる岐阜出身の学生二十余名が集まって盛大に開いたが、私は日本大学を代表して出席、思想問題について演説した。この時の出演者には野田卯一、辻寛一など現代識士もいた。そのほか現在、弁護士や会社重役などで活躍している人もいる。

大学での授業、勉強、試験は雑誌編集の仕事や、クラブ活動をしながらあまり欠席することなく続けて、まあまあ成績で卒業はできた。しかし、今後、社会へ出て活動するには、まだ学問的に自信がなかつたので、さらに一カ年専攻科に残つて、宗教哲学、政治哲学を宇野教授、松原教授について勉強したが、この勉強は、後年社会へ出てから、大変役に立つたものである。

このように働きながら、大学で勉強できたのは、寛大な雑誌社の社長の厚意によるもので、感謝に堪えないが、そのころ東京岐阜県人会の雑誌「濃飛人」社長からも、県に關係のある原稿を書くようにといわれ、この原稿料も生活に役立った。その恩人は、飯塚哲英、小坂井宏氏であるが、何れも今は故人である。

卒業のころ、大学の先生や友人から、「君は新聞記者になれ」といわれ、私も小木曾旭晃氏に師事していたこと、文章が好きなことなどから、その道に進むことを決意して、紹介者があつて、大阪毎日新聞社の入社試験をうけ、幸い合格することができた。

二、毎日新聞記者の巻

大阪毎日新聞記者として就職できて、東京から大阪へ移つたのは、昭和二年四月であつた。大阪へ立つ時大学長や先生方で送別会が開かれ「立派な記者になれ」と激励された。そして赴任の途中岐阜に立寄り、岐阜日日新聞社へ小木曾旭晃編集局長を訪ね、挨拶したら「三年間は石にかじりついても頑張れ」といわれたことは、よい

教訓であった。また大学の先輩で読売新聞記者をしていた親友の安藤覚君（晩年代議士になる）は「定年まで頑張れ」と忠告してくれた。

一緒に入社した他大学の卒業生と共に、新聞に対する訓練をうけた上、駆け出し記者として、最初に仕事に付いたのは警察廻りの社会部記者であった。大阪の天王寺今宮、戎の三警察署が私の受持ちであった。朝から夕方まで、この三つの警察署を廻って、窃盗、強盗、殺人、火事、その他の社会部の事件の取材をして記事を書くことであつた。

大阪で半年ほど一応の記者修業を終えたころ、私の出身が岐阜だからということで、郷里に近い名古屋へ転任を命ぜられ、南大津町の名古屋支局で働くことになった。名古屋ではまず土地の全貌を知ることが必要だから、最初は警察廻りとして、門前、鍋屋署と医科大学を担当して、毎日これらを廻つた。

その年の秋、愛知県下で陸軍大演習が行なわれ天皇陛下の臨幸を始め、中央から陸軍その他の大官が来名したので、その警戒や、演習地における取材連絡などを分担して、毎日これらを廻つた。

そのころ丹羽先生が、名古屋での講習の序に、新聞社に私を訪ねてこられたので、夕食を共にし、豊前の自宅へ招き、一晩泊ってもらい、久しぶりに歓談したことを覚えてゐる。

昭和八年、東京本社へ転任となつた。東京では内務省、農林省、逓信省などを担当し、各省の主要ニュースの取材や大臣の記者会見などにも列席した。外勤取材記者を経て、内勤整理記者に転じ、新聞紙面の作製の仕事を一年ほどした上、今度は東北の福島支局長に転任した。支局長の仕事は、数名の支局員の指導監督のほか、県下各都市に駐在する通信部記者の監督指導と、福島県版の製作企画から取材、連絡、原稿送付や県知事、裁判所長、検事正、市長その他知方名士との交際や対外接衝、また県下巡回などいろいろの要務があり、結局、編集長と新聞社代表などの機関であり、毎日多忙を極めたものであつた。

福島在住は、四カ年の永いものであつたが、その間に社命で一カ月余にわたり、満州国へ出張し、若松連隊か

した。そして大演習最後の観兵式が、名古屋城東練兵場で行われた時、岐阜六八連隊の北原泰作一等兵が天皇に直訴した事件があつた。このことは新聞に大きく取上げられ、特に毎日新聞にはその直訴現場の様子の写真が掲載され、私もこの現場を見たことは今でも忘れられない。それから北原一等兵は、第三師団の軍法会議で審理されたが、その裁判記事を私が担当して書いたものであつた。それから労働問題、第三師団、名古屋市政、愛知県政、政党関係などを担当し、各種の選挙などがあると、その取材活動をしたものであつた。政党を担当した関係で、政治家との会見、政党の大会などは私の仕事であつた。総理大臣を始め各大臣などが、東京から大阪へ向つたり、新任奉告のため伊勢へ出かけたりする時は、静岡か、浜松まで出迎えて汽車の中で会見して、談話をとるいわゆる車中インタビューの仕事をした。

今でも覚えてゐるのは齊藤実、浜口雄幸、田中義一、大養毅首相や、鳩山一郎文相、永井柳太郎拓相、松岡洋右外相、荒木貞夫陸相など沢山の政治家と会見し、その傑出した人物に触れたことは、いろいろの教訓となつた。

ら派遣されている郷土部隊の慰問と、福島県から満州各地へ移住した農業移住者の現状視察調査をしたことがある。その旅行中、満州各地から絶えず現地通信を写真と共に送稿し、福島県版を十数日間にわたり、大きく賑わしたものであつた。帰つてからは、各地からの要請で、満州報告の講演をして県下十数カ所を廻つたものであつた。また新聞には「阿武隈山脈」と題するコラム欄を自分で担当し、毎日、時の問題についての短評を執筆して数年間続け、練文につとめた。

昭和十四年東京本社事業部副部長に転任し、ここで新聞社における各種企画宣伝事業の推進に力を入れることとなつた。その年毎日新聞社主催による国家的事業として、「日本号」により世界一週飛行を敢行した。日華事変の最中で、日本の国威を世界に示す意味もあり、新聞社として大いに力を入れた。私はこの事業の進行、接衝、宣伝を担当して、早朝から夜間まで仕事に追われる日が続いた。毎日忙しくて帰宅が夜おそくなるので、子供と顔を合わせたり、話をする時間がない日が相当多かつた。幸いこの事業は無事完成、全国各地で報告会を開き、乗

員と共に私も各地に出かけ挨拶して廻った。

十五年の秋、一カ月余にわたり、社命によって北京、天津、張河に、濟南、南京、上海などを視察に出かけた。そして帰国と同時に、九州門司にある西部本社庶務部長に転任した。ここで一年半、社業の總務的業務である人事、厚生、経理などに関する仕事を担当して、今までに経験したことのない分野の仕事の勉強をした。

その九州へ東京から赴任する時、家族と共に始めて郷里山脇に立寄り、四人の子供に郷里を見せたり、縁故者に紹介した。そのころわが国は太平洋戦争に没入して新聞社の仕事も一層忙しくなった。

十七年春、名古屋本社社会部長に転任となり、十年ぶりに再び名古屋で仕事をする事となった。この春アメリカ軍のB二九による初つの抜打ち空襲があつて、大慌てをして戦時対策を進めるキャンペーンを新聞紙上に載せたものであつた。また戦争苛烈を予想して、新聞の国家統制時代に入ることとなり、名古屋における新聞発行を毎日新聞と朝日新聞は中止して、大阪へ引揚げることとなり、新愛知、名古屋新聞、名古屋毎日の三社は合

受信また電送写真などを分担する、大新聞社としては重要な部門であつた。この仕事が一カ月余続いた。

十八年の夏ころになると、南方戦線はますます激化の一途を辿つた。毎日新聞社は前年から政府や軍の要請によりヒリップピンやセレベスに新聞社を創設し、文化工作に當つていた。従つて本社からの出向社員が、絶えず台湾を経由して南方前線との間を往復しており、また戦争の激化による南方連絡の重要性から、台湾を前線連絡基地とすることとなり、私は台北支局長に転じて前線へ出る事となった。すでにガダルカナルは陥落し、わが軍の南方戦線は縮少への方途に向つている折柄、戦況の前途は悲観されるものがあるので、家族を大阪に残し、単身決意をかためて空路赴任した。

台湾赴任後間もなくヒリップピン、セレベス、ジャワなどへ出かけて前線視察をすると共に、前線との連絡方策をたてた。そのうち戦況は漸次悪化し、台湾の空襲が激しくなり、セレベスからの引揚げ、ヒリップピン出向社員のマニラからルソンの山中への逃避など悲報が続々と入り、台湾の戦場化も必須となった。そして二十年四月、

併して中部日本新聞を創刊するという、新聞界の大異変に遭つて、私は大阪へ転任し連絡部長となった。この名古屋在任中に、たまたま当時は名古屋に在住中であつた元校長永井牛太郎先生を二十年ぶりに訪ねて挨拶した。その時永井先生は次のような詩を短冊に書いて贈られ、二十年間の私の歩みの成果を祝つて下さつた。私としても感慨無量なものがあつた。

家庭円満益強堅 多福達栄覚仏縁
藍出藍然加色壁 梅檀香嫩子皆覽

肇氏多才筆有靈 青春立志說典經

一声孤雁千行淚 久調錦衣殘菊馨

昭和十六年十月二十二日

岩井 肇君來訪所感

於東京寓居 永井 武 岳

大阪における連絡部の仕事は、東京、九州の各本社や北方支局との電話通信連絡や、海外との電報による送信、

私は内地転任となり、帰国することにしたが、もうそのころは沖繩の戦況が激化し、台湾へも毎日のように米軍の空襲があり、台湾から内地への空路は危険が予想され、容易に引揚げができなかつた。

たまたま夜半二時すぎ台北の松山飛行場を立つ陸軍戦闘機に便乗が許されて、台湾から中国の上空を経て、朝鮮の上空を迂回し、さらに南進、九州の上空を飛んで宮崎県都城の飛行場に着陸したものであつた。塔乗時間六時間余で、普通の倍以上もかかり、機内は寒くてふるえが止まらなかつた。幸に生命に別条はなく、ホツとしたものであり、荷物などは全部台北に置き去り、ほとんど最終ともいえる生命からの引揚げであつた。

転任は二度目の九州の西部本社で、主として防衛、保安など戦時下の社業保全の対策を担当したものであつた。幸い戦禍は免れて終戦となり、世相は一変した。戦後、労働攻勢は激化し、その対策に新聞社は力を注いだ。私は人事部面を担当し、労働攻勢の対策に取組んでいるうち、遂に過労から病氣となり、病氣のまま家族のいる大阪へ転任となり、調査部長に就任のまま療養生活を続

け、そのため三年間にわたり比較的静閑なこの仕事で過すことができた。

病気の回復と共に、社命により傍系事業の新大阪新聞の取締役編集局長に就任した。この新聞は毎日新聞社の社屋の一部を借りて、新聞製作にあたっているため、名称は違ふ新聞であるが、勤務場所は同じところ、他社で働くという感はなかった。一カ年在社して毎日新聞社へ帰ったが、在任中に新しい事業として、最初の大阪府下中学校の野球選手権大会を開催したり、編集局幹部により市内多数の高校で時局問題講演会を開いたことなど、よい思い出となっている。

二十六年春新大阪新聞から毎日新聞社へ帰社して、新設された紙面審査研究室長に就任した。これで大阪本社勤務は四度目である。この仕事は、新聞の紙面の出来具合を審査したり、新聞はどうあるべきかを研究したりする部門で、老練な記者数名を委員としてこの仕事に専念した。

この研究や審査に携わるようになってから、大学から新聞の講義を依頼されることとなり、大阪市立大、近畿

大学、日本大学などの講師として、新聞についての講義をするようになった。また大阪府下を始め兵庫、奈良、京都、滋賀など近畿各県から講演を依頼され、PTA、婦人会その他各種団体の集りに出席して、五十数回の講演をしたものである。また二十七年から三十一年まで四年にわたり、毎日放送の時事解説を担当し、百回余にわたり、放送したのもよい勉強となり、よい思い出となった。

三十一年一月三度目の東京本社勤務となり、総合調査局の創設にあたり、編集局理事としてその次長に就任し、新聞社の基本的諸問題にとり組んで研究調査することになった。この仕事を軌道に乗せて、その年の夏、私は満五十五才の定年に達したので、一応退社となり、引続き嘱託として傍系事業の富民協会の役員に就任した。七年間にわたり、農業振興に関する協会の事業の推進に力を注いだ。農業コンクール、雑誌、図書の出版などであった。この仕事の傍ら、私は居住地（吹田市）の市長から頼まれて教育委員に就任し、任期の三年間を通じ教育委員長を担当し、学校教育、社会教育の推進に協力した。

教育委員長在任中にボーイスカウト運動に理解を持ち、居住地にその団の新設すると共に、市のボーイスカウト後援会長や、ボーイスカウト大阪連盟の名譽会議員に就任したことから、三十八年の八月にギリシヤで開かれた

第十一回世界ジャンボリーに派遣され、その副長を担当した。そして一カ月余にわたり、ヨーロッパ七カ国を視察旅行し、各国の青少年と交歓を重ね、その見聞を広めた。

こうした社会教育方面に奉仕活動をしたほか、更に大阪の社団法人清交社クラブの編集委員長、吹田ロータリークラブの広報委員長、また三田ゴルフクラブの会報委員長などをも担当して、余暇をできる限り各種団体のために活用奉仕した。

このように昭和二年から三十一年まで、毎日新聞社に三十年在社したが、転任は大阪三回、東京三回、名古屋二回、九州二回、台湾一回、東北一回となったが、転任の度に子供の学校転校では子供に泣かれた。長女の如きは小学校三度、女学校三度、長男は小学校三度という激しいものであった。

三、大学教授の巻

昭和三十九年四月、日本大学教授に就任して、法学部新聞学科の学生に対して編集論、日本新聞史、新聞演習、新聞研究、新聞セミナーなどを担当することになった。これまで、大阪の近畿大学において、十年間にわたり講師として新聞学概論の講義を続けたり、上京の折、日本大学で新聞学科の学生に新聞記者論などの特殊講義をしてきたので、講義についての大体の見当をつけていたが、今度は沢山の講座を担当して、一週間に十時間近い講義を続けねばならぬので、その資料につき研究、調査、整理が必要であり、毎日非常に忙しい日が続いた。

この大学教授になるについては、すでに三十一年毎日新聞社を定年になる時、大学の総長や、新聞学科主任教授から、老後は母校に帰って、学生指導をしてもらいたいとの要請をうけたものであった。しかし、そのころすでに毎日新聞社で定年後も、私の仕事をきめて大阪へ帰ることになっていたので、大学へ入ることを断って大阪での新しい仕事に就いた。それから毎年のように大学

からは、大阪を引揚げて上京するようにとの勧誘をうけたが、容易に実現をみなかった。

八年を経て漸く三十九年に至りこの話が結実することとなって、遂に上京して大学に入り、学生の指導をすることになった。大学の指導はたんに教室において、講義をするだけではすまない。ゼミナールの学生と研修で地方、合宿に出かけることもあれば、サークル、クラブ所属の学生の指導や合宿などもある。私は新聞学会の会長や、雄弁クラブの幹事長、ローバスカウトの隊長や大学新聞の社長、岐阜県人会長といった科外活動の部門も担当していたので、これらの学生の会合に出席したり、討論したり、合宿で地方に出かけたりすることもしばしばであった。

ゼミナールの学生とは、毎年夏休みに地方へ出かけて研修合宿をしたものだ。四十名位の学生と二、三泊して毎日起居を共にし、研究、討論し、その余暇にはハイキングやテニス、ソフトボールなどのレクリエーションもやるのが楽しいものである。三十九年から今年までの間にゼミナールの合宿としては、長野県軽井沢の敷回を始

め、志賀高原、愛知県篠島、栃木県塩原、静岡県堂方島、伊豆の大川、新潟県三条などへ出かけたものだ。また新聞学会にルポルタージュ研究班というのがあるが、その顧問として合宿に出かけ、石川県能登半島と迪島、和歌山県那智山、新潟県出雲崎、伊豆の神津島、山梨県山中湖畔など、また雄弁会の合宿研修では、静岡県戸田、茨城県日立、長野県白樺湖畔、山梨県山中湖畔など、ローバスカウトの研修合宿では、栃木県那須、静岡県赤沢山、山梨県山中湖畔などの外、四年前からローバスカウトの訓練行事として始めた長距離ハイクを行っているが、それにも出席して激励した。第一回は東京、大阪間、第二回は伊豆半島一周、第三回は大阪、門司間、第四回は鹿児島から九州一周、第五回は四国一周という具合に二十名位のローバ隊所属の学生が、約二十日間にわたり歩いて、テントの生活をしながら、目的地に達するという鍛錬修業も行ってきたのである。

このようにいろいろの学生のグループの指導をしているので、教室における講義のほかに相当忙しい日を送ってきたものである。また数年前から、長谷川主任教授の毎日、学生と共にバスでヨーロッパの国々を見て廻ったが、格別に疲れを覚えなかった。八年目に再び欧州をみたが、先年とは随分変わった様相も見られた。八月始め富士山麓で開かれた第十三回世界ジャンボリー広報会長を担当することになっていたが、欧州旅行のため参加できなかった。

この年は、私が古稀に達したというので、ゼミナール所属の学生や卒業生など約百名が集まって、私の長寿を祝う催しをしてくれた。そして最後に乾杯のあと私を何度も胴上げして、私の健康を祝ってくれたことは嬉しいことであった。

また卒業生の結婚にあたり、媒酌人を頼まれたり、結婚式に招かれて祝辞を述べたりすることが多く、自分の教えた学生が社会に出て活躍したり、新妻を迎えて新家庭を設けることは楽しみなことである。

このように大学に入ってから八年間を経過したが、毎日ひまな日ではないが、その間に研究雑誌や、記念論文集などに論文を発表せねばならぬ。少しでも余暇があれば、研究・調査・執筆ということに力を注がねばなら

死去により、その後を襲って新聞学科の主任教授となつて研究、教育の向上にも力を注いだ。さらに昭和四十三年夏に大きな大学紛争があり、学生と大学側との対立から学生集会などもしばしば開かれたが、これにも出席して学生と大いに議論をせねばならぬことがあった。

昭和四十四年二月、両国の大講堂で、法学部学生の集会の時には私が議長団に選ばれて出席、約五千名の学生を相手に三時間余にわたり、論戦をしたことがあるが、大した混乱もなく、これを切り抜けたことがあった。その後も時々学生の集会に出席して討論を続けてきた。また四十五年八月、富士山麓の朝霧高原で開かれた第五回日本ジャンボリーでは広報部会長を依頼され、学生三十余名と共に参加して、新聞、放送記者との会見、新聞の発行など広報活動に奉仕した。

四十六年八月には、法学部の学生百三十名がヨーロッパ研修旅行に出かけることになったので、その引率指導にあたることとなり同行した。イギリスをふり出しにオランダ、ドイツ、オーストリア、イタリア、スイス、フランスの諸国を二十数日間にわたり視察旅行してきた。

なかった。過去八年間に発表した論文と著書は左の通りとなっている。

(論文) 新聞倫理の性格(三十九年日本法学) 万朝報と現代の新聞(四十年法学紀要) 本山彦一の新聞政策(四十一年佐々木良吉博士古稀記念論文集) 戦後新聞界流動の回想(四十一年法学紀要) 徳富蘇峰の記者像(四十二年長谷川了博士古稀記念論文集) 新聞の道、記者の道(四十二年丁未煩言) 黒岩派香の新聞政策(四十二年中井駿二教授還暦記念論文集) 福地桜痴と新聞(四十三年齊藤敏博士古稀記念論文集) 言論報道の自由と限界の問題(四十三年政経研究) 国民新聞の興亡とその評価(四十四年政経研究) 新聞教育の展望と課題(四十五年法学紀要) 米騒動と鳥居素川(四十五年日本大学創立記念論文集) 讒謗律による明治初期の言論弾圧と抵抗(四十六年布施弥平治博士古稀記念論文集) 時事新報と福沢諭吉(四十六年法学紀要) 新聞および新聞記者論(四十六年辛亥煩言)

(著書) 日本新聞史概説、新聞学概説

以上のように、故郷の小学校を卒業してから、五十五

私の宗教観

昭和三十一年卒業 大野 照雄

(旧姓 日比野)

あなた方は、「神」の存在についてどのように、考えておられるでしょうか？

人間と神との関係は、紙に例れば表と裏の違いのようなものです。

それ位人間と神との間においては、親近性があるということですが。

普通一切の人々は、神は天高く人間の限界を越えて手の届かぬ処に、存在していると信じているでしょうが、大きな誤りであります。

神は、神社や寺院や教会に、存在しているものではなくて、我々や他の人々の良心(真心)に宿るものであるということですが。

神を否定する人は、自分自身を否定する人であり、人間以下の動物(畜生)と同等の価値しかない人であるとい

年の永きにわたり、私は勤務地として各地に合計十三度の転任をしたし、その間に日本国内の全府県や大都市は行かぬところはなく、また朝鮮、満州、中国、南方や欧州にも出かけて、大変楽しい五十五年を過ごしてきた。私は大変幸福だったと喜んでいる。これも少年時代の恩師や友人、また故郷の色々を始め、先輩、同僚、後輩のお蔭だと感謝の気持ちを忘れることができない。

また家庭には妻のほか男子二人、女二人の子供がいるが、何れも結婚して関西で家庭を持ち、新聞記者や学校教師をしており、孫も六人になったが、全部学校へ通っている状態で、アトの余生を何年生きるかわからないが、まだ暫くは東京での大学生活だが、この仕事が終わったら、東京を引きあげて、大阪郊外の千里山の茅屋で静かに晩年を暮らしたいと思っている。(四七年三月)

住 所 東京都調布市深大寺町二三六八

電話 ○四二四・八三・二一一〇

留守宅 大阪府吹田市千里山西四一八

電話 ○六・三八四・一六六四

うことです。

この地球上に神から生命を授けられ、生きとし生ける万物の中で、人間だけが神の子として存在できるならば、神の子としてふさわしい人格を、幼少より形成していきたいものです。

一日一日の精神的な進歩が、人間の人格を完成させるものであります。

それを成すか成さぬかは、各々家庭のしつけと教育方針により異なるでありますが、個々、一人一人の自覚と認識にあります。それでは、どうして神の子になれるのでしょうか？

まずは、自分自身を一段と飛躍させると同時に超越させ、人間が生まれながらにして(先天的に)身につけている処の動物的本能(野獣性)を抹殺し、自己の能力を一〇〇%完成させるまでは、(生育するまでは)何がなんでも墮落性を身につけないよう努力することです。

我々が、家庭において、兄弟姉妹がお互いに真心よりいたわり合い、そして悲しみを共にして、兄弟愛に結ばれたいと思います。又願っています。

家庭内の親子関係も、心の底から話し合い、子供は親の心情を思い、親は子供が成長しよりよい社会人となり、真の幸福な人生を送ってもらいたいと願っているのが、本当の親子の情愛（気持）なのでありましょう！
そして将来夫婦となりましても、お互いに助け合い、欠点は補い合い、いついつまでも幸福な身のある人生を送ってもらいたいものです。
そして真の愛に満ちあふれた、家庭や、社会国家、そして、愛に満ちた世界を、我々や皆さんの力で、実現しようではありませんか。
例え何十年、何百年かかろうとも、諦めずにはいけません。

世界の人々が、兄弟、姉妹の関係のように、友情を交わし、そして正義と平和を重んじて万国の人々が幸福な人生を送る場を、私は心から念願しているものです。
もしも、現実にはそのような事が実現したならば、どんなにか素晴らしい出来事でありましょうか？
心のすみに理想の平和を、全人類（地球）が希望しているのは、万人に共通している事であり誰にも否定は出来ない。

関係のあることだということを、切に認識してもらいたい
ものであると思います。

岐阜市鷺山四丁目

夏休みの思い出

大正十一年度小学校卒業生 小川 志 ず お

(旧姓 田中)

私たちが前宮小学校六年生の頃夏休みの行事の一つとして校庭で合同の七夕祭りが行われる事になった。部落別に男女に別れお互にきそってきれいに飾ったものでありました。

その夜は七夕飾りにいほどられた校庭で歌ったり先生方のお話をきいたり本当にたのしい一夜をすごしたのです。私は自分の組のリーダーとして資金集めやたんざく書きに初めての事として苦勞した事など今思へばそれは私の人生にとつてなんとほほえましい一コマだったろうとしみじみと思うのであります。

ません。

然し、現実には、まだそのような人間関係に、ほど遠い事に心が痛み、悲しく思います。兄弟、姉妹や両親の将来を考える時、必ずしも安心は出来ないであります。日本だけが平和であれば良い、日本人だけが、自分自身だけが、幸福であれば良いという訳には行きません。これからの人生は、世界は、この地球上の隅から隅まで、平等に公平に、全ての人々に愛が行き届いた政治が行なわれなければなりません。この地球上から、無知をなくし、戦争をなくし、傷つけ合い、憎しみ合う行為を根絶しなければなりません。

(我々の生きている時代には、実現は不可能な事でありましょうが、まずそれには、世界を一つに統一し、宗教を一つに統一し、又言語を一つに統一し、神の前において、全ての人々は平等であり、上下の区別は無く、差別はしないようにしていかなければなりません) 万人の深い理解と高い知性、協力がなければ、絵に書いたモチに終ります。

まずは、皆さんが良く考えて、自分達にも、少なからずあの頃の学校長は永田先生で、村の為に学校のためによく尽くして下さった良い先生であったと子供ころにも感謝して居たが惜しい事に早くお亡くなりになったと聞いています。私の最後に学んだ遠藤亮一先生は学校を出たばかりの若い先生でいろ／＼と学ぶ処の多い先生だった。が今は如何しておはす事か。

あの頃の小さなみすばらしい校舎も当時の私には至上の学び舎であったのです。あの教室で共に学び共に遊んだ友と別れてやがて半世紀になります。

幼なき日の思い出は今も吾がこころの奥深くに生き続けているのであります。この半世紀の間にはあのいたましい戦争があり吾が学友の中にも犠牲になられた方もあるにちがいない。その方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。ともかく其の後の半世紀を生きぬく事の出来た私を育んでくれた故郷の山や河に深く感謝すると共に吾がなつかしき母校の永久の栄を祈りつつ思い出を書きました。

(岐阜市安宅町在住)

童話会の思い出

昭和二十九年卒業 小椋 東子

「私はこれからアルプスの名犬というお話をいたしません。そう言うから話し終えるまで、無我夢中で熱演をしたことのあるのは小学校の三年の時でした。当時童話会といえば年に一、二回稲葉郡内にありまして、確か十校か十一校の学校から二名づつ出席して童話なり作文なりを発表しあうのでした。私は幸運にもしばしば出していたとき、小学一年の時から五・六回の思い出がありますが、中でも三年生の時のことが今なお記憶に残っているのでございます。

童話会があるという一カ月程前から学校の図書室に行つて、二ツ三ツ自分の好きなお話を選びだし、先生に選んでいただき、それから毎日のように暗記するまで練習するのでした。二年生・三年生と受け持っていたとき、先生は、大変熱心な方で放課後よく教わつたものでした。

ところが自分で組み立てたというラジオをいただき、ピー、ガーと時々聞えなくなるようなラジオでも、毎週日曜日にありました子供の時間やお話の時間には、夢中で耳をあてて聞いていたのでした。そして私も大きくなったらラジオ放送にでたい、お話をする人になりたい、そう言うて家の人達を笑わせたものでした。

まあ、本当の夢として終ってしまいましたが、二十年近く過ぎ去った現在、二児の母となり育児という仕事に追われるこの頃、再び童心にかえつたように、時々子供に読んでやる本から当時が懐しく思い出されてくるのです。

時には近所の子達五・六人が集まり静かに聞いてくれることもあり、中には六つの女の子が「おばちゃんも真剣になつて本を読むのね」と笑う時もあります。今の子供達は何かにつけて便利な遊びになつており、童話の本でもレコード付きになつていて、専門家のお話が聞けるのですから幸福です。私の長女も三才になつたらとたんにレコード遊びが好きになり、少し内職仕事をしております私には十分な相手をしてやれないと思ひ、月刊で購

でした。「口調がはっきりしていて聞きやすいが声も少しねえ」。と生まれつき美声でない私の声を残念がり、生卵を飲みなさいとか、キャラメルをなめたりしなさいと言われ、わざわざ買ってきて先生といっしょになめたこともあります。

音楽がとて大好きだった先生は、よくはりのある声で名演技をみせて下され教つたものだから、よけいに私もその頃からお話をしたり朗読したりすることが好きになつたのかもしれない。「アルプスの名犬」をお話したあと、先生に誉られて嬉しかったこと、そしてその時行われたのが那加第一小学校で、とても寒い日で雪が三・四〇センチ積つており、新加納の電車の駅でした。さら、そこまで歩くのが辛かったこと、そんな時先生は時々雪の中で立ち止まって、手をご自分の白い息であたためて下さったり、オーバーのポケットへ私の手を入れさせて下さったりして、三・四〇分かつた道のりを、つるつる滑りながら歩いた記憶もあります。

私はその頃こんなことを思つたこともあります。まだラジオしかなかったあの頃、私の家は貧しかったため、い

入してやっているのですが、夜寝る前には必ず読んでくれとせがまれるので、そんな時私も楽しく読んで聞かせるのです。そしてこの頃では九ヶ月の長男に「お姉ちゃん本を読んであげるからね」と三匹の子ぶたやあかざきんちゃんのお話を上手に聞かせているではありませんか。字は全く読めないのですが、いつの間にか覚えてしまつたんでしょう。そばで聞いていてこっけいでたまりません。やはり私に似て声がとても悪くてかわいそうです。が、一人前に感情をこめてお話をしているのです。

書店に行けばあの本この本がすぐ手に入りますが、お正月になつてやつと一冊買っていたいたような大切な読み方の方が、将来ずつと心の奥底にきざみ込まれるのではないかと思ひ、これから先、子供と共に楽しみながら過ごしてゆきたいと思つております。

小学校をでてから二十年近う年月が過ぎました。今、子供の成長だけを楽しんでるせいでしょうか。何かにつけて、自分の子供の頃が懐しく思い出されてくる毎日です。

恩師永田先生

大正五年高卒

加藤 嘉雄

学校・軍隊・社会を通じて、ご恩を蒙った方々即ち恩師恩人は数えきれないが、何といつても小学校時代の恩師ほど印象の深い頭のどこかにこびりついている忘れられないお方ありません。その小学校で一番先に指を折るのが、丹羽久克先生と永田新兵衛先生であります。

丹羽先生は大勢の卒業生から思い出が出されているようにございますから私は永田先生対私を述べてみようと思筆をとります。

一、在学時代

岐阜師範学校本科卒業のバリバリのしかもポカポカの先生、前宮小学校で本科卒業第一号の先生、大正改元の年に赴任されました。高等科一年二年の担任です。当時は生徒数が少ないので複式です。高等科議会が思い出されます。

「議長―何番」

何を議したか覚えていませんが学級運営上の諸問題だったでしょう。

バイオリンの授業 見たこともないバイオリンを奏して「寧楽の都」を教わりました。

奈良の都のそのむかし

みやびつくして宮人の

ちよつと借りてブーブーとやってみましたが、左手の指が動いてくれなかった。

第一時限の始めに

「エー昨夜おそくなって帰る途中ゴテゴテ道で自転車の蠟燭が消え、ハンドルをとりそこなって、自転車諸共赤星の池へ落ちてしまつてなア、すぶぬれになつて自転車を引きつって家まで歩いたよ。」

またある時

「ゆうべ夜学をすまして帰る時例の赤星の池にさしか

かった」

「先生また落ちた」

「そうでない。女の人が池端に立っているのさ、ぞつ

とした。そばに行くのがおそがいで道から大声で、

「ちよつと待て、死なねばならぬ事情があるなら

ここへ来て、うち明けよ」

というはいつたものの、どうしようしらんと思つてじつと立っていたら、西側の山の方に提灯が見えた

「オーイ、はよ来てくれ。」

誰か知らんがその女の人を連れて、かくれるようにして西へ方へ行った。

人助けができたかと思つて家に帰った。

時々こんな話、前日の出来事話してもらつた。サア授業となると真剣だった。ほんとに愉快な親しみ深い先生。

卒業記念樹 卒業記念に校庭に木を植えておこう、

ということも先生から教えられた。

「木をやるから先生の家へ取りに来い」

三月の何日だったか同級生男子全員十何人で荷車（大八車）を引いて、蘇原坂井の先生の家に行き、銀杏と樫の二本をもらい、ワイショワイショで学校に持ち帰って運動場の隅に植えた。二本とも勢よく成長したが昭和十

三年の校地移転で私共の記念樹はどうなったか知らん。

進学 小学校六年を卒る時担任の丹羽先生が中学校に行くようにと父に話してくださいましたが、百姓の長男坊は進学するものでない、ましてやこんなチビッコは通えるものかとてんで話がでなかつた。

いよいよ高等科の卒業となると、青年団にはいつて夜学に行くことになる。永田先生はどうしても中学校に入ればよと、父の説得に懸命であった。村内で中等学校に進んだ者は、医者永井良一氏、山脇大地主の佐々木秀一氏、常貞寺の武山秀雄氏、一年前の長瀬四郎氏が農林、私薬師の光田式堂氏が岐中、今年長繩正雄氏が農林、私が岐中ということになった。先生の説得に頑固な父も屈服したらしく受験することになった。でも父は田舎の小僧が通るものか、先生のでまえ試験だけ受けるさという気持ちであったようだ。合格率は二・五倍であったが、幸か不幸か合格しました。

いよいよ行くことになって白線の帽子を買った。

先生ありがとう。先生がおやしを説得してくださいだったので入学ができ今日の私がある礎を作ってくださいまし

た。おやじの決意もさることながら、先生が私の将来を見込んでくださったご恩は忘れることができません。

二、中学時代

中学校に通いだしてからも度々小学校を訪れました。先生も来い来いといわれていました。

無銭旅行で恵那登山 自転車で米を持って行く。宿泊は小学校の裁縫室。炊事は当番をきめる。小使銭は三円（一日一円宛）。永田先生がリーダーで一行は農林学校の長瀬・高崎・長縄君、岐中が光田君と私、六人のパーティーが編成されました。夏休みの八月何日早朝六台の自転車は中仙道を東に向って走ります。太田で針を拾った車がパンクして、自分達で修繕しました。大井の小学校で一泊無理ができました。恵那山の麓川上分校で自転車と不用品を預け、お握りを沢山準備して登山道にさしかかりました。八合目頃から雨になって展望がきかなかつたことは残念でしたが、二、二〇〇mの高山を征服したことは大威張りであった。この旅行によって中津製紙工場を見学したことや山奥の一軒屋生活をのぞいたことが大きな収穫であった。

てなくなったがそうはいかん。大事な大事な交通機関だから、さて時の茶屋で大福餅をたべたが二個ずつで品切れ、腹持ちえは不十分だったが無いものは食べられぬ。下りは自転車でブレーキさえきけばというつもりであったが、右曲左折の山道は自転車で乗れるところは三分の一もなかった。上諏訪温泉街のネオンがきれいに見え初めたが中々近寄れない。町に着いたのが九時を過ぎていた。「今晚は温泉旅館で」と張切つてはいるものの、宿泊料一円の子算、二三軒の旅館をたいてみたがてんで相手にしてくれない。金の無さそうな学生、又温泉旅館などで予約者は別として、断われ断われ、峠を越した疲労と空腹で、一歩も動きたくない。その勇気さえ失なつた旅館の夜着を著たお客が散歩に出て来てほしい、いやな目つきで見下ろしてゆく。とつとつ交番に行つて旅館の斡旋をたのんだ。ポリさんも仕方がない。桔梗屋旅館に交渉してくれたのでやれやれと上宿がきまつた。素晴らしい一流旅館だが、室は女中部屋かと思われぬ隅っこであった。室は末等でも浴場は一緒、すてきな浴槽

浅間登山 去年の恵那登山で興味と愉快さを身につけた一行は浅間火山へ登ってみようという相談ができ、八月の同じ頃十日間の予定で長野県一周というプランが立つた。毎日二十里を突っ走るんだ。

木曾路の馬籠・寝覚の床等は探勝したが、鳥居峠の自転車は無理だといわれて汽車を利用した。長野市まで延して善光寺に参詣し、上田市を経て小諸から登山にかかった。強引に案内人を頼まなかったが、夜道は登山道と山道といって木を伐り出すために使う道との区別がつかず右往左往ととう迷い込んでしまった。仕方がないので一里以上も戻つて案内人を頼み、あれこれしている間に、頂上でむかえる予定のご来迎が登り口八合目位になつてしまつて、目的を果すのには十分でなかつた。

天下の別荘地軽井沢まで足を伸ばしてといつてみたが、日程の都合で又の機会にと南下して川中島に向つた。

「鞭声肅々夜渡河」の古戦場でその小学校長先生に史蹟の案内をしてもらったこともいい思い出であります。諏訪湖へ出るためには上り三里下り四里の和田峠を越さなくてはならぬ。上りの全部は自転車を引張つた。捨

につかつて登山以来の垢を流した時こそ、心のどん底からありがたいが出ました。

結局日の丸弁当で一円二十銭払いました。

普通客が三円五十銭以上五円という時代です。

今なら千倍それ以上ですから、五千円という

のが珍らしくないし、千二百円というような

木賃宿ありません。

翌日は平坦な下り道で、天竜川を右に左に眺めながら飯田町に出て、蛇原峠を越えて中津川へというコースでした。十日目に村へ着きました。

この大旅行の翌年丁度浅間山へ登つた日に、浅間山が大爆発しました。登山が一年おそいか、爆発が一年早かつたか私共一行の生命問題に関する大事件となるどころでした。ああ幸なりしか。

三、成人時代

大正十三年四月、可児郡視学に榮転されました。

遊びに來いと御手紙をいただいたのにあまえて、小野木紋一氏と二人で御嵩まで自転車を走らせました。鬼岩

温泉の名前で漸く世間に知られ始めた頃なので、温泉に案内されたり、公園を散歩したりして一泊お世話になりました。

高砂旅行会

加藤 嘉雄

時は移って、私が師範学校専攻科に学んだ頃、師範学校附属小学校の主事先生でした。小学校教員のトップクラスの椅子です。欠課時間の時など先生の室を訪ねて教育論を話しあったことがあります。

昭和六年八月、先生を襲った伝染病腸チブスは時の医薬では及びもつかず、四十三才の先生を長逝させてしまったのであります。

私の最も崇敬する恩師、教育界から将来を嘱望されている先生、いわゆる「あと厄」の難に遭って永眠されたことは返えすがえすも残念でたまりません。

中国の古語に「美人薄命」とあります。中国人のいう美人とは賢人偉人を指しています。先生は偉人となる人柄でした。賢人の讃辞は適格でした。若し今まで命長らえさせられたならば、岐阜県教育界の第一人物であることは陽を見るよりも明らかなりと私は申し上げて先生のご冥福をお祈りしつつ思い出の一節を終ります。

大正三年三月尋常科を卒業した私共は七十才になりました。人世七十古来稀なりと申しまして「古稀」といいますが、二月二十日の会合に在村者十二名みんな元氣発刺で青年気分が集まりました。でも耳が遠くなっただけは異口同音のなげきで、自然話し声が大きくなります。

小学校時代の思い出を………加藤
それよりも卒業後の同級会の歩みを………全員
オレンターの同級会は絶対に「他の追従を許さず」だ。
某同級会は喧嘩で一回限りだったとき………富樫
某クラスは大げさなドンチャン騒ぎで五年目にやるげな………永井
オエライ様ばかりで相談が煮えたたんげな………大橋
毎年はいらいで一年おきちゃと………仙石
誰ぞ一べんけんかやらんか………山本

大笑い

今年の同級会はこんな話で、卒業後の歩みを紹介することにした。宴会は阿呆口たたいで、三四時間飲み続ける。だが今年なんか酒一升とビール二本、コーラ十本で魚新料理一級、これで四時間話したが妙。

さて同級会は卒業して十五年目、三柿野の料理屋で他出者も誘って始まった。「男女七才にして席を同じうせず」の時代だから女性は誘わなかった。

岩井君の発案で「正三昭クラブ」と命名した。それ以来今日まで年一回の同級会を継続している。但し戦時中数年は中断のやむなきに至った。でも昭和十七年は四十二才の厄年である。紀元二千六百年である。誰の発起だったか忘れたが全員権原神宮とお伊勢詣りの一泊旅行をやった。

戦争は終わった。従軍者も皆無事に還ったので同級会を開こうとしたが物資がない。鶏をつぶすやら岐阜の魚市場へ自転車で行くやらで、米持ち寄って会食をしたことは今でもなつかしい。いつでも話が出ます。女性はおやさしいお方ばかりで誘っても参加していた

だけない。でも不動山と常貞寺とで恩師と亡き学友の追悼法要を営んだ時には二回とも数名ずつ参加してもらえてうれしかった。

不思議といたいことがある。
男性は七〇%生存、女性は七〇%死亡。
養子縁組で三名同年で加入せられたが六〇才から六五才までに三名とも即ち一〇〇%死亡。
男性の死亡三〇%は三〇才以下で六〇才では誰一人。
結局四十年間同級生を失なわずと大法螺が吹けます。
次は旅行の紹介にうつります。

観劇

長島温泉が始まった時でした。ステキなヘルセンターができたそうだから行こう、そして一泊するか。よからう。翌日は名古屋へ出て御園座で観劇。こんな豪華版もすぐまとまって愉快な一泊旅行だった。

勝浦温泉と那智

岐阜乗合の会員募集に団体申込みをして十五名が参加した。名神高速から奈良五条まではよかったが、十津川上流の風屋峠附近が山道であるのと道路工事中とでへと

へとよってしまった。浦島温泉と新しい魚料理で元気を回復し、那智山に参詣して帰った。

高砂旅行

旅行は秋、会食は春と数年実施したが、秋の旅行に妻同伴にしようかという案が出た、実はやもめが一人あるので言い出すことを遠慮していたがと発案者がいうなり「俺のことは心配ないやってくれやってくれ」と矢つぎ早にやもめさんが言うのですぐ決った。そして月千円の旅行貯金も農協の世話で、円満な団結力旺盛なクラス会はすぐ賛成。会食会の席もグループの家廻りを終戦後から始めたが、部落も加味して先陣競ではないが、来年は僕がと気持ちよく引受けてもらえる。

館山寺温泉

老夫婦の旅行団だから同級高砂旅行会と名付けて第一回を浜名湖の館山寺として途中豊川叱咤尼尊天に参詣することにした。豊橋に居る長繩正雄君が豊川の門前で昼食の準備をしてくれる。大山からは奥村正夫君が同乗する。勿論バスは貸切りである。旅館の宴会には東京の岩井肇君が駆けつける。盛大な宴会だった。奥様連も大へ

んうれしかったようで大成功。

大和めぐり

小学校の歴史で覚えた吉野山、笠置山、四条畷方面は一般観光バスでは行かないようだから行こうか、という案が出たのでプランを組んで、二十五人乗テーブル付のデラックスバスを準備した。

桃山御陵 — 乃木神社 — 平等院 — 法隆寺

橿原神宮 — 笠置山 — 吉野山 — (泊)

四条畷 — 初瀬 — 赤目峡谷 — 伊賀上野 — 亀山

明治生れの我々にはこうした地名がなつかしく、ガイドの歴史物語が一層意義深く、花のない紅葉の桜が一きわ吉野山を偲ぶにふさわしかった。

青葉茂れる桜井の

の唱歌や

笠置の山の行在所

又賊兵におそわれて の唱歌も思い出した。

江の島鎌倉

東の史蹟といえは何といつても鎌倉を第一に指を折る。今度は新幹線利用で鎌倉を訪ねた。鎌倉駅前でタクシー

五台に分乗して鶴岡八幡宮を振り出しに田跡を廻った。

十一月二十三日の休日ですごい人出、マイカーの波、観光バスの数珠つなぎで、徒歩で近道を辿る方がよっぽどよいと思うけどしかたがない。ストップ、ストップで大仏様ではもう日暮近かった。薄暗い稲村ヶ崎を左に眺めて、江の島の旅館に着いたのが七時過ぎだった。東京から岩井君が夜の宴会に参加してくれて、例の顔ぶれではあるが所が変わると興味も一層湧いて面白く宴会がやれるのも妙なものである。婦人連は中途で食事をすまし旅館附近に立並ぶ土産物店で貝細工を買うのに大童であったようです。

翌朝時間を十分かけて江の島を巡りましたが、工事中で岩屋まで行けなかったことは残念でした。

奥能登探勝

高砂旅行会は西と東を交互に選んでいるが、北に行ってみようということになりました。山中、山代、東尋坊あたりは、他の観光団で大体済んでいるから近頃有名になった奥能登がよかろうということになった。プランを組んでみたが一泊では一寸無理と思われる。が四月には

バスの予約もでき、旅館も契約してしまった。

たまたま岐阜市各務原市合同の毎年行なう農協旅行が、同じコースで尚一二ヶ所加えて三泊四日の募集を始めた。団体が大きいだけに日数を十分かけるし旅費も格安である。それに同級生で農協役員が三四名いるので家庭の關係上二人連れでということは無理だろうから自由にして農協旅行団に併呑されることにして、この年は終った。バスも旅館も早目に予約したが、キャンセルも早かったので容易に断りがきいた。

同級会旅行を農協旅行に併呑したのは以前にもあった。三十二、三年頃だった。四国、小豆島、岡山方面の二泊三日旅行に同級生十幾人が申し込み、同一行動をしたこともあったので附記します。

さてその次は……丁度時間となりました。

ではなくて本年のプランを紹介して旅行記事を終ります。

十月二十五・二十六日 事故のない限り二人連

デラックスバスで貸切り

万博公園見学 — 宝塚少女歌劇を観賞 — 有馬温泉(泊)

六甲山ドライブ — 神戸港内ドライブ — 湊川神社

過去の思い出

亀井かな

(旧姓 大沢)

意義深い催しに紙面を通じて、郷里のみな様にお目にかかる機会を得て、拙いペンを取らせて頂きました。

観光地で知られる大山の東、なだらかに広がる丘陵地帯にある純農家です。二男一女に恵まれ主人に力強く支えられ乍ら何の取り得もない私は毎日が家庭と楸の運転手です。ここに思いを故郷に駆せる時、緑したたる矢熊山下の母校での思い出の数々が一入胸あたたまるものを覚えるのでございます。

一年生、二年生頃は、平々凡々だったと見え走る事位い何時も一位だったのでそんな記憶を止める程度、オットそうそう数年前に何十年振りかで先生のお宅で同年会を開いて頂き石屋先生のお元氣なお顔に接して、ほんとうにうれしゅうございました。坪内先生、活発なよい先生でした。その頃に剣道の嗜みもありと聞き及んでお

ります。三年生、小野木紋一先生、いろいろの意味で思

い出が深くよく先生に面倒を見て頂きました。なつかしい、ほんとうになつかしい。体育の時間に雨が降るとよくお話し会をして楽しんだものです。学芸会に「虎と蟻」と題して、みとさんが虎、礼子さん蟻、私が語り手といった拍子でやりました。今もチョッピリ覚えていて、たまたま童心にかへって口ずさみにつこりする事もあります。四年生、この度、大そうご苦労願っている加藤嘉雄

先生、私達が最初の教へ子のように記憶しております。

先生は一番初めに「ねことねずみの組合」と云う題でお話をして頂いたのを覚えております。馬に乗って、学校へ見えた事や特別な祝祭日には、軍服軍帽で長剣をつけて先生ならではの英姿を思い出します。

また運動会には、三十四年生で小野木先生作詞作曲振付けで、前宮の乙女の遊戯をやったのを思い出します。

五年生、六年生は丹羽久克先生、ほんとうに思い出深い読書百べん意自ら通ずとか申しますが、先生のご指導に依って私の人生によりよき人となりを築きあげていただいた事を嬉しく思います。諺、三十一文字の歌よみな

ど時にふれ折にふれ数限りなく教わり又その頃すでに、当用漢字も()して習ったお蔭で今大変助かります。

読む、書く、暗唱と厳格に教示されました。夏休み冬休みの宿題には必ず一つのをしっかり身につけねばなりません。例えば百人一首、ご歴代の天皇、その他まだまだスパルタ式の教育を受けて真実に良かった、ときょう大変に喜んでおります。丁度学芸会に「燈台守の娘」と題して談話をする事が決まった頃に一ヶ月余り遠藤亮一先生に教わった事があります。歴史の時間に仏教伝来は紀元一二二二年「オチニオチニと支那からやってきた」北条氏の滅亡紀元二二三三年「ニクイニクイ北条氏がサンザンにやられた」一升マスの米粒の数、六四八二七、西歴と紀元はどれだけ違うか、六百六十年、国語の字の当て方歴史上の人物などユーモアたっぷり教わりました。歌によわい私はこの頃からクイズに面白さを覚えはじめました。今では少々身につけたクイズやユーモアでバス旅行の折、皆さんを笑はせたりぎこちない身振り手振り一家のスターとして家族を楽しませたり団らんの一時を喜んでいきます。

朝礼には、横山校長先生の訓示もよく聞き綱領もとな

えたものです。運動場を「我が大君の高光るひつぎの御子はかしこくも」のうたを歌って全校生徒で朝行進したものです。あの顔、この顔と思いはつきません。そう云えば陛下のご旅行五十年前の歌で昭和四十六年は一そいう意義深い思い出です。一、二ばんとあつて大正十年三月三日の朝高なわ御所をお出ましになつて横浜港から船でお立ちになるといふ歌でした。修学旅行には伊勢神宮にお参りしました。「伊勢の二月」といえばずい分寒かったです。二見館に泊り朝早くみんなでお日の出を拝みに行こうとした時、板橋先生に呼び止められ寒いからとほんのりあまい香りのただよう先生の毛糸のショールを私の肩に掛けてくださったことを子供心になんともいえないあたたかい思い出として今も襟首に残っています。そして小野木先生が学校はおやめになっていたが私どもの修学旅行にご一緒だったことも……他校との親善試合によく出場しました。種目はリレー例えば草井小学校、蘇原小学校、現犬山高等学校などえ、ランニングシャツに青のパンツといういで立ちで出かけたものです。優勝

旗を一本もらって来た記憶も楽しい思い出です。こうした時も必ず小野木先生がついて応援に行ってくださいました。楽しい、嬉しい数々が今も目にうかび一そうお優しい先生を思い出します。

高一の時家事の時間に石屋先生から、ご飯たきを指名されてたき上りが上々で、「この分ならお嫁に行けるよ」といわれはにかんだ覚えがあります。嫁いで三十五年私共の部落は名物のお日待ちをよくする部落で当番のご飯たきは味の良さで太鼓判を押されるようになったのも先生のお蔭と感謝しています。

野良仕事に出かけたひと時、学校時代のことで主人とよくやりとりする事があります。そうした時私の方が少々有利？と申しますのは一度ならず二度、三度フン……とかぶりを振って主人が感心し、最後に「お前達の学校には立ち打ちならんわ」といって如何に教育の先端を行く学校かと頭を下げてくれた事があります。鶴沼出身の方で現大山中学の校長先生をなさって見えるお方から学校を尋ねられ郷里の学校を申しあげますと「やはりそうだったかね」前宮尋常高等小学校は昔から名実共に

誇り高い学校だからと大そうおほめを頂き郷里を思い浮べて嬉れしさとなつかしさと胸が一杯でした。波打って響いて誉められてかえるその嬉れしさは、又格別でございました。

今は故人となられた両先生のお便りの一節を認めさせて頂きます。丹羽久克先生「郷里なり母校なりをお忘れに相ならぬうちにはもつとも堅実なるお暮らしと推察仕り頼母しく存じ上げ候」小野木紋一先生「矢熊山下の母校で磨き上げた乙女心のご發揮をお願いいたします」両先生の励ましのお便りがあらゆる辛酸をなめ苦難の人生航路のよりよき伴侶として、浅学非才な私が城東婦人会長の重責を二度も果させて頂き、指針となり心の糧となり私の胸深く暗夜の光明として激励してくださった事が地元のご指導ご協力は申すまでもありませんが母校の諸先生方の視野の広い教育の賜と幾度目かしらをあつくして郷里の空に向けて感謝の誠を捧げた事でございましょう。私はよき郷土と地縁血縁に結ばれた事に喜びを感じると共に今後も歩みはのろくとも自分の好きな道を少しでも活かし勉強したいと思っております。

長々と下手な文句の羅列で失礼でございました。終わりにのぞみ稲羽東小学校の繁栄と前途を祝して拙い私のペンを終わらせて頂きます。

前宮小学校創立百年を迎えて

苧谷 さわゑ

リリンと鳴る電話機を取ると、懐しい。石屋先生の声で、今年の前宮小学校創立百年になるから何か思い出を書く様にと、仰っしゃつて下さいましたが、突然の事とて、ピンと来ませんでした。まして非才の私には何も書く様な事が出来ませんよ。先生にその由を告げますと、なんでもよろしい処女会当時のことでも仰っしゃいました。そんならとペンを取る事になりました。

教えていただいた先生方は今は亡くなられ、只梯をしのぶだけです。十一、二才頃から御作法や茶道を、ご指導下さいました石屋先生のみ、今年七十八才のご高令

とは思へない、お丈夫で居て下さるのです。

先生には処女会に入ってから、お料理、のし紙折、リヤン編と、種々教えていただきました事を感謝致して居ります。幼ない頃を振り返ってみますと次々と懐しい思い出が、うかんで参ります。

長平処女会に続いて、下切処女会が、発足されました。当時の校長永田新兵衛先生、女先生としては、加藤うら先生、石屋良仙先生のお骨折で盛大に発会式が挙げられました。私は当時十二才の少女でした。

処女会発会式の時には、先生のすすめられる儘に、十余名の来賓の方々に、お炭燻ぎからの作法に依るお点前でお抹茶をたてて差し上げ、婦人会長で居られた、高崎医院の奥様から御賞に預った事を今尚覚えて居ります。私達の処女会当時としては、前宮処女会は総てにおいて先生方のお骨折で優秀でした。

昭和三年には天皇陛下の御即位式がございました。

その時、石屋先生から、御即位式記念募集に応じて、和歌を、つくって見てわと、すすめて下さいましたが無智の私にはとても自信もございません。初めて和歌の、つ

くり方を御指導いただき、五七五七七字と、綴ってつた
ない作ではございましたが、応募させていただきました。
幸にも四首佳作に入り一首入選したとお知らせをいた
だき本当とは思へませんでした、その後まもなく表彰
状と祝箱（金虫）が送って参りましたので、その時の、
嬉しさは今でも忘れることが出来ません。これも石屋先
生のご指導の賜と深く感謝致して居ります。

思へば創立百年とは云へ私もはや六十四才私より四十六
年前に創立されていたのかと思います、何とも申しよ
うもない懐しさでございます。お恥しい作ではございま
すが入選作はこれでございます。

みくらいにつかれます日にうれしくも

澄みわたりたる秋の空かな

立派な永久建築の学び舎、英雄も偉人もここから産れ出
るんだと大きく期待させていただきます。

先端を行くと云う有様で研究発表なども、稲葉郡の總會
に初めての催でもありましたので、当時の社会主事とい
られた野倉先生の御配慮で、郡から、県から、前宮郷女

会が最初の表彰に預りました。

野倉先生には、度々講師として御招きし、人情話、姑と
嫁の御話、等々涙を流して話して下さる。

先生、私達も何度も涙をふいては聞き入りました。お話
の合間々々に短歌を読みつつ、お話下さった短歌を今尚
口ずさんで居ります。

仏にも優る心と知らずして

鬼婆なりと人はいうらん

この姿見て下されと門に立つ

乞食も己が師匠なりけり

世の中に我に優り志者はなし

傘とりて見よ天の高さを

（市内那加桜町在住）

母校に寄せて

昭和三年卒業 川出たまゑ

此の度前宮小学校百年史が編纂されるとの事、母校な
つかしさに拙いながら仲間入りさせて戴きます。

雨の日も風の日も、下駄をはき、かばんを掛けて山道
を通り、お不動山の麓の学校へ通ったあの日の事は、早
四十余年も昔の事になりました。

体操の時間に、石の仏像の前に小石を置いて数えなが
ら不動山に登った事、前の松林へ行って、体操をしたり、
遊んだりした事、先生に引卒されて、草井の渡を舟に乗
って渡り、飛保の曼陀羅寺へ遠足に行った事、校庭で毎
年行われた大運動会の事等、なつかしい思い出が、後か
ら／＼と湧いて来ます。

あの時の先生方、友達の皆さんは今何うして居られる
事でしょう。消息が知り度いと思います。

戦争、終戦、戦後と、数々の喜びや悲しみ、そして苦

しみ等の思い出を重ねながら、月日は容赦なく過ぎ去っ
て今では五人の子の母であり、七人の孫のおばあちゃん
になってしまいました。

世の中は休みなく進み、何所の家でも車を持ち、電気
製品等も普及して、生活は便利で楽しくなりました。

母校創立百年、校舎も設備も立派になって、此所で学
ぶ生徒の皆さんは本当に幸福です。このよい学校から巣
立った子供達が立派に成人されて、今の平和な暮しが、
何時までも何時までも続けて行ける様、努力下さる事を
祈って止みません。

私の小学校時代の

思い出と経歴

小島 清路

小学校時代の思い出は、五十余年を経過したこの頃で
も、まるで、昨日か一昨日の出来事のように思えて、私

の脳裏から消え去っていない。

嬉しかったこと、悲しかったこと等、数々覚えているが、中でも一番忘れられないのは、私達が学校から遠い僻地に生れた関係で、八ヶ年に亘る通学には、筆舌にはつくし難い程の難儀をしたことである。

私は、前宮でも学校から一番遠距離の山脇から通学したため、往復約七軒の道程を、子供乍ら約二時間を要した。

然も、途中に山坂の難所があり、雨の日も、雪の日も、この坂道を越えなければならぬ。

とくに冬になると、両側の岩間から滲透した清水が、傾斜した岩盤路面に氷結して滑るため、身体を横向にしたり、腰をかかめたりして、恐る／＼小足に登り降りしたが、それでも時々足を滑らし、転倒して怪我などしたことを思い出す。

又、雪の日の通学は大変だった、前記の山坂を登降してから、下切部落までの約一軒は、人家が一戸もなく、道が開いてないため、履物をぬいで手に持ち、足袋ハダシになって、一目散に走り続けたが、途中幾度も凹地に

陥込んだり、道から外れたりして、半泣きになって、やっと下切まで辿りついた頃には、全身が汗ビッシュヨリで、それが後から除々に冷へ込んで、教室では、ふるえ上っていたことも忘れられない。

この様な自然的悪条件に悩まされて、低学年の頃の皆出席は大変だったが、余程の病気が事情がない限り休まなかった。特に冬などの帰りは暗くなるし、寒い西北風に向っており、空腹も重なって随分辛い思いをした。

然し、この様な難儀な通学を永年続けたお蔭で、不知不識の間に、心身が鍛えられ、私の人生に役立ち、如何なる苦難にも堪え得る我慢強い人間に育つことができた。私は、小学校卒業後、種々困難な人生経験を味わったが、初心を忘れず信念的に努力したため、辛いつか、悲しいとかは、少しも思わなかった。

不景気のどん底と言われた、昭和八年の春にふとした機会から、愛知県宮田用水改良事務所の現場事務員に採用されたのが、私の官庁生活のスタートで、以来牛歩遅々と、資格獲得して昇進を続け、昭和十二年には、愛知県技手(判任官)に任官し、県営事業の大江川用水を

始め、上ノ島用水、一宮用水等の現場主任や所長代理等を歴任、昭和二十二年には、国営委託領内川改良事業所長に、愛知県技師や地方技官となり、昭和三十年には、海部農地開発事務所の調査係長に赴任、隅々伊勢湾台風に遭遇したため、津島市まで海となった海部郡一帯の、洪水排除や除塩事業を担当、文字通り寝食を忘れ、生命をかけての督励を続けて、その目的を達成し、他地区に避難された十数名の罹災者を、正月前に我家に迎えることができた。

又、食糧不足の非常対策として、稲作の早期栽培を計画し、木曾川から海部郡までの、新水路を開削取水して、灌漑に間に合わせた。

このことを当時、毎日、朝日、中日等の各新聞が揃って、私の努力が実ったと、紙上写真入で紹介して呉れたことも、思い出の一つである。

その後、一宮農地開発事務所へ転任し、世紀の大事業と言われ、世界銀行の融資まで得て実施された、愛知用水の計画に参画后、国営濃尾用水関連、江南市扶桑町県営畑地灌漑事業の計画着手や、入鹿池の、県営改修計画

着工、木曾川左岸第二濃尾用水の当初計画等に浅学乍ら微力を尺すことができ、技術者として、仕事冥利であったと苦勞を忘れ喜んでいる。

昭和三十九年、地方公務員に定年制はないが、希望退職で退職する風習があるので、先輩の例にならない、数次に亘る知事授賞を思い出に、勤続三十二年余り奉職した愛知県庁を退職した。

その後、望まれて祖父江町の土地改良課長として着任、耕地面積約二千余町歩の大規模県営団地整備事業を計画、翌年農林省に採択され事業に着手、年々続々実施中である。

昭和四十四年春、祖父江町から退職し、永かった私の公務員生活にピリオドを打った。

そして、同年五月美建工業株式会社を設立し代表取締役として、その目的である、土木建築一式工事、建設資材の販売、測量企画設計等を、老骨に鞭打ち頑張っている。

前述のように、私が幾多の困難障害を乗り越え、今日まで働らき続けることができたのは、私の基礎時代、小学

校で職務乍ら親身になってお世話下さった担任諸先生の優れた教育の賜であったことは申すまでもないが、更に、幸か不幸か立地条件の悪い土地に生れ、不知不識の間に忍耐強い人間に育つことができ、併せて、健康な身体に恵まれたことに外ならないと思ひ、晩年のこの頃になつて、天地と、自然の恩恵を際乍ら感謝しつつ毎日を送っている次第である。

終

坊主頭と栗の実

その頃の我が家は学校から各務ヶ原へ通ずる道の傍で山の直ぐ下、大きな竹藪のある誰方かの離れを拝借していました。

丁度関東大震災の時、昼食中でありました母と私は、びっくりして裏の竹藪に逃げ込んだ日の事が目に浮びます。

或日兄達腕白連中は裏山に通ずる道傍の栗の木のゆさぶりにかかりました。仰げば今にもコボレ落ちそうな栗の実は、連中には又とない獲物であつた筈です。六ツ違ひの私も、漁夫の利よろしく天を仰いで此の落ちてくる

前渡の思い出

小山 育彦

私は前宮小学校の卒業生ではありません。従つて本来百年史への投稿は遠慮致すべきかと思ひますが、一才（大正九年）頃より七才迄を前渡で過ごしましたこと。兄の彦憲は今回百年史編纂のお世話をなさいます加藤先生若き日の教え子の一人。弟茂（亡）は前渡の生れ。そし

はずの栗の実を待ち構えていました。

ところがそのうちの一つがイガのまま急降下して、逃げる間もなくツルツル坊主の頭に見事に的中して終いました。勿論ワツと許りの大騒ぎで突きささつたイガの抜き取りやらに腕白共は暫し作業中止。

もう私の頭にはその跡形もありませんが、前宮村から東北の仙台へそして宇都宮、大阪へと、その後は都会生活に明け暮れて来ました私には、幼き日の又とない楽しい秋の思い出であります。あの頃同年令で保ちゃんとう仲良しがありました。今何所でどうしておられますことが!!!

母のしごき

同じ家に住んでいた頃です。次男坊の私は大変に温かい子供でありました。ところが時々未だにフツと目に浮んで来ますのは、何をし出かしたのか、或日矢庭に若き母の小脇に抱えられ、裏山のとある樹に縛り付けられてしまったこと。泣けどわめけど許して貰えず母の怒りの恐ろしさに仲良しも手も出し兼ねたことでしょう。狼も出る噂なのに。

此の厳しかった母も没後二十年余となつてしまいました。

木曾川原の石コロ

その頃の私の家は木曾川の程近く、川岸の松露のとれる松林も見渡せる屋敷の離れをお借りしていました。そのお宅は養蚕もしておられてその時期には大変な忙しさでありました。子供の私達は桑畑に行つては紫色の桑の実で口の周りを染めていた覚えがあります。

又その庭には大きな柿の木があつて、柿の実を睨んでいたら、真黒な長い大きな蛇が、此方をチツと睨んで目とカチ合つて、あわてたこともありました。

夏!!! 数日前の出水で木曾の流れは幾筋にも分れて、子供達には又とない回遊路となりました。例に依つて兄達は水泳に、弟も又ついで行きました。未だに弟妹思いのよい兄貴ですが、その頃のことを斯うして思ひ浮べますとよく遊んで呉れたんだナアと思ひます。

さて水泳ですが、初めの頃は浅瀬で面倒をみてくれていました。が、その後何時迄もかまっておれない、遂にたまりかねてか兄達は此所にいるんだゾと厳命を残して遠泳に